国道 385 号三橋大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告書　第 1 集

下木佐木安堂遺跡
東蒲池蓮池遺跡
西蒲池池田遺跡

－福岡県大川市下木佐木・柳川市東蒲池・柳川市西蒲池所在遺跡の調査－

福岡県文化財調査報告書　第 236 集

２０１２

九州歴史資料館

国道 385 号三橋大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告書　第 1 集

下木佐木安堂遺跡
東蒲池蓮池遺跡
西蒲池池田遺跡

－福岡県大川市下木佐木・柳川市東蒲池・柳川市西蒲池所在遺跡の調査－

福岡県文化財調査報告書　第 236 集

序

福岡県では、平成 16 年度から平成 23 年度にわたり、国道 385 号三橋大川バイパス道路改良事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施してきました。本報告書は平成 16 年度から 21 年度にかけて行った、大川市下木佐木に所在する下木佐木安堂遺跡、柳川市東蒲池に所在する東蒲池蓮池遺跡ならびに同市西蒲池に所在する西蒲池池田遺跡の調査の記録です。

３カ所の遺跡はいずれも有明海沿岸に形成された粘土質地盤の低地に立地しており、近隣には弥生時代から近代までの遺跡が点在しています。今回の調査では、弥生時代後期から中世にいたる生活の痕跡を確認することができました。特に中世においては、鎌倉時代から戦国時代まで蒲池地域に居城を構え、周辺地域を統括していた蒲池氏支配下の村落に関係する遺構を確認し、その歴史の一端を解明することができました。

本報告書が教育、学術研究とともに、文化財愛護思想の普及・定着の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査・報告書の作成にいたる間には、関係諸機関や地元をはじめ多くの方々にご協力・ご助言をいただきました。ここに、深く感謝いたします。

平成 24 年３月 31 日

九州歴史資料館長

館長　西谷　正

例　言

1．本書は、国道 385 号三橋大川バイパス道路改良事業に伴って発掘調査を実施した、大川市下木佐木に所在する下木佐木安堂遺跡、柳川市東蒲池に所在する東蒲池蓮池遺跡ならびに同市西蒲池に所在する西蒲池池田遺跡の記録である。一般国道 385 号三橋大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告の第１集にあたる。

2．発掘調査・整理報告は、福岡県土木部道路建設課（平成 20 年度から県土整備部道路建設課）の執行委任を受けて、平成 22 年度までは福岡県教育庁総務部文化財保護課が実施し、平成 23 年度は九州歴史資料館が実施した。

3．本書に掲載した遺構写真の撮影は、下木佐木安堂遺跡については坂元雄紀が、東蒲池蓮池遺跡については齋部麻矢が、西蒲池池田遺跡については齋部と佐々木隆彦が行い、遺物写真は北岡伸一が行った。空中写真の撮影はそれぞれ九州航空株式会社・熊本航空株式会社に委託し、ラジコンヘリによる撮影を行った。

4．本書に掲載した遺構図の作成は、下木佐木安堂遺跡については坂元が、東蒲池蓮池遺跡・西蒲池池田遺跡については齋部が行い、それぞれ発掘作業員が補助した。

5．出土遺物の整理作業は、文化財保護課太宰府事務所および九州歴史資料館において、新原正典・小池史哲の指導の下に実施した。

6．出土遺物および図面・写真等の記録類は、九州歴史資料館において保管する。

7．本書に使用した分布図は、国土交通省国土地理院発行の 1/50,000 地形図「佐賀」「大牟田」を一部改変したものである。本書で使用する方位は、世界測地系による座標北である。、

8．平成 23 年度から福岡県教育庁総務部文化財保護課の文化財発掘調査業務は、組織改編のため、九州歴史資料館に移管された。

9．本書の執筆については、Ⅰを坂元と齋部が分担し、Ⅲを坂元が、Ⅱ・Ⅳ～Ⅵを齋部が行い、編集は齋部が行った。

目　次

序
例言
目次
図版目次
挿図目次
表目次

Ⅰ　はじめに……1
　1　調査に至る経緯……1
　2　調査・整理の関係者……2
Ⅱ　位置と環境……4
Ⅲ　下木佐木安堂遺跡……7
　1　調査の経過……7
　2　遺跡の概要……7
　3　基本層序……10
　4　検出遺構と遺物……10
　　(1) 土坑……10
　　(2) 溝……12
　　(3) 検出時の出土遺物……18
　　(4) 牡蠣貝殻……18
　5　小結……20
Ⅳ　東蒲池蓮池遺跡……21
　1　調査の経過……21
　2　遺跡の概要……21
　3　基本層序……23
　4　検出遺構と遺物……23
　　(1) 溝……23
　　(2) その他の出土遺物……29
　5　小結……30
Ⅴ　西蒲池池田遺跡……31
　1　調査の経過……31
　2　遺跡の概要……31
　3　基本層序……33
　4　検出遺構と遺物……33

(1) 掘立柱建物跡……34
(2) 土坑……34
(3) 包含層……54
(4) その他の出土遺物……54
5　小結……59
Ⅵ　おわりに……61

図版目次

図版１　１　調査区遠景（南上空から）　２　調査区全景（上空から　上が北）
図版２　１　１号土坑（北から）　２　２号土坑（東から）
３　３号土坑（東から）
図版３　１　２～５号溝（上空から　上が北）　２　６～９号溝（上空から　上が東）
３　９～12 号溝（上空から　上が東）
図版４　１　１号溝土層〔a－a’〕（西から）　２　２・３号溝土層〔b－b’〕（西から）
３　４号溝土層〔g－g’〕（西から）
図版５　１　４・５号溝土層〔c－c’〕（北西から）　２　４号溝土層〔e－e’〕（北西から）
３　４号溝土層下部掘削状況〔e－e’〕（北西から）
図版６　１　４号溝土層〔f－f’〕（北西から）　２　４号溝土層〔d－d’〕（北西から）
３　７号溝土層〔h－h’〕（北から）
図版７　１　７号溝土層〔i－i’〕（北から）　２　７号溝北側ベルト下部掘削状況（北から）
３　８号溝土層〔j－j’〕（北西から）
図版８　１　８号溝土層〔k－k’〕（南から）　２　９号溝土層〔l－l’〕（南から）
３　10 号溝土層〔m－m’〕（北から）
図版９　１　11 号溝土層〔n－n’〕（南から）　２　11 号溝土層〔o－o’〕（南から）
３　11 号溝土層〔p－p’〕（南から）
図版 10　１　11 号溝土層〔q－q’〕（南から）　２　12 号溝土層〔r－r’〕（南から）
３　調査区埋め戻し状況
図版 11　１　出土遺物①　２　出土遺物②
図版 12　１　調査区下層出土牡蠣貝殻①　２　調査区下層出土牡蠣貝殻②
図版 13　１　東蒲池蓮池遺跡全景（南から）　２　調査区西半部（南から）
図版 14　１　１・２号溝（東から）　２　２・３・６号溝（東から）
３　６・９・11 号溝（東から）
図版 15　１　４・７・８号溝（北から）　２　10・11 号溝（東から）
３　７号溝南壁土層
図版 16　１　９号溝中央土層（東から）　２　出土土器・土製品
図版 17　１　西蒲池池田遺跡遠景（南上空から）　２　西蒲池池田遺跡全景（上が北）
図版 18　１　１号掘立柱建物全景（東から）　２　１号掘立柱建物北東隅柱穴礎盤（北から）

３　１号掘立柱建物南東隅柱穴礎盤（北から）
図版 19　１　１号掘立柱建物北西隅柱穴礎盤（南から）　２　１・６号土坑（南から）
３　２号土坑土層（南から）
図版 20　１　２号土坑（南から）　２　３号土坑（北から）
３　４号土坑（南東から）
図版 21　１　５号土坑土層（南から）　２　５号土坑（西南から）
３　７号土坑（北東から）
図版 22　１　８号土坑土層（北西から）　２　10 号土坑土層（南から）
３　10・11 号土坑（南から）
図版 23　１　12 号土坑（南から）　２　13 号土坑（南から）
３　14 号土坑（北から）
図版 24　１　15 ～ 17 号土坑土層（北から）　２　16 号土坑土層（南東から）
３　18 号土坑（東から）
図版 25　１　19 号土坑（北から）　２　22 号土坑土器出土状況（西南から）
３　21・22 号土坑（南西から）
図版 26　１　23 号土坑（南から）　２　24 号土坑　（北から）
３　25 号土坑（東から）
図版 27　１　26 号土坑（北東から）　２　27 号土坑（南西から）
３　28 号土坑（東から）
図版 28　土坑出土土器・陶磁器（1）
図版 29　土坑出土土器・陶磁器（2）
図版 30　その他の出土遺物
図版 31　その他の出土遺物、土製品・石製品

挿図目次

第１図　柳川市の位置 …… 1
第２図　周辺遺跡分布図（1/50,000）…… 5
第３図　下木佐木安堂遺跡周辺地形および調査区位置図（1/2,500）…… 8
第４図　遺構配置図および略配置図（1/200）…… 9
第５図　１～３号土坑実測図（1/40）……11
第６図　１～５号溝土層実測図（1/30）……14
第７図　７～ 12 号溝土層実測図（1/30）……17
第８図　出土遺物実測図（1/2）……19
第９図　蒲池遺跡群周辺地形および各調査区位置図（1/2,500）……22
第 10 図　東蒲池蓮池遺跡遺構配置図（1/100）……24
第 11 図　１～ 11 号溝、調査区壁面土層図（1/30）……26

第 12 図　２・５・７・８号溝出土土器実測図（1/3）……27
第 13 図　その他の遺物実測図（1/3）……28
第 14 図　西蒲池池田遺跡遺構配置図（1/200）……32
第 15 図　基本層序……33
第 16 図　１号掘立柱建物実測図（1/60）……34
第 17 図　１・２・６号土坑実測図（1/30）……35
第 18 図　１・２号土坑出土土器・陶磁器実測図（1/3）……36
第 19 図　３・５号土坑実測図（1/30）……38
第 20 図　３～ 10 号土坑出土土器・陶磁器実測図（1/3）……39
第 21 図　４・13 号土坑実測図（1/30）……40
第 22 図　７・８号土坑実測図（1/30）……42
第 23 図　10・11 号土坑実測図（1/30）……45
第 24 図　12・14 号土坑実測図（1/30）……45
第 25 図　13 ～ 16・18 ～ 22 号土坑出土土器・陶磁器実測図（1/3）……47
第 26 図　15 ～ 17 号土坑実測図（1/30）……48
第 27 図　18 ～ 22 号土坑実測図（1/30）……50
第 28 図　23 ～ 27 号土坑実測図（1/30）……52
第 29 図　24・26・28 号土坑出土土器実測図（1/3）……53
第 30 図　黒色土包含層出土土器・陶磁器実測図（1/3）……54
第 31 図　その他の出土遺物実測図（1）（1/3）……55
第 32 図　その他の出土遺物実測図（2）（36 は 1/4、他は 1/3）……56
第 33 図　その他の出土遺物実測図（3）（1/3）……57
第 34 図　出土土製品・石製品・瓦実測図（1 ～ 3 は 1/3、4 ～ 6 は 1/4）……58

表目次

第１表　国道 385 号三橋大川バイパス関係発掘調査地点一覧・遺跡名相対表……１
第２表　西蒲池池田遺跡遺構番号対照表……59
第３表　東蒲池蓮池遺跡・西蒲池池田遺跡出土土器一覧表……61

Ⅰ　はじめに

1　調査に至る経緯

下木佐木安堂遺跡・東蒲池蓮池遺跡・西蒲池池田遺跡は、一般国道385号三橋大川バイパス建設に伴い発掘調査を実施した遺跡である。

一般国道385号は、福岡県柳川市を起点として佐賀県神埼郡吉野ヶ里町を通り福岡県福岡市を終点とする延長67.7㎞の幹線道路で、1975年に路線指定された。地方生活圏相互を連結するとともに、地域住民の通勤・通学等の日常生活をはじめ、農林業や商工業および観光業等の経済活動に貢献する重要路線と言える。三橋大川バイパスは、この路線のうち柳川市三橋町柳河から大川市大字下木佐木までの延長3.86㎞の区間について、交通混雑の解消および歩行者の安全確保を目的とし計画された。この区間は、近隣の幹線道路である国道442号および有明海沿岸道路を相互に連結する重要な位置にあたるが、元来道幅が狭く、近年の交通量増加・車両大型化による渋滞で幹線道路としての機能が損なわれていた。また歩道整備の遅れにより歩行者、自転車の安全な通行に支障があり、これらの理由が事業計画の背景にあった。

第1図　大川市・柳川市の位置

平成13年度より事業実施され、施工対象用地の解決とともに順次試掘・確認調査を経て、

第1表　国道385号三橋大川バイパス関係発掘調査地点一覧・遺跡名相対表

報告時遺跡名称	調査時遺跡名称	所在地	試掘確認調査日	発掘調査期間	調査面積（㎡）
下木佐木安堂遺跡	下木佐木安堂遺跡	大川市下木佐木	H20.11.26	H20.12.8～H21.1.9	620
東蒲池蓮池遺跡	蓮池遺跡	柳川市東蒲池	H16.7.8	H16.8.6～H16.8.31	158
西蒲池池田遺跡	西蒲池池田遺跡	柳川市西蒲池	H19.11.13・14	H21.6.8～H21.7.17	996
西蒲池門前遺跡	門前遺跡		H18.4.17	H18.9.11～H18.10.13	400
	西門前遺跡		H19.11.13・14	H21.1.9～H21.3.27	1300
	池淵遺跡Ⅲ地点		H22.6.25	H22.7.9～H22.3.15	760
	池淵遺跡Ⅳ地点		H22.6.25	H22.7.9～H22.3.15	
西蒲池池淵遺跡	池淵遺跡Ⅰ地点		H19.11.13・14	H21.11.4～H22.3.29 H22.7.9～H23.3.15	970
	池淵遺跡Ⅱ地点		H19.11.13・14	H23.4.25～H23.10.24	1200

文化財の確認された地点では本調査を実施した。各本調査地点に対応する試掘・確認調査の日程は、平成16年度本調査の東蒲池蓮池遺跡で平成16年7月8日、平成19年度本調査の西蒲池門前遺跡で平成18年4月17日、平成20年度本調査の下木佐木安堂遺跡で平成20年11月26日である。残りの平成20年度本調査の西蒲池門前遺跡、平成21年度本調査の西蒲池池田遺跡、平成21･22年度本調査の西蒲池池淵遺跡（Ⅰ地点）、平成23年度の西蒲池池淵遺跡（Ⅱ地点）は、いずれも平成19年11月13・14日の試掘・確認調査で大枠の調査範囲を把握した。また、平成21年度に、西蒲池門前遺跡において、バイパス道路と現国道385号との連結道路の設置に伴う付帯工事が追加されたことから、平成22年6月25日に工事予定地の確認調査を実施し、調査範囲を把握した。

調査時点での遺跡･調査区の名称の設定にあたり、道路や水路等で区分された範囲について、年度内で連続して近隣箇所を調査した際に、同一遺跡名で異なる調査区として設定した場合がある。その結果、小字との対応や遺跡の内容による遺跡名・調査区相互の関連性に齟齬があるなどし、既存の包蔵地の括りで捉えても解消されない点があった。そこで、報告にあたっては、柳川市教育委員会と協議の上、調査成果に則して遺跡名および報告の括りを整理することとした。調査時と報告時の名称の対照は第1表に示しており、大川市所在の下木佐木安堂遺跡以外は近接しているため、ある程度の広がりをもって連続する蒲池遺跡群内に、複数の遺跡が包含される形になる。なお、報告以前における発見届等の各種文書や年報等、出土遺物の注記では旧名称での記載である。

事業区間のうち、本調査不要もしくは本調査終了の地点での施工の結果、起点から東蒲池交差点までの780 m（東蒲池蓮池遺跡調査地点含む）が平成20年に供用され、大川市鬼古賀から終点の大川市下木佐木までの1,540 m（下木佐木安堂遺跡調査地点含む）が平成22年に供用されている。

2　調査・整理の関係者

	平成16年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度
福岡県教育庁総務部文化財保護課						
総括						
教育長	森山　良一	森山　良一	森山　良一	森山　良一	杉光　誠	杉光　誠
教育次長	清水　圭輔	楢崎洋二郎	楢崎洋二郎	亀岡　靖	荒巻　俊彦	荒巻　俊彦
総務部長	中原　一憲	大島　和寛	荒巻　俊彦	荒巻　俊彦	今田　義雄	今田　義雄
文化財保護課長	井上　裕弘	磯村　幸男（本副理事）	磯村　幸男（本副理事）	平川　昌弘	平川　昌弘	伊崎　俊秋
副課長		佐々木隆彦	池邉　元明	池邉　元明	伊崎　俊秋	
参事兼課長補佐	平野　義峰	中薗　宏	前原　俊史	前原　俊史	日高　公徳	
参事兼課長技術補佐	川述　昭人	池邉　元明	小池　史哲	小池　史哲	小池　史哲	
	木下　修	小池　史哲	伊崎　俊秋	伊崎　俊秋		
参事	新原　正典	新原　正典	新原　正典			

庶務

管理係長	稲尾　茂	井手　優二	富永　育夫	富永　育夫	富永　育夫
庶務担当	末竹　元	渕上　大輔	藤木　豊	近藤　一崇	近藤　一崇

調査・整理報告

調査第一係長	小池　史哲	小田　和利	小田　和利	吉村　靖徳	吉村　靖徳
調査・整理報告担当	齋部　麻矢 （南筑後教育事務所）	岸本　圭	坂元　雄紀	齋部　麻矢	齋部　麻矢 坂元　雄紀 （ｱｼﾞｱ文化交流ｾﾝﾀｰ）

九州歴史資料館

総括

館長	西谷　正
同副館長	南里　正美

庶務

総務室長	圓城寺紀子
庶務担当	近藤　一崇

調査・整理報告

参事兼文化財調査室長	飛野　博文
調査・整理報告担当	齋部　麻矢
	坂元　雄紀 （ｱｼﾞｱ文化交流ｾﾝﾀｰ）

Ⅱ　位置と環境

下木佐木安堂遺跡が所在する大川市および東蒲池蓮池遺跡・西蒲池池田遺跡が所在する柳川市は福岡県の南部に位置し、矢部川水系花宗川、太田川およびクリークを挟んで南北に接する。

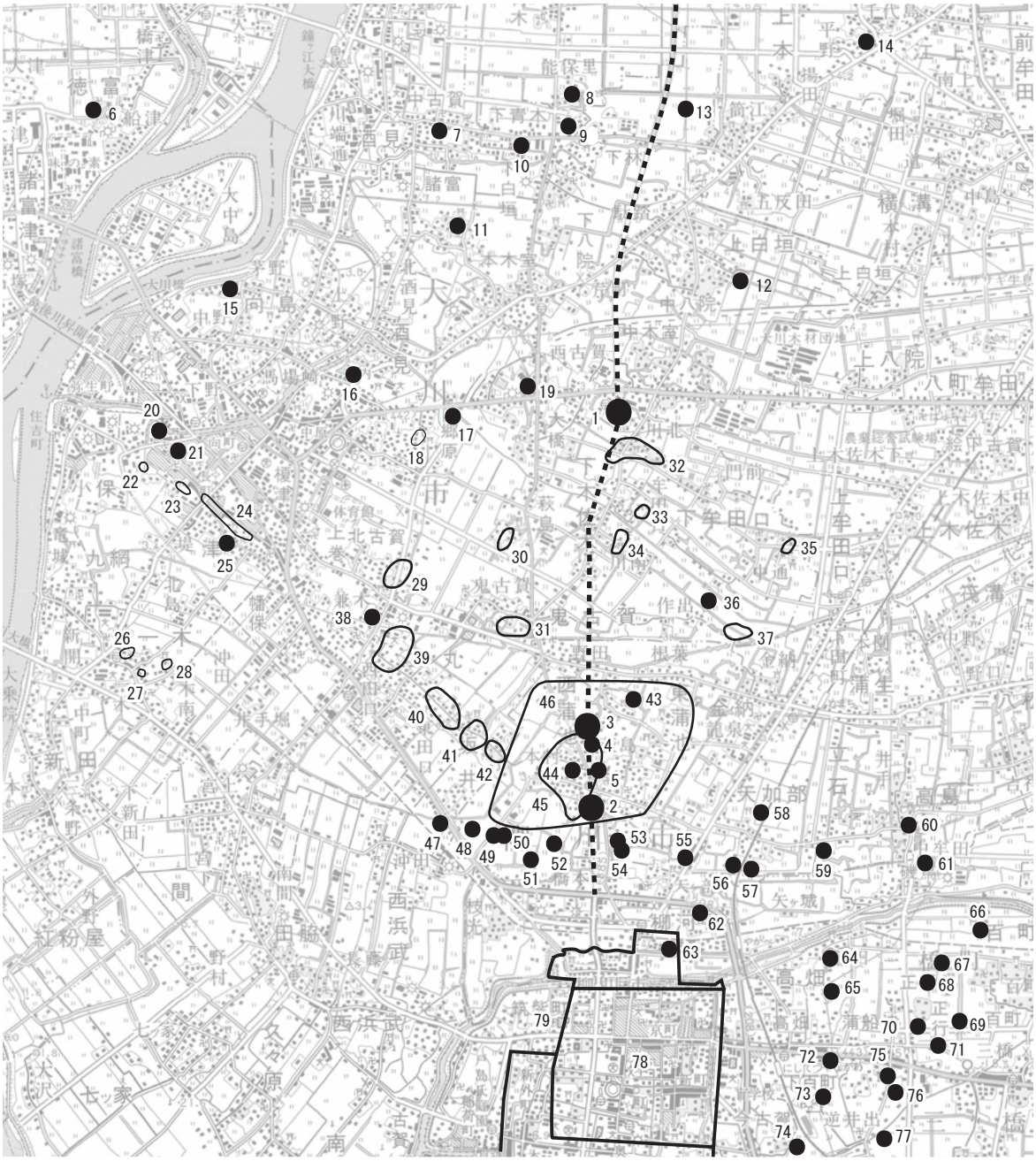
両市が所在する筑紫平野は有明海の湾奥に面し、南東を耳納山地・筑肥山地、北西部を脊振山地、北東を古処山、馬見山などに囲まれている。九州最大の河川である筑後川や矢部川、嘉瀬川、六角川などの河川により形成された九州最大の平野である。大川市・柳川市が所在するのはこのうちの筑後平野または南筑平野と呼ばれる沖積平野で、有明海沿岸地域に含まれる。この沖積平野の形成は、縄文海進に伴う海面上昇のために東シナ海に浅い大陸棚が出現したことに関係しているとされる。非海成粘土層の有明粘土層と、海成粘土層の蓮池粘土層で構成されており、表層部に５－10ｍ堆積する有明粘土層は粘土やシルトを主体とする極めて軟弱な海成粘土層である。その形成については、筑後川と矢部川やその支流による大量の土砂の堆積と河口に発達する干潟によるものとされているが、近年では、海成層と非海生層の分布から有明粘土層が、世界最大と言われる有明海の大きな潮位差により、海底から巻き上げられた浮泥が河口から遡って堆積して形成されたという研究結果も発表されている。

大川市は北は久留米市の旧城島町、東は三潴郡大木町、西は筑後川を挟んで佐賀県佐賀市と接する。家具生産量日本一を誇り、木工製品の製造・流通で全国的に有名な市である。これは大川市が筑後川の河口にあり、木材の産地・日田から川を下ってくる材木の集積地として栄えたことから造船業が発達し、海上交通の要衝として重要な役割を果たしてきたことに由来する

柳川市は東はみやま市、北は大木町・筑後市と接し、南西は有明海に面し一部筑後川を挟んで佐賀県佐賀市と接する。江戸時代より干拓による湿地の開発が進められ、有明海漁業やのりの養殖も盛んである。また江戸時代より整備された市内を縦横無尽に走る掘割が特徴であり、この独特の環境と景観を観光業とリンクさせて主要な産業としている。

大川市・柳川市では、現在のところ縄文時代以前の遺跡・遺物は確認されておらず、調査および表採において確認されるのは弥生時代前期以降のものである。またこれまで開発による発掘調査が少なかったため、遺跡そのものの解明については不明な点が多かったが、近年、有明海沿岸道路や九州新幹線建設に伴う発掘調査において多数の遺跡が調査されており、各時代の様相が明らかになりつつある。

弥生時代前期では、大川市域では酒見貝塚で遺物が、下林西田遺跡では遺構・遺物が確認されており、ともに筑後川左岸に形成された自然堤防上に立地する集落と捉えられる。柳川市域では旧大和町域の徳益八枝遺跡において弥生時代前期～中期初頭の掘立柱建物などが調査されている。また蒲船津地区･蒲池地区は弥生時代前期遺構の土器の散布地として周知されており、蒲船津江頭遺跡においても前期の遺物包含層が確認されている。中期になると遺跡の数は増加し、有明海沿岸地域の各地域で生活範囲が拡大する。前出の下林西田遺跡は中期初頭から前半が集落の最盛期であり、徳益八枝遺跡・酒見貝塚においても前期に引き続き遺構・遺物が確認される。また柳川市域西部の磯鳥フケ遺跡では､中期後半の礎盤構造の掘立柱建物や土坑など、集落を形成する遺構がまとまって調査されている。扇ノ上遺跡では支石墓の上石と甕棺墓群が



1	下木佐木安堂遺跡	17	郷原北田遺跡	33	天神林遺跡	49	西蒲池将監坊遺跡	65	蒲船津水町遺跡
2	東蒲池蓮池遺跡	18	郷原遺跡	34	下木佐木遺跡Ⅱ	50	西蒲池古溝遺跡	66	松の木三十六遺跡
3	西蒲池池田遺跡	19	内平原遺跡	35	馬場遺跡	51	扇ノ内遺跡	67	赤太郎遺跡
4	西蒲池池淵遺跡	20	榎津城跡	36	西田口村城跡	52	西蒲池下里遺跡	68	一本松遺跡
5	西蒲池門前遺跡	21	榎津遺跡	37	鬼古賀遺跡Ⅰ	53	東蒲池大内曲り遺跡	69	日渡遺跡
6	徳富権現堂遺跡	22	栗木町遺跡	38	西田口村城跡	54	東蒲池榎町遺跡	70	ヘータカサン遺跡
7	中古賀遺跡	23	小保遺跡	39	三丸中小路遺跡	55	矢加部町屋敷遺跡	71	地蔵堂遺跡
8	能保里遺跡	24	津村貝塚	40	三丸東田口遺跡	56	矢加部五反田遺跡	72	蒲船津城跡
9	下林西田遺跡	25	津村城跡	41	宮ノ前遺跡	57	矢加部南屋敷遺跡	73	浮島天神遺跡
10	北境遺跡	26	浦田遺跡	42	園田遺跡	58	玉垂命神社遺跡	74	逆井出遺跡
11	諸富遺跡	27	北島ノ一遺跡	43	中村遺跡	59	阿弥陀屋舗遺跡	75	蒲船津西ノ内遺跡
12	中八院遺跡	28	宮ノ後貝塚	44	三島神社	60	東小路遺跡	76	徳益八ッ枝遺跡
13	下林遺跡	29	北古賀遺跡群	45	蒲池弥生遺跡	61	磯鳥フケ遺跡	77	今古賀城跡
14	北ノ屋敷遺跡	30	前田遺跡	46	蒲池遺跡群	62	南矢ヶ部遺跡Ⅰ	78	柳川城郭
15	西新開遺跡	31	鬼古賀遺跡Ⅱ	47	坂井長永遺跡	63	南矢ヶ部遺跡Ⅱ	79	柳川城郭関連遺跡
16	酒見貝塚	32	下木佐木遺跡Ⅰ	48	西蒲池古塚遺跡	64	蒲船津江頭遺跡		……385 号バイパス路線

第２図　周辺遺跡分布図（1/50, 000）

検出されており、蒲池所在の三島神社の石橋に使用されている巨石は支石墓の上石とされる。後期になると集落分布域はさらに拡大し、特に柳川市域では一本松遺跡・正行西の頭遺跡・松の木遺跡・日渡遺跡など多数の遺跡が認められる。蒲船津江頭遺跡・蒲池遺跡群池淵遺跡では後期から集落が出現し、特に終末～古墳時代初頭にいたって生活痕跡が増大して最盛期を迎え、古墳時代前期まで継続する。遺構としては複数回建て替えられる掘立柱建物群の居住空間と、土器が埋納された土坑もしくは井戸、溝などが数多く検出され、完形品を多数含む大量の土器が出土している。同様の遺跡は佐賀県の平野部でも調査されており、有明海沿岸地域に特徴的な集落の姿と捉えられる。

古墳時代で確認されている遺跡は多くないが、柳川市のヘータカサン遺跡や地蔵堂遺跡で集落遺跡が確認され、大川市平原遺跡においては5世紀代の遺構も確認されている。また蒲船津地区や蒲池地区の遺跡においても、少ないながら6世紀代の遺構・遺物が確認されている。

古代において集落と考えられる明確な遺跡は現段階では確認されていないが、西蒲池下里遺跡・西蒲池将監坊遺跡・西蒲池池淵遺跡など蒲池地区の各遺跡で奈良時代の遺物が出土している。また、西蒲池古塚遺跡・西蒲池将監坊遺跡・西蒲池古溝遺跡・西蒲池下里遺跡では平安時代の条里に関連する溝が多数確認されており、表層条里の残る地域内での条里遺構の確認と、蒲池地域における条里地割の開始時期について貴重な成果を得ている。

中世においては、今回報告する西蒲池池田遺跡をはじめとして、柳川市域で多数の遺跡が確認されている。戦国時代の大川市・柳川市域は、柳川市蒲池を拠点とする蒲池氏と大和町鷹ノ尾を拠点とする田尻氏によって統治されていた。蒲池地区には蒲池氏が居城した「蒲池城」の存在が推定されており、現在有志によって「蒲池城之碑」が建てられている。戦国時代末期に蒲池氏は滅亡するが、矢加部南屋敷遺跡では中世後期の輸入陶磁器が多数出土しており、当時の蒲池氏の勢力の一端を垣間見ることができる。

近世においては、江戸時代初頭に柳川城を居城とする田中吉政の領地となり、その指示により柳川城周辺の掘割整備や矢部川の治水、有明海の干拓堤防の築堤など城下町の基盤と財政的な基盤を固めていく。柳川市大和町鷹尾から大川市酒見に及ぶ堤防は「慶長本土居」としてその姿をとどめており、当時の大工事の様子を偲ばせる。その後筑後南部は立花氏の領地となり、大川市では現在も大名屋敷が居並ぶ地区が往時の姿を偲ばせる。柳川市域においては、「国指定名勝立花氏庭園」をはじめ美術工芸品の収集資料など立花氏の遺産が残り、また発掘調査においても柳川市矢加部地区を中心に近世～近代の集落が確認され、遺物も多数出土している。これらは現存する史跡や名勝、美術工芸品などとあわせ、当時の柳川城下の様相を詳らかにする資料として貴重なものである。

参考文献

柳川市 1999『地図のなかの柳川―柳川市史　地図編―』

大川市教育委員会 1994『酒見貝塚』大川市文化財調査報告書　第2集

柳川市教育委員会 2006『磯鳥フケ遺跡』柳川市文化財調査報告書　第1集

福岡県教育委員会 1998『下林西田遺跡』福岡県文化財調査報告書　第132集

福岡県教育委員会 2007『西蒲池大内曲り遺跡』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第2集

福岡県教育委員会 2011『蒲船津江頭遺跡Ⅲ』有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第10集

下木佐木安堂遺跡

Ⅲ　下木佐木安堂遺跡

１　調査の経過

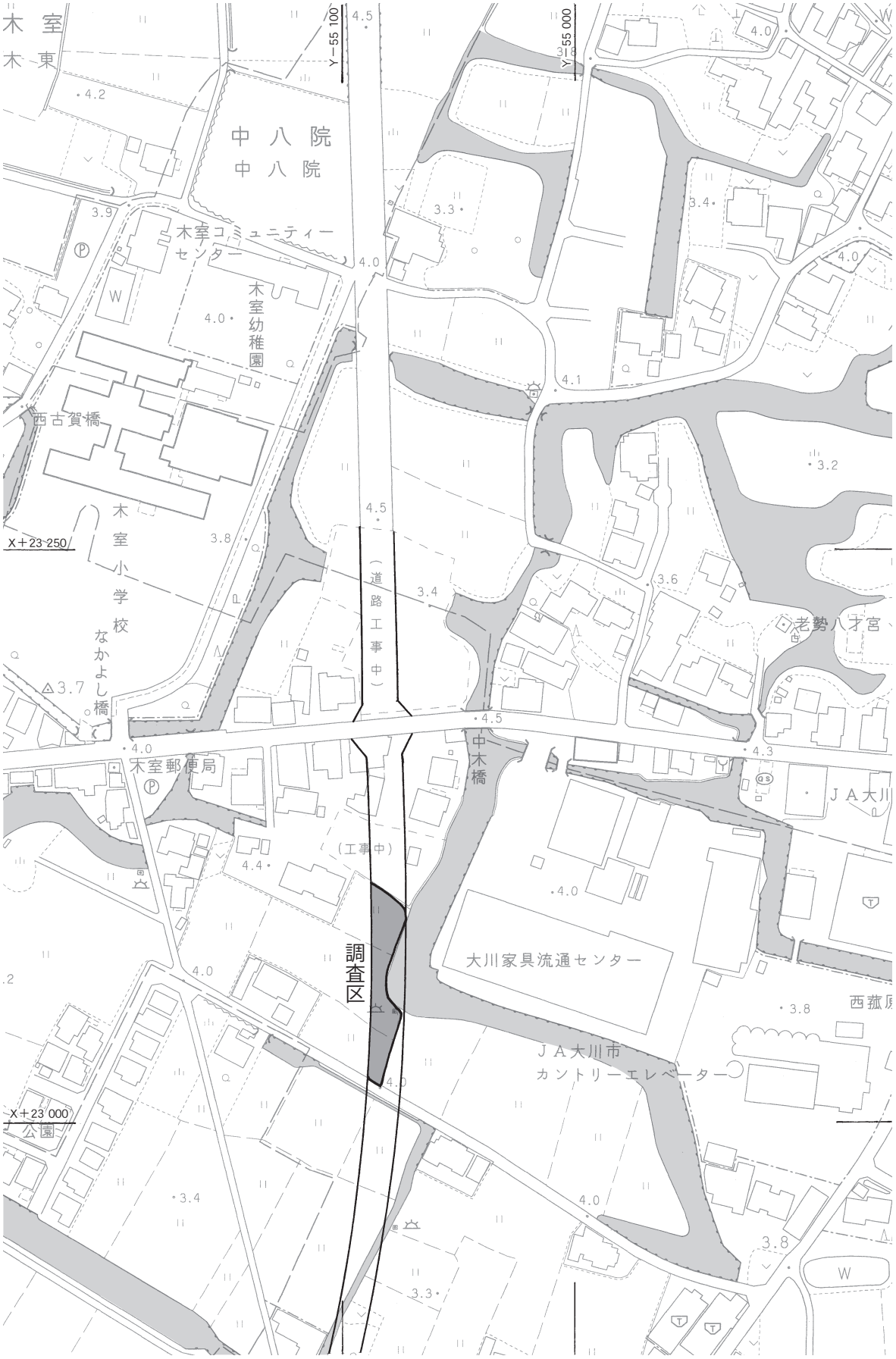
下木佐木安堂遺跡の調査は、平成 20 年 12 月 8 日から平成 21 年 1 月 9 日にわたって実施した。バックホーを 12 月 8 日に搬入し、表土掘削を開始した。調査地点はほぼ全域が田畑であり、まず再利用される耕作土を分けて掘削・仮置きした後、遺構面までの掘削を行った。12 月 10 日より作業員の人力による作業を開始した。調査面は一旦乾燥したり雨水にさらされて泥質化したりすると、再度の検出が著しく困難となる性質のため、バックホーでの表土の除去と並行して遺構の検出作業を行った。12 月 12 日より土坑、溝と順次人力による遺構掘削を続けていき、図面の作成も進めていった。その後溝の埋土は、視認しやすい上層の灰褐色土のみではなく、地山に近似したものがかなり下位まで続くことが確認できた。そのため、12 月 17 日から一部溝下位の掘削を行ったが、内部が非常に狭小な上にグライ化しているため壁面の確認が困難であった。また、壁の立ち上がりが急峻なために安全面の考慮が必要であったり、クリークに近接するために一定程度掘削すると湧水したり、また特に下位ではほとんど遺物が出土しなかったりという状況を勘案して、基本的に溝の掘削はほとんど上層までで、切り合い等の観察に止めることとした。平成 20 年の作業は 12 月 26 日までで、この時点で掘削作業はほぼ終了した。

平成 21 年の作業は 1 月 6 日より開始して調査区の清掃を行い、7 日にラジコンヘリによる空中撮影を実施し、残った図面の作成や写真撮影を終了した。なお、同じく国道 385 号バイパス関連で柳川市東蒲池に所在する西蒲池西門前遺跡へと続けて移行するにあたり、発掘機材やユニットハウスをはじめとした建機類をそちらの地点へと移動する形で撤収した。1 月 8 日にはバックホーを搬入し、部分的に 3 m近く掘削して先述の溝下位の掘形を確認するとともに、調査区の埋め戻しを行った。1 月 9 日に埋め戻しの完了とともにバックホーを搬出し、下木佐木安堂遺跡における調査を終了した。水はけの著しく不良な地盤にもかかわらず、幸いにも降雨の影響をほとんど受けなかったため、調査期間は正月前後の休止を挟んでも約 1 ヶ月程度であった。

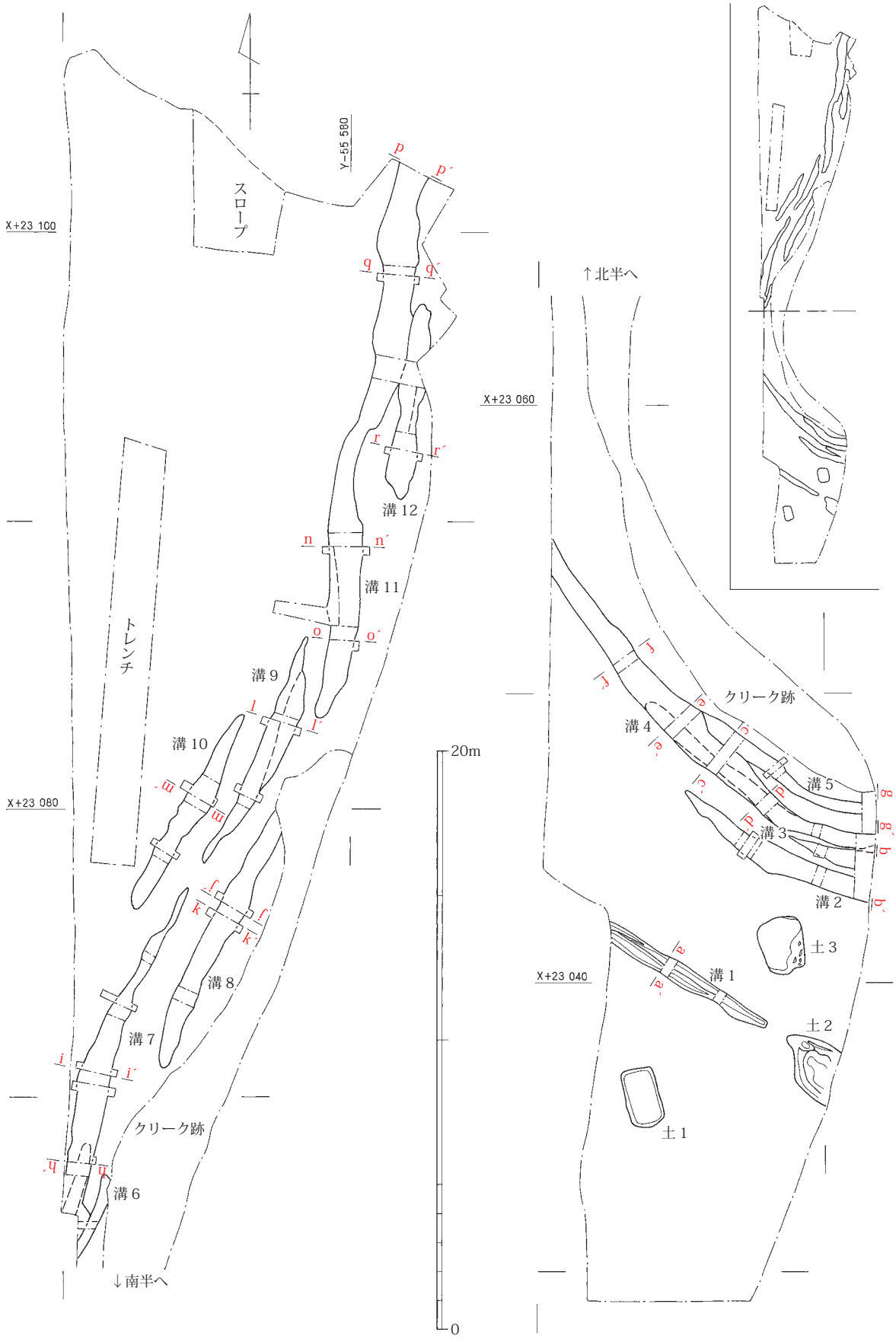
２　遺跡の概要

調査区は、国道 385 号バイパスと国道 442 号線が交わる木室小学校東交差点から南側へ 50 m程度の地点である。筑後川の堆積作用と有明海の潮汐により形成された低平地上で、調査前の田畑の地表高は標高 3 m程である。そのため、調査区内の堆積層は軟弱な粘質土が主体である。また、調査区東側ではクリークが隣接する。水田地帯の広がる周辺地域は、用排水路の機能を果たすクリークが網の目のようにはりめぐらされる部分もあり、この地方の景観を特徴づけている。

調査区は南北長 72 m程度、東西幅で最大 13 m程度、面積は 620 ㎡で、調査面の標高は 2.7 ～ 3.0 m前後である。検出した遺構は土坑と溝で、ピット等の小さな遺構は皆無である。土坑は 3 基検出され、いずれも大型である。溝は最も南側のもののみ明瞭に判別できる埋土で、それ以外のほとんどについて非常に特徴的な埋土、掘方が認められる。これらの溝は、幾度も埋め戻しや



第３図　下木佐木安堂遺跡周辺地形および各調査区位置図（1/2,500）



第４図　遺構配置図および略配置図（1/200）

掘り返しを経ているようで、平面的に同一の遺構に見えても厳密には複数の単位に分割できるものもある。埋土の大部分は、淡黄灰褐色の地山に非常に近似して視認しづらいもので、また遺構の下位でグライ化した青灰色粘質土中ではより埋土の識別は困難であった。これらの溝は調査区の東に隣接するクリークの外郭に沿うように連って展開している。

なお、検出面より3m程度下位（標高0m弱）では天然の牡蠣礁跡となっており、閉塞したままのマガキ（ナガガキ）貝殻が無数に認められた。

土坑、溝ともに出土遺物は非常に少なく、土師器（弥生土器の可能性のあるものも含む）、須恵器や陶磁器類がパンケース1箱分のみ出土した。遺物の時期としては、判別できるもので古墳時代、中世、近世と幅が広く、遺構からも各時期混在して出土するような状況である。また、そのほとんどが小片であるとともに、ローリングを強く受けており、図示できるものも少ない。そのため、二次堆積や混入等の条件での複合的な制約を勘案すべきで、遺構の時期を明確な論拠をもって提示するのは、かなり困難であると言える。

3　基本土層（第5・6・7図）

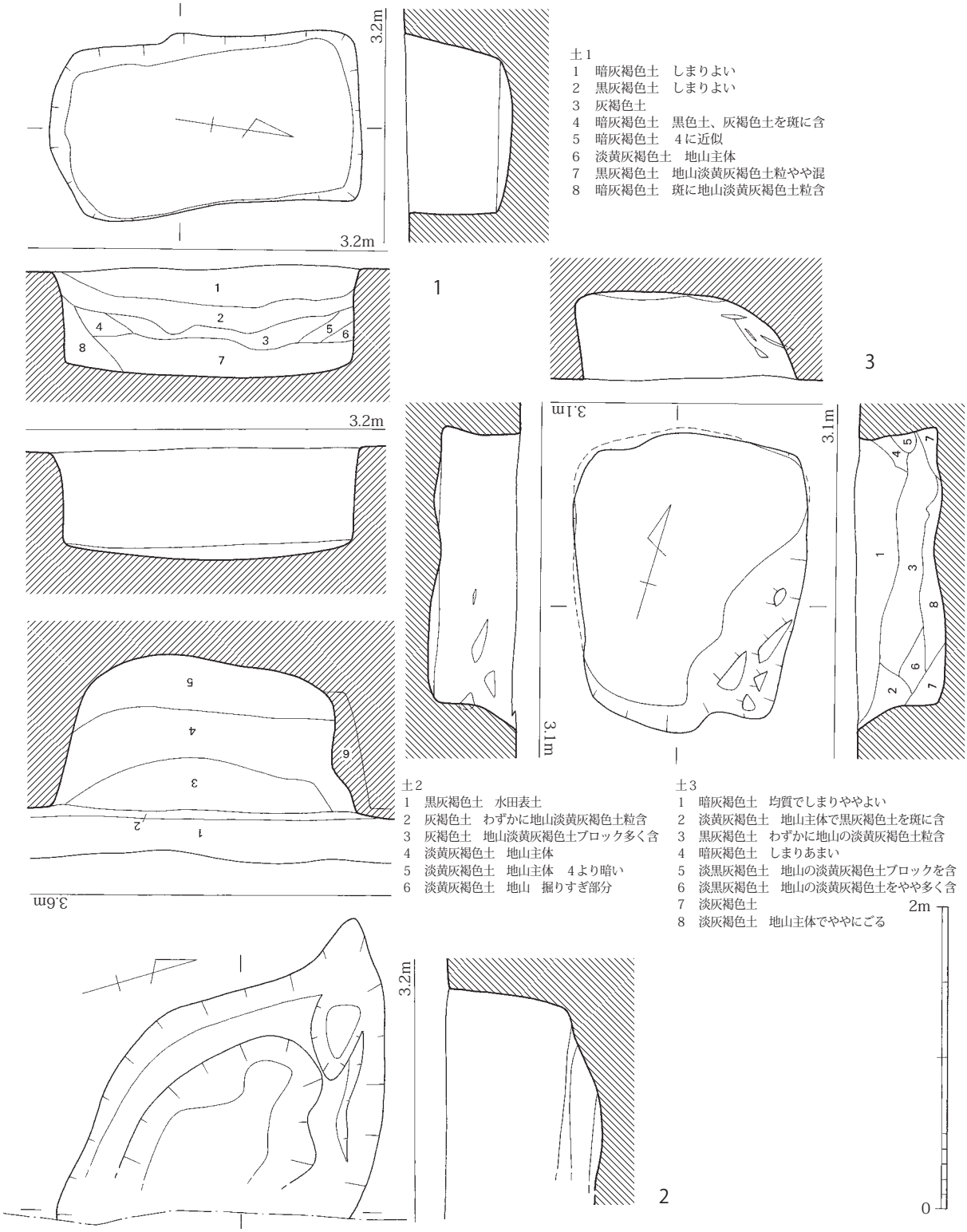
調査区壁面で遺構の土層とともに記録した基本土層は、2号土坑部分（第5図）と溝と関連して〔b－b'〕〔g－g'〕〔p－p'〕（第6・7図）に見られる。調査区南側の2号土坑付近と〔b－b'〕、〔g－g'〕では、調査以前が田畑であったため最上層は厚さ20～30㎝程度の黒灰褐色土である。その下位では、共通して厚さ10㎝程度の灰褐色粘質土の包含層が堆積する。〔g－g'〕では両層の間に淡黄褐色土層が見られるが、この層は鉄分沈着等の上層からの影響を受けたものである可能性も考えられる。2号土坑は灰褐色包含層の下位に遺構面があるが、溝については後述する〔g－g'〕も含めて灰褐色包含層を切り込んで掘削されている。灰褐色包含層の下位では淡黄灰褐色粘質土の基盤層となり、更にそこから1m程度下位で青灰色粘質土となるが、これはグライ化による変色のため、堆積単位を反映したものとは言い難い。調査区北側の〔p－p'〕では、北側調査区外が造成地で最上層には厚い客土の真砂土が見られる。その直下では薄い暗青灰色粘質土層が見られるが、これは上位の真砂土層での滞水によりグライ化の影響を受けたものと考えられる。更に下位では調査区北側の〔g－g'〕と同様に淡黄褐色土、淡灰褐色包含層と続き、基盤層の淡黄灰褐色土に至る。なお、この基盤層となる淡黄灰褐色土層の上面は、南側では標高3.1m前後であるのに対し、北側では標高2.9m前後とやや低くなっている。

4　検出遺構と遺物

(1) 土坑

1号土坑（図版、第5図）

調査区内で最も南側に位置する遺構で、長軸210㎝弱、短軸120㎝弱程度の平面長方形に近い土坑である。深さは70数㎝で、壁の立ち上がりは、全体的に急峻な傾斜となっている。底面は中央部に向かってやや深くなるが、起伏のほとんどないほぼ平坦な構造である。埋土は、灰褐色土、暗灰褐色土、黒灰褐色土の各層が重なり合っている。一部には地山に近似する淡黄灰褐色土層もわずかに見られる。3号土坑とは近似した主軸をなしている。出土遺物は土師器の小片がわ



第５図　１～３号土坑実測図（1/40）

ずかに出土したのみで、図示できるものはなく、時期の判断は困難である。

２号土坑（図版２、第５図）

調査区南側の東側壁付近に位置しており、ある程度の範囲は調査区外に及んでいる見られるる。調査区内で確認できる平面は円形に近く径 180 ㎝程度に相当すると見られるが、やや不整な部分

もある。壁の立ち上がりは非常に急峻な傾斜であり、深さは100㎝強である。底面はテラス状の部分で緩い段を伴って変化しつつ、中心に向け深くなる。また、一部で部分的に深くなっており、底面は起伏に富んでいる。埋土については、上層で地山淡黄灰褐色土ブロックを含む灰褐色土層が30㎝程度堆積し、それより下位は上下に分かれるものの基本的に地山に近似した淡黄灰褐色土である。このような埋土ということもあり、平面的な検出時にも非常に困難を伴った。出土遺物は、土師器、陶磁器、瓦質土器の小片や軽石小片である。図示できるのは、近世以降の所産の小片のもののみで、また瓦質土器片は中世後期とみられるものの著しいローリングを受けているなどし、時期の判断は困難である。

出土遺物（図版11、第8図1～3）

1は径の非常に大きな陶器鉢の口縁部の小片である。内面には白化粧土を施した後に櫛状工具による掻き取りで施文される。2は陶器土瓶の胴部下位の小片である。松の鉄絵が施されていたとみられ、外面にのみ灰釉が施される。近世後期の所産である。3は磁器染付碗の口縁部小片で、内面一重、外面二重の網目文が見られる。18世紀後半から19世紀前半の所産である。

3号土坑（図版2、第5図）

調査区南側で、2号土坑・1号溝の北側および2号溝の南側に位置する。平面はやや不整な部分もあるが隅丸長方形に近く、長軸200㎝前後、短軸150～160㎝程度で、深さは60㎝程度である。壁は主として非常に急峻な傾斜であり、オーバーハングする部分も少なからず見られる。ただ、東南部分に関しては、複数の小さく不整なテラス部分を生じながら、緩やかに落ち込み、また底面もわずかながら起伏がある。上層は、一部地山主体の淡黄灰褐色土層があるが、暗黒褐色土、黒灰褐色土、暗灰褐色土等の暗い埋土が主体で、一方底面近くでは淡灰褐色土の明るい層が堆積している。1号土坑とは近似した主軸をなしている。遺物は出土していない。

(2) 溝

溝の大半には、埋土・掘方に際立った特徴が見られる。埋土については、上層では識別しやすい灰褐色土が主体であるのに対し、下層を中心に大部分では淡黄灰褐色で地山に近似して識別しがたい。また、一定の深さとなると地山ともどもグライ化で青灰色となり、両者の区分はより一層困難となっている。これらの溝は、幾度も埋め戻しや掘り返しを経ているようで、平面的に同一の遺構に見えても厳密には複数の単位に分割できるものもある。地山に近似した埋土は、ほとんどの部分において深さ1m以上下位に続く部分が多いとみられるが、内部が非常に狭小な上にグライ化で壁面の確認が困難で、また急峻な壁の傾斜や近接したクリークの影響による湧水等から安全面の配慮が必要であった。そこで、特に下位ではほとんど遺物が出土しない状況も勘案して、基本的に溝の掘削はほとんど上層までとして、切り合い等の観察に止めている。調査終了直前に、バックホーで溝のベルト付近を2カ所トレンチ状に深く掘削して、掘方全体の確認を行った。

1号溝（図版4、第6図）

調査区南側に位置し、溝の中で最も南側にあたる。北西南東の方向軸の直線的な溝で、2号土坑付近で南東端となって途切れているが、調査区西壁から外側へは更に延びていると考えられる。主に幅55㎝程度、深さ20㎝程度で、本遺跡の中で少数の浅い溝である。底面に段差の生じてい

る部分があり、ベルトの土層からも暗灰褐色と暗灰茶褐色のやや異なる埋土での切り合いが見られる。よって、掘り返し等での少なくとも2条分の切り合いからなる遺構と言える。土師器、陶磁器類の小片が多数出土しているが、図示できるものはわずかで、またほとんどがローリングを受けており、時期の判断は困難である。

出土遺物（図版11、第8図4～6）

4は須恵器大甕の胴部片で、外面に格子目タタキ、内面に平行タタキが施される。5は陶器鉢小片で、外面に白化粧土、外面に透明釉が施される。6は龍泉窯系青磁皿の口縁部小片である。

2号溝（図版3・4、第6図）

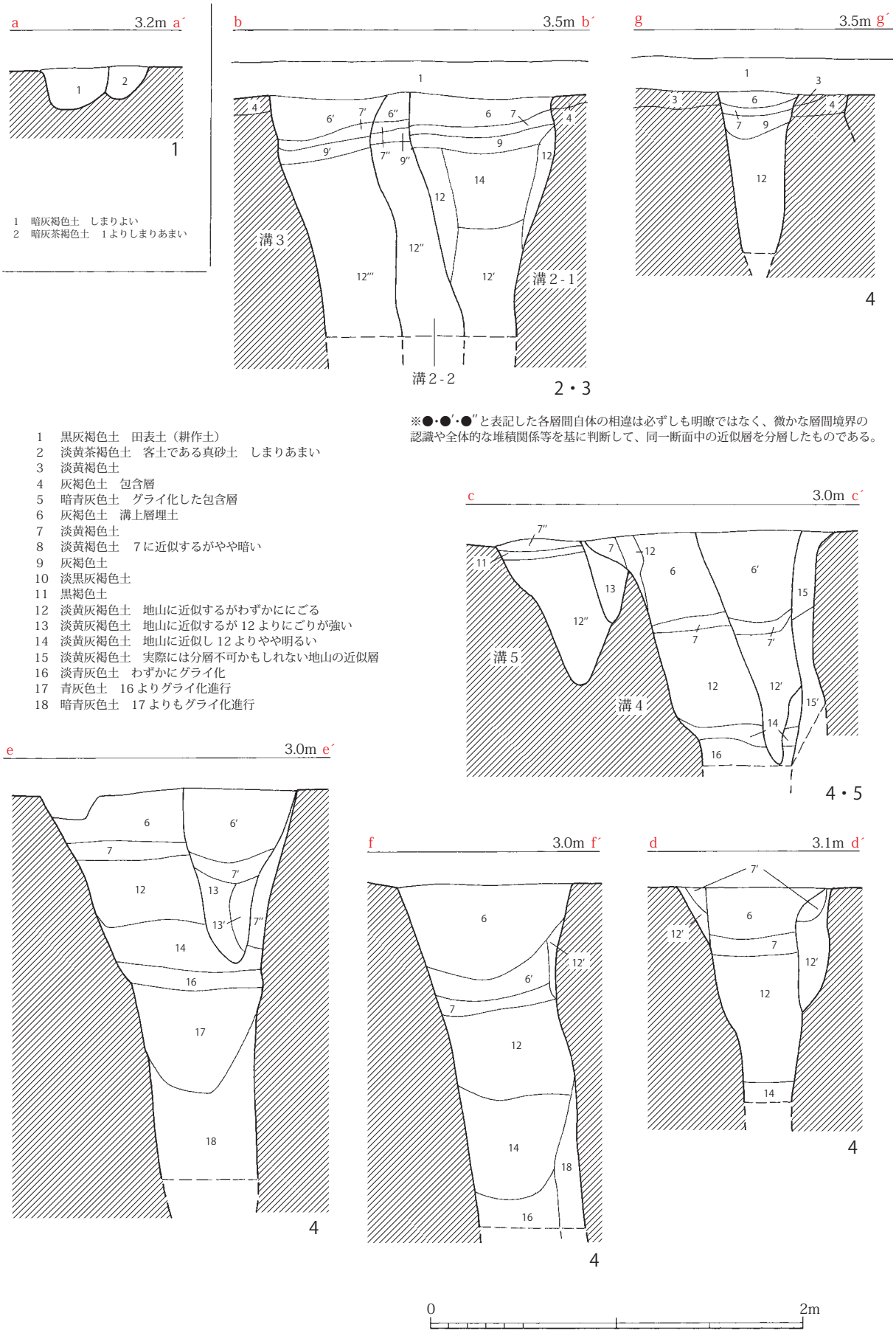
調査区南側に位置し、掘方・埋土の特異な溝としては最も南側にあたる。主に幅70～80㎝程度でやや弧状に延びるプランをしており、西側は途切れているが、東側は調査区外へと至っている。調査区壁の土層の観察で、3号溝との間も基盤層ではなく溝埋土で、その平面的な広がりは、ほとんどが失われているものの2号溝に近いと想定される。よって南側のものを2－1号溝、3号溝との間を2－2号溝とする。2－1号溝は2－2号溝を切り、更に2－2号溝は3号溝を切っている。〔b－b'〕で確認できる埋土は2条ともに上層に灰褐色土､炭黄褐色土の堆積層があり、その下位で地山に近似する淡黄灰褐色土層となり、これらは3号溝とも共通する。2－1号溝の下層には掘り返しとも考えられる痕跡が見られる。ただ、2－1号溝の西側部分は上層から地山に近似した埋土で、平面形の把握が非常に困難であった。最大で1.3ｍ程度の深さまで掘削したが、それより下位は掘削していない。遺物は、土師器小片と軽石片が出土したのみで、図示できるものはない。

3号溝（図版3・4、第6図）

調査区南側に位置し、すぐに途切れる西側に対し、東側は調査区外に延びている。調査区壁の土層の観察から上層に灰褐色土、淡黄褐色土が堆積し、その下位で地山に近似する淡黄灰褐色土層となり、これらは近接する2-1・2号溝とも共通する。2-2号溝に切られており、4号溝とは非常に近接しているものの切り合っていない。最大で1.3ｍ程度の深さまで掘削したが、それより下位は掘削していない。遺物は、土師器小片が出土したのみで、図示できるものはない。

4号溝（図版3～6、第6図）

調査区南側に位置し、3号溝の北、5号溝の南にあたる。やや弧状に北西－南東の軸で延びており、両端共に調査区外へ至っている。幅には差があり、〔e－e'〕付近の広い部分で140㎝程度、東側の狭い部分で50㎝程度となっている。ただし、〔c－c'〕、〔d－d'〕、〔e－e'〕で切り合いが見られるように、西側の大型のものと東側の小型のものとに単位が分かれるとみられ、小型のものが切っており後出である。〔f－f'〕でもわずかであるが、掘り返しともとらえられる部分がある。埋土は基本的に上層から灰褐色土、薄い淡黄褐色土層を挟み、地山に近似する淡黄灰褐色土となるパターンが主体である。また､〔c－c'〕の南側で地山に近似した埋土のみの層は、別単位の溝の可能性もあるが、必ずしも確実な1単位の遺構とは言い難いものであった。5号溝を切る先後関係が認められる。なお、調査終了時に〔e－e'〕付近をバックホーで深く掘削し、底部を確認した結果220㎝程度の深さと認められた。出土遺物は、土師器、瓦質土器、陶磁器の



※●・●′・●″と表記した各層間自体の相違は必ずしも明瞭ではなく、微かな層間境界の認識や全体的な堆積関係等を基に判断して、同一断面中の近似層を分層したものである。

1　黒灰褐色土　田表土（耕作土）
2　淡黄茶褐色土　客土である真砂土　しまりあまい
3　淡黄褐色土
4　灰褐色土　包含層
5　暗青灰色土　グライ化した包含層
6　灰褐色土　溝上層埋土
7　淡黄褐色土
8　淡黄褐色土　7に近似するがやや暗い
9　灰褐色土
10　淡黒灰褐色土
11　黒褐色土
12　淡黄灰褐色土　地山に近似するがわずかににごる
13　淡黄灰褐色土　地山に近似するが12よりにごりが強い
14　淡黄灰褐色土　地山に近似し12よりやや明るい
15　淡黄灰褐色土　実際には分層不可かもしれない地山の近似層
16　淡青灰色土　わずかにグライ化
17　青灰色土　16よりグライ化進行
18　暗青灰色土　17よりもグライ化進行

第６図　１～５号溝土層実測図（1/30）

小片が多数出土しているが多くがローリングを受けており、図示できるものは少ない。また、弥生土器の大型の壷の可能性のある破片も含まれる。時期の特定は困難である。

出土遺物（図版 11、第 8 図 7 ～ 9）

7 は瓦質土器鉢の口縁部の小片で、玉縁状である。焼成状態もしくは著しいローリングを受けたためか、現状では土師質に見える。8 は陶器擂り鉢の小片で、17 世紀後半から 18 世紀初頭の所産とみられる。9 は陶器仏花瓶の頸部付近で、内外面ともに黒釉が施される。

5 号溝（図版 3・5、第 6 図）

調査区の南側の 4 号溝の北側に位置する溝で、西側は 4 号溝に切られて消失し、東側はトレンチで途切れ、その東側の調査区壁の土層では掘形が認められなかったため、調査区外には及んでいないとみられる。2 ～ 4 号溝と同様にやや弧を描いた軸となっている。埋土は上層で浅く灰褐色土、淡黄褐色土、黒褐色土が見られ、その下位の地山に近似する淡黄灰褐色土が主体である。全体を底部まで掘削していないが、土層よりほとんどが 80 ～ 100 ㎝程度の深さとなるとみられる。〔c － c’〕では 4 号溝と切り合う部分で、4 号溝とも 5 号溝とも異なる可能性のある単位が見られる。遺物は出土していない。

6 号溝（図版 3、第 4 図）

調査区の狭くなった中央部付近に位置する溝で、北東－南西の軸で延びる溝で、西側は調査区外に至るが、東側は一部クリーク跡に撹乱を受けながらも調査区内で途切れているようである。埋土は淡灰褐色土の 1 層のみで、深さは調査区際の南西側で 15 ㎝程度を測り、北側は 10 ㎝にも満たない浅く規模の小さな遺構である。須恵器片が 1 点のみ出土した。

出土遺物（図版 11、第 8 図 10）

10 は東播系須恵器甕の胴部片で、激しいローリングを受けており、外面では器表はほとんど遺存しておらず、内面にわずかに平行タタキが見られる。

7 号溝（図版 3・7、第 7 図）

調査区の狭くなった中央部付近に位置する溝で、6・8 号溝の西側にあたり、やや弧状に南北に延びる。南側は調査区外に至り、北側は幅を減じながら調査区内で途切れる。最大幅は 110 ㎝程度であるが、2 カ所で記録した土層から、掘り返し、もしくは 2 条以上の切り合いの痕跡があるため、各掘削単位での幅はより狭いと捉えられる。なお、北側 2 カ所のベルトでは土層の記録はしていないが、観察では切り合い等の痕跡がなかったため、その辺りは単一の遺構からなるとみられる。埋土は上層で浅く灰褐色土、淡黄褐色土が見られ、その下位に地山に近似する淡黄灰褐色土が堆積するものとともに、〔i － i’〕では最上層から地山に近似した層が堆積する単位も確認できる。なお、〔i － i’〕の北隣のベルト部分では、土層図の記録を残していないが、調査終了時にその付近をバックホーで深く掘削し、底部を確認した結果 220 ㎝程度の深さと認められた。少数の土師器、須恵器、瓦質土器片が出土しているが、いずれもローリングを受け、図示できるものはわずかである。また軽石が出土している。

出土遺物（図版 11、第 8 図 11）

11 は東播系須恵器甕の肩部片で、外面に格子目タタキ、内面に平行タタキが見られる。

8 号溝（図版 3・7・8、第 7 図）

調査区中央部よりやや北側に位置する溝で、7・9 号溝の東側にあたる。北東－南西に近い軸で直線的に延びており、南側は調査区内で途切れているが、北側はクリーク跡で大きく撹乱を受けるとともに調査区外へ至っている。同一ベルトの南北両側で土層の記録を行った中で、南側の〔k － k'〕では掘り返し、もしくは切り合いによる 2 単位分の遺構が確認できるのに対し、北側の〔j － j'〕では 3 単位と捉えられる。詳細に観察したものの、近接した両者で相違が生じるのは不自然ではあるため、分層に遺漏があったとも考えられる。なお、いずれの遺構の単位においても、埋土については上層で灰褐色土、淡黄褐色土が見られ、その下位で地山に近似した淡黄灰褐色土が堆積する。また、南端部のベルトでは、土層図の記録はしていないものの、観察から切り合い等はないと判断した。出土遺物は、土師器、瓦質土器の小片が少数出土しており、そのいずれもローリングを受けている。他に磁器が 1 点出土している。

出土遺物（図版 11、第 8 図 12）

12 は青花皿の底部である。底部はケズリにより碁笥底で露胎している。透明釉が施され、見込みにはわずかに文様が残る。多くがローリングを受けるなど、この資料にはその限りではない。

9 号溝（図版 3・8、第 7 図）

調査区の北半部で 8 号溝の西、10 号溝の東側に位置する。北東－南西に近い軸で直線的に延びており、8・10 号溝とほぼ平行して、両端共に調査区内で途切れている。北側のベルトの土層〔l － l'〕では、掘り返しもしくは切り合いによる 2 単位分の遺構とみなすことができる。南側のベルト土層では切り合い等が見られず、その埋土や掘形の特徴から浅い小型の溝が西側を通っており、それに切られるより掘形の大きな溝が東側に遺存する形となっている。埋土については、上層で灰褐色土等が堆積し、その下位で地山に近似した淡黄灰褐色土となる。出土土器は、土師器、瓦質土器の小片がわずかに見られるのみで、図示できるものはない。

10 号溝（図版 3・8、第 7 図）

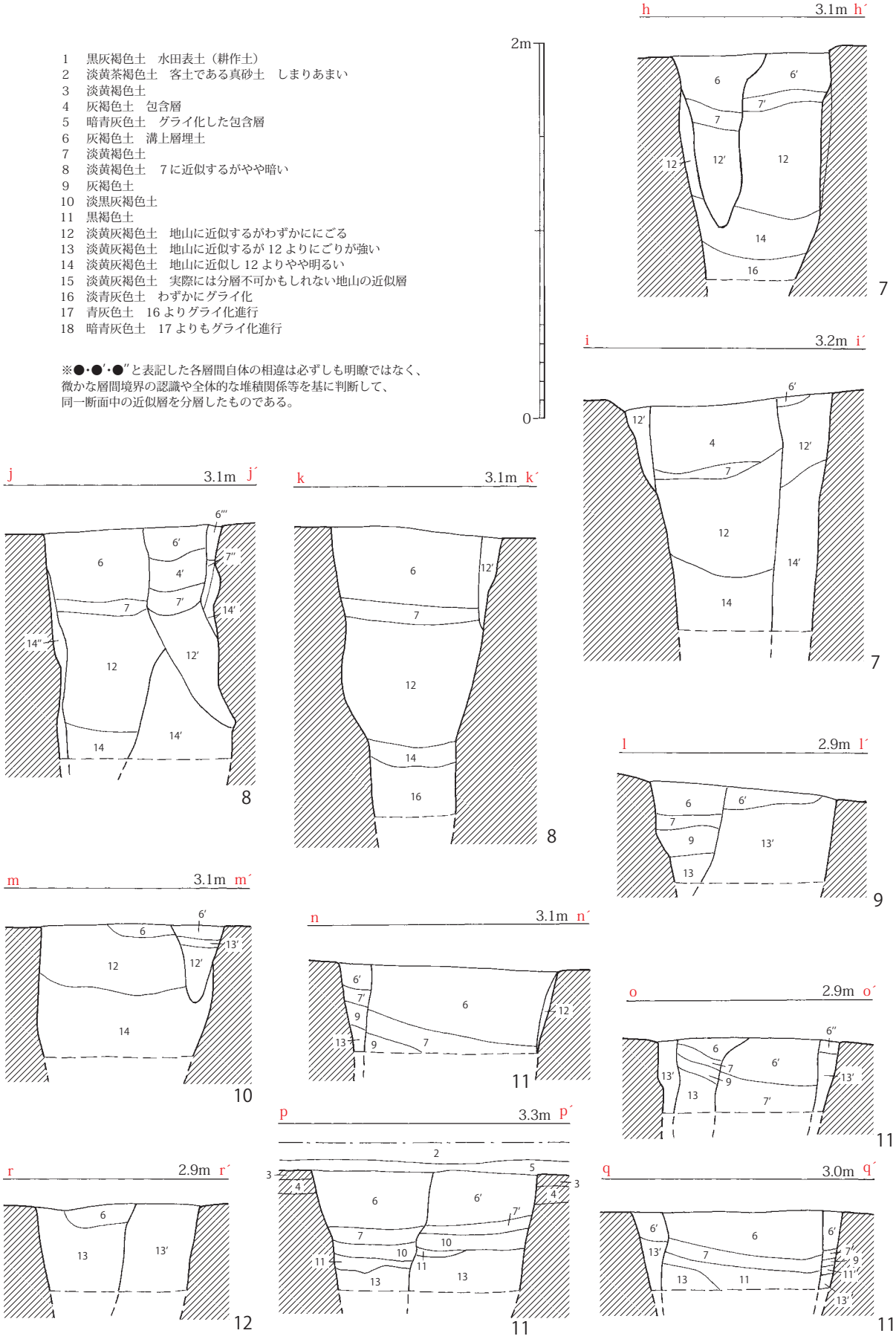
調査区の北半部で 9 号溝の西に位置する。北東－南西に近い軸で直線的に延びており、8・9 号溝とほぼ平行して、両端共に調査区内で途切れている。北側のベルトの土層〔m － m'〕では、掘り返しもしくは切り合いによる 2 単位分の遺構とみなすことができる。埋土については、上層でわずかに灰褐色土の堆積が見られるが、ほとんどが地山に近似した淡黄灰褐色土である。遺物は出土していない。

11 号溝（図版 3・9・10、第 7 図）

調査区北側で南北に長く延び、9 号溝の北東側、12 号溝の西側に位置する。調査区内だけでも南北長で 20 m近くにおよび、更に北側は調査区外に延びている。また、幅は広い部分で 120 ～ 140 ㎝前後である。ただ、遺構検出段階での確認はできなかったが、12 号溝ベルト〔r － r'〕の西側にあたる付近で幅が特に狭くなることから、そこで大きな単位として南北で分かれる可能性が高いとみることができる。少なくともその北側部分は 12 号溝に切られる先後関係である。また、ベルトの土層〔n － n'〕、〔o － o'〕、〔p － p'〕、〔q － q'〕からは、掘り返しもしくは切り合いに

1　黒灰褐色土　水田表土（耕作土）
2　淡黄茶褐色土　客土である真砂土　しまりあまい
3　淡黄褐色土
4　灰褐色土　包含層
5　暗青灰色土　グライ化した包含層
6　灰褐色土　溝上層埋土
7　淡黄褐色土
8　淡黄褐色土　7に近似するがやや暗い
9　灰褐色土
10　淡黒灰褐色土
11　黒褐色土
12　淡黄灰褐色土　地山に近似するがわずかににごる
13　淡黄灰褐色土　地山に近似するが 12 よりにごりが強い
14　淡黄灰褐色土　地山に近似し 12 よりやや明るい
15　淡黄灰褐色土　実際には分層不可かもしれない地山の近似層
16　淡青灰色土　わずかにグライ化
17　青灰色土　16 よりグライ化進行
18　暗青灰色土　17 よりもグライ化進行

※●・●′・●″と表記した各層間自体の相違は必ずしも明瞭ではなく、
微かな層間境界の認識や全体的な堆積関係等を基に判断して、
同一断面中の近似層を分層したものである。



第７図　7 ～ 12 号溝土層実測図（1/30）

よる少なくとも2単位分、所によっては3単位分の遺構の集合体である痕跡が認められる。埋土は主に最上層で灰褐色土が見られ、下層の地山に近似する淡黄灰褐色土との間に淡黄褐色土、灰褐色土、淡黒灰褐色土、黒褐色土の層を挟むという特徴が見られる。ただ、〔n－n'〕や〔o－o'〕からは、地山に近似する淡黄灰褐色土がかなり上位から堆積する単位もみられる。出土遺物は、土師器、瓦質土器片が少数あり、多くがローリングを受けている。磁器片が1点のみ出土している。

出土遺物（図版11、第8図13・14）

13は土師器小皿の小片で、器高1.2㎝である。14は龍泉窯系青磁碗の小片で、外面にわずかに蓮弁の一部が見られる。13世紀の所産である。

12号溝（図版3・10、第7図）

調査区北端近くの東壁に近接した位置にあり、一部は調査区外に及ぶ。11号溝の東側で、南北に近い方向軸であり、11号溝を切って接する。幅は広い部分で100㎝弱である。ベルト〔r－r'〕から、埋土については上層でわずかに灰褐色土層が見られるが、大半は地山に近似した淡黄灰褐色土で、掘り返しもしくは切り合いによる少なくとも2単位分の遺構とみなすことができる。土師器片がわずかに出土したが、図示できるものはない。

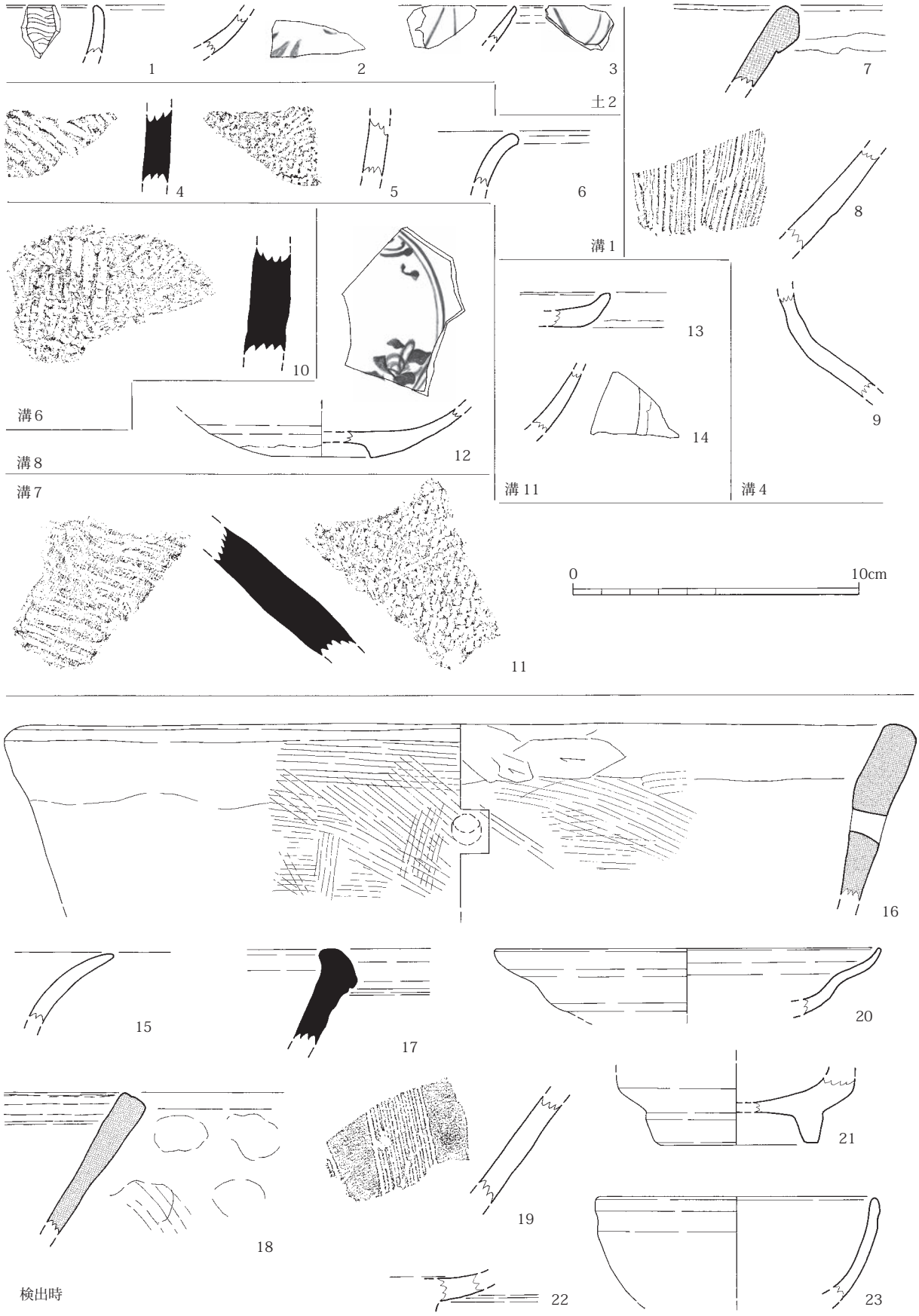
(3) 検出時の出土遺物（図版11、第8図15～23）

15は土師器壷の口縁部とみられ、器表の摩滅が著しい。橙褐色である。16は瓦質土器鍋の口縁部で、大型の器形となる。内外面ともにハケ調整主体で、口縁部内面にはケズリが施され、その下端には稜が生じている。穿孔部がわずかに残存する。17は東播系須恵器鉢の口縁部で、玉縁状である。14世紀後半の所産である。18は瓦質土器鍋の口縁部で、被熱の痕跡が強く見られる。14～15世紀の所産である。19は陶器擂鉢片で、口縁部付近の鉄釉がわずかに残る。17世紀後半から18世紀初頭の所産である。20は肥前系陶器の小型の皿で、透明釉が施され、外面下部では掻き取りされる。17世紀後半から18世紀の所産である。21は肥前系陶器瓶で高台部分が残る。外面のみ灰釉が施され、灰吹が見られる。22は肥前系陶器皿での小片で、内面には銅緑釉が施され、蛇目釉剥ぎの一部が残る。17世紀後半の所産である。23は磁器碗の口縁部である。

(4) 牡蠣貝殻（図版12、右写真）

検出面の3ｍ程度下位（標高0ｍ弱）から出土したマガキ（ナガガキ）の貝殻である。無数の貝殻の中から、15個体程度採り上げたが、天然の牡蛎礁であったとみられ、出土時は全て閉塞した状態であった。そのため、人為的な痕跡の介在する余地はないとみられる。出土時以降劣化しており、欠損や欠失部分が目立つ

下層出土牡蠣貝殻



第８図　出土遺物実測図（1/2）

が、元来長さ 30 ㎝程度であったと推測される非常に大きなものも含まれる。

５　小結

下木佐木安堂遺跡の調査の結果、土坑、溝といった遺構を検出したが、そこに伴う遺物自体、更にその出土状況が明瞭な時期を示すような形となっていないため、遺構の時期のみならず、その機能的な面も想定するのは更に困難と言える。

特に土坑からの出土遺物は少なく、図示できたのは 2 号土坑出土のもののみである。それに従うと近世後期あたりが該当時期ということになるが、これら自体が小片である。また、図示できなかったものの中に、土師器等が多く含まれているため根拠に乏しい点は否めない。1･3 号土坑は、平面形、主軸、埋土と近似点が複数見られ、近い時期に掘削され、同様の機能を果たしていたと想定される。一方、2 号土坑は非常に地山に近似した埋土であるとともに出土遺物が皆無なため、掘削後短期間で埋め戻されたと考えられる。

溝は 1・6 号溝を除き、下位の埋土は地山に近似し、部分によっては 2 m以上の深い V 字状の堀方や前後であまり連続せずに途切れることの多い特徴が見られ、度重なる掘り返しも想定される特異なものである。また、多くの部分で上層に灰褐色土が堆積する共通点もあり、〔溝掘削→すぐに大部分を埋め戻し→一定期間そのままで上層埋没→再掘削〕という流れを繰り返していたともとれるが、そこに機能的な意味づけをすり合わせて理解するのはなかなか困難である。ただ、調査区の東側に広がるクリークに沿った形で展開している点は、ほぼ間違いないと言え、このクリークは溝の掘削時から存在し、溝の機能と相関のある存在であったとみられる。そこで機能面で想起されるのは、水利的な要素もしくは防御的な要素である。「水利的」とは、直接もしくは間接的に溝内に導いたクリークの水の生活への利用を想定したものである。また「防御的」とは、クリークと複合的に防御施設として敵の進撃を防ぐ機能を想定したものである。特に第 9 図で見られるように、該当のクリークが調査区の東側を方形状に囲む点に人為的な意図のあった可能性をうかがわせる。防御的機能があった場合、調査区北東側のクリークに囲まれた内部が防御対象の本体であったとみることができる。

遺構の時期について、上記でも遺物や出土状況からは判別つきがたいと繰り返し述べ、もちろんその前提の上であるが、少し推論を加えたい。検出時のものも加えた全体的な遺物の様相としては、東播系須恵器、瓦質土器がやや目立っており、またそれに近しい時期の青花（第 8 図 12）はローリングを受けていない。度々であるが補強材料の乏しいことを承知で言うならば、これらが遺跡・遺構の時期をある程度示唆している可能性があり、幅のある中で、中世後期の 14 世紀後半から 16 世紀前半くらいが妥当と思われる。該期の周辺地域は、大友氏が筑後での直轄領の中核的な位置付けであった三潴庄にあたると思われ、推論を更に重ねることにはなるが、その傘下にあった蒲池氏の伸長との関連が想起される。ただ、このような特殊な遺構の類例に乏しく、今後の調査成果によって検討が深まることを期待したい。もちろん遺物について、多くがローリングを受け、小片といえども近世遺物を過度に混入と位置づけずにそのまま捉えると、遺構が近世以降の所産となることを念頭に残しておかなくてはならない。

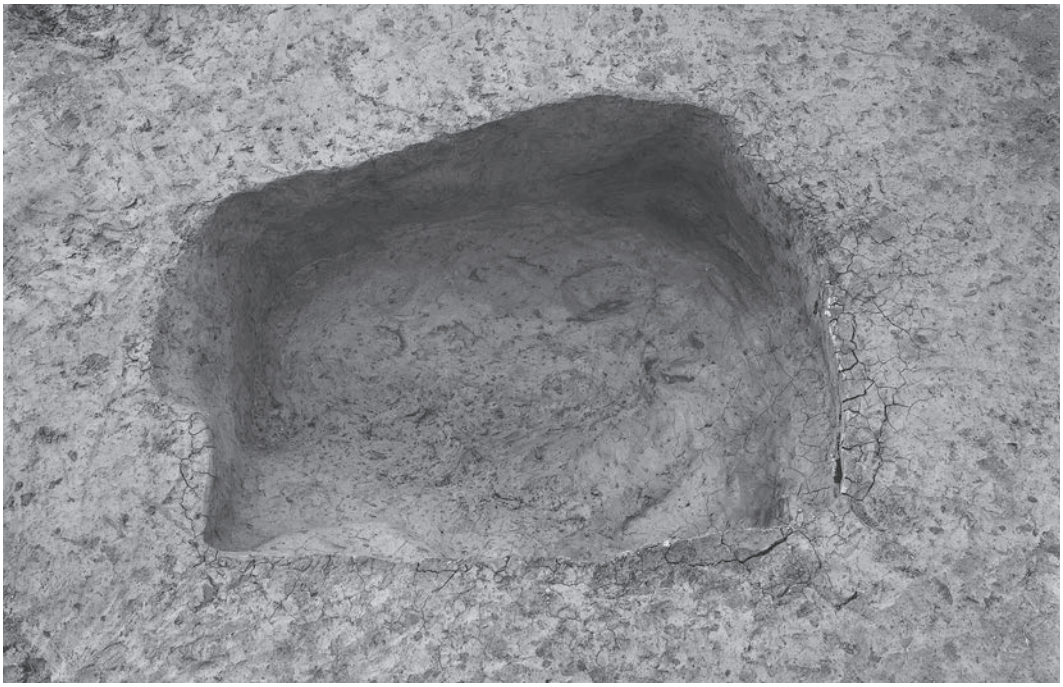
下木佐木安堂遺跡図版

1　調査区遠景（南上空から）

2　調査区遠景
（上空から　上が北）

図版 2

1　１号土坑（北から）



2　２号土坑（東から）

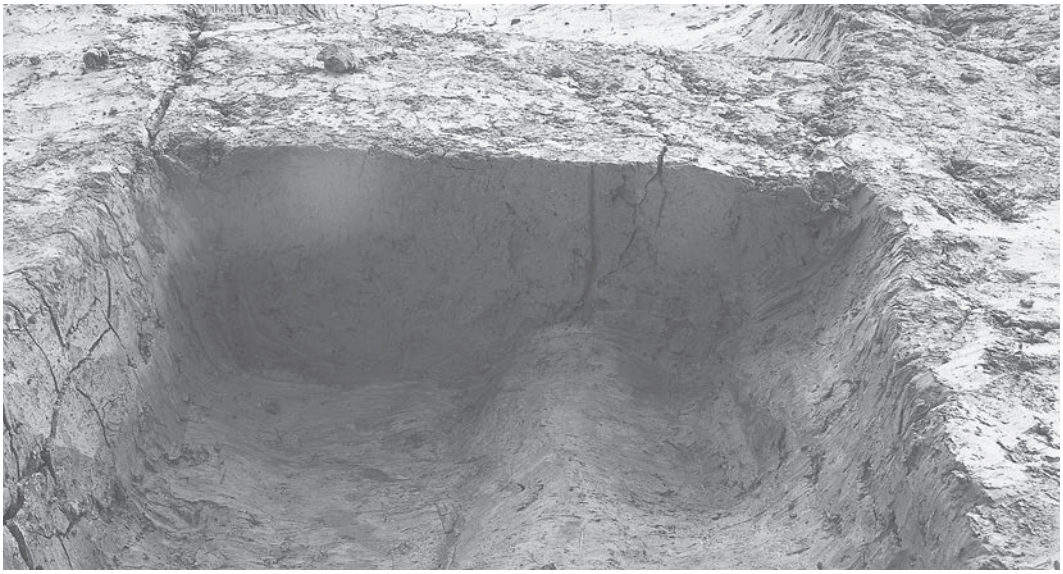
3　３号土坑（東から）

1　2～5号溝
（上空から　上が北）

2　6～9号溝
（上空から　上が東）

3　9～12号溝
（上空から　上が東）

図版 4



1　1号溝土層〔a-a'〕（西から）

2　2・3号溝土層〔b-b'〕（西から）

3　4号溝土層〔g-g'〕（西から）

1　４・５号溝土層〔c-c'〕
（北西から）

2　４号溝土層〔e-e'〕
（北西から）

3　４号溝土層下部掘削状況
［e-e'］（北西から）

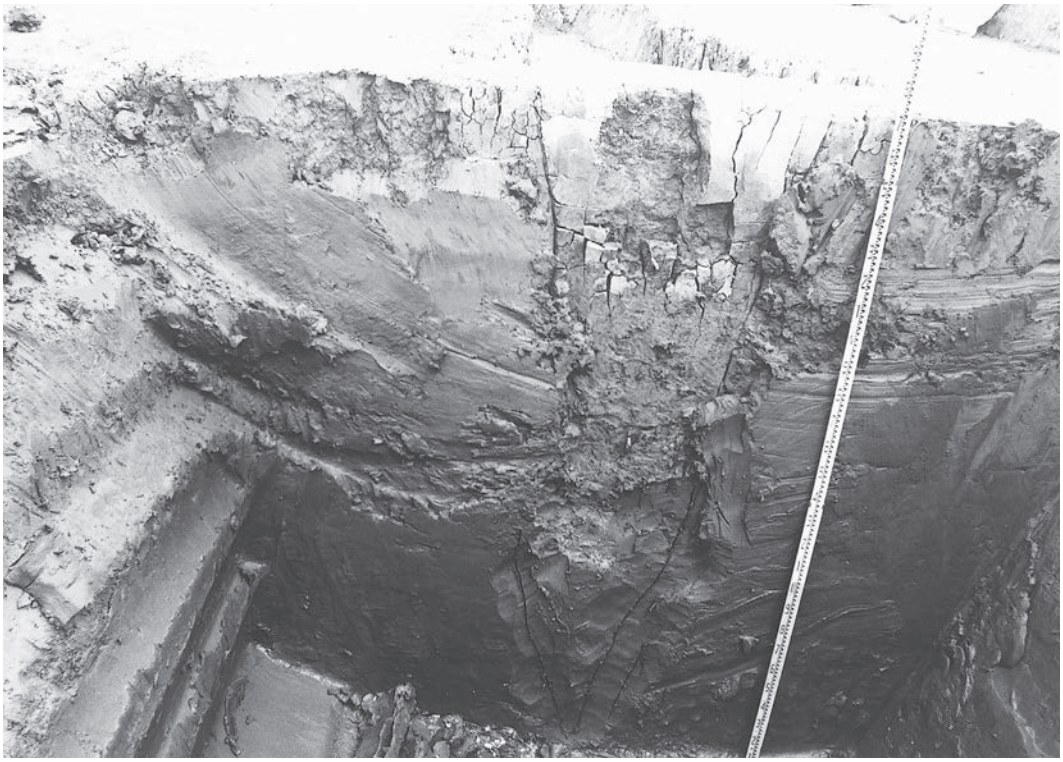
図版 6

1　４号溝土層〔f-f'〕(北西から)

2　４号溝土層〔d-d'〕(北西から)

3　７号溝土層〔h-h'〕(北から)

1　7号溝土層〔i-i'〕（北から）



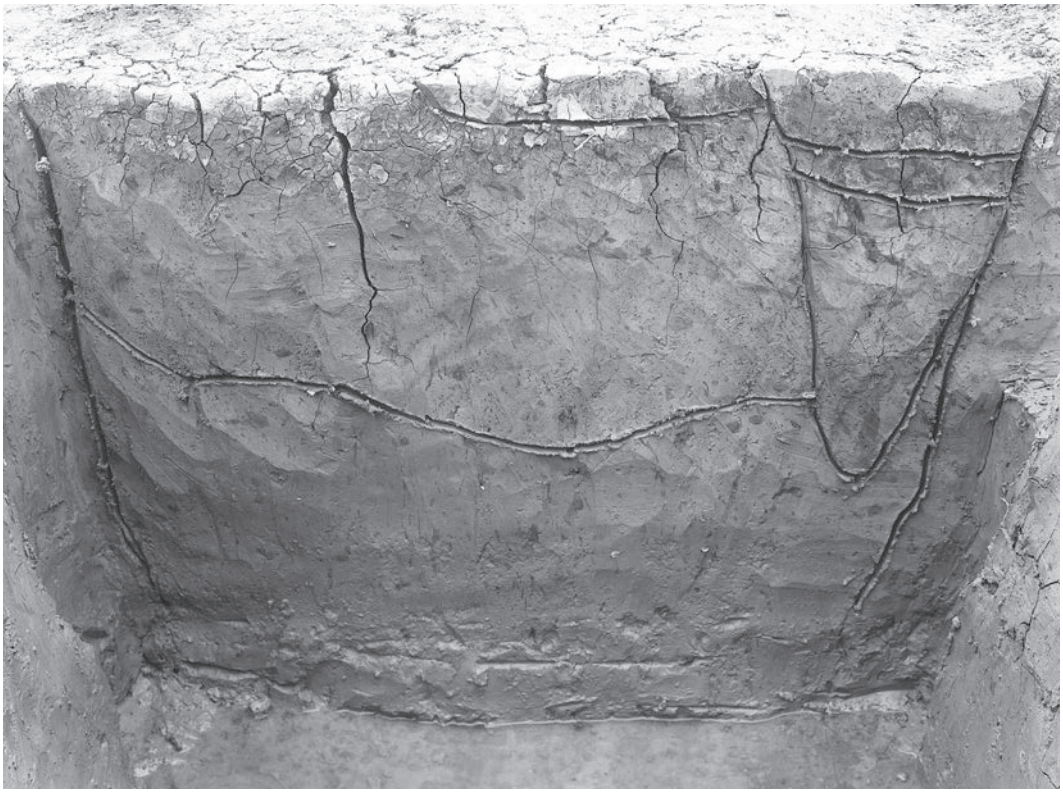
2　7号溝北側ベルト
下部掘削状況（北から）

3　8号溝土層〔j-j'〕
（北西から）

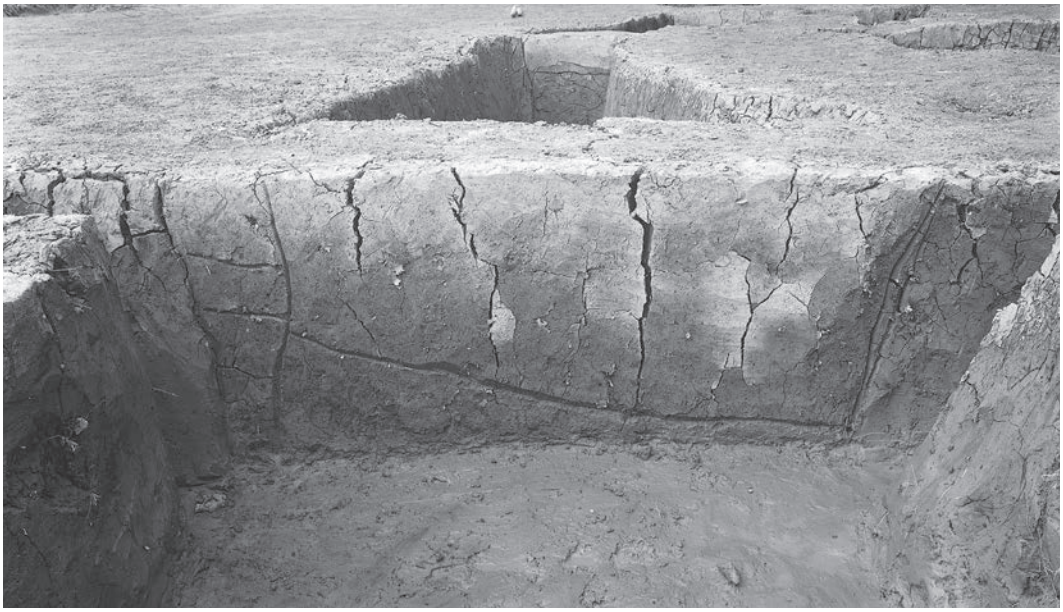
図版 8

1　8 号溝土層〔k-k'〕（南から）

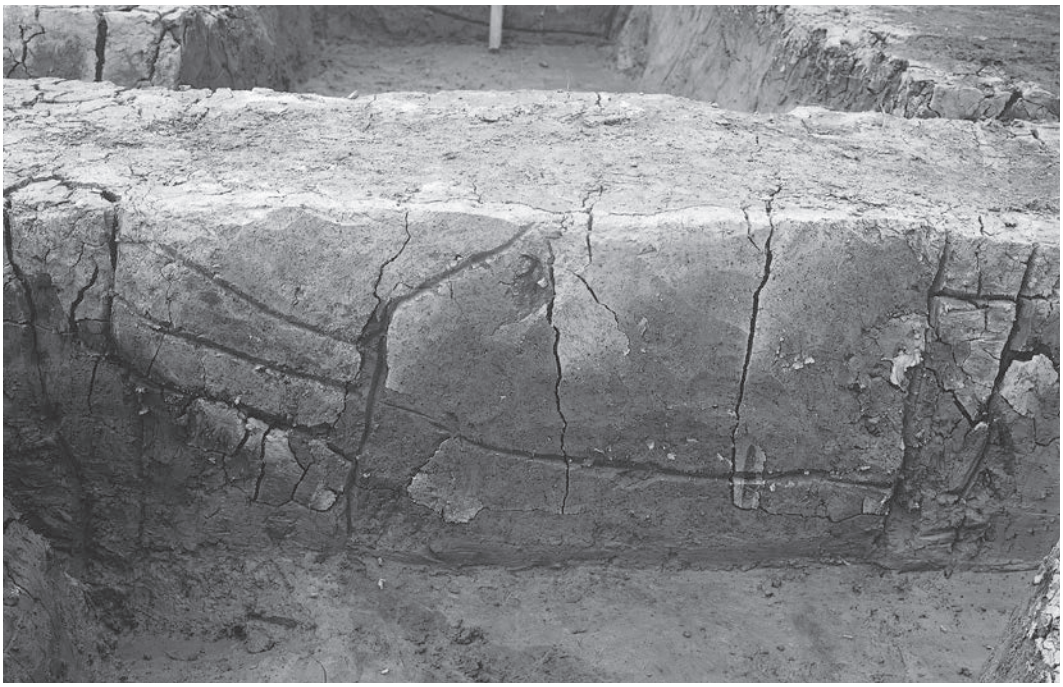
2　9 号溝土層〔l-l'〕（南から）



3　10 号溝土層〔m-m'〕（北から）



1　11 号溝土層〔n-n'〕（南から）



2　11 号溝土層〔o-o'〕（南から）

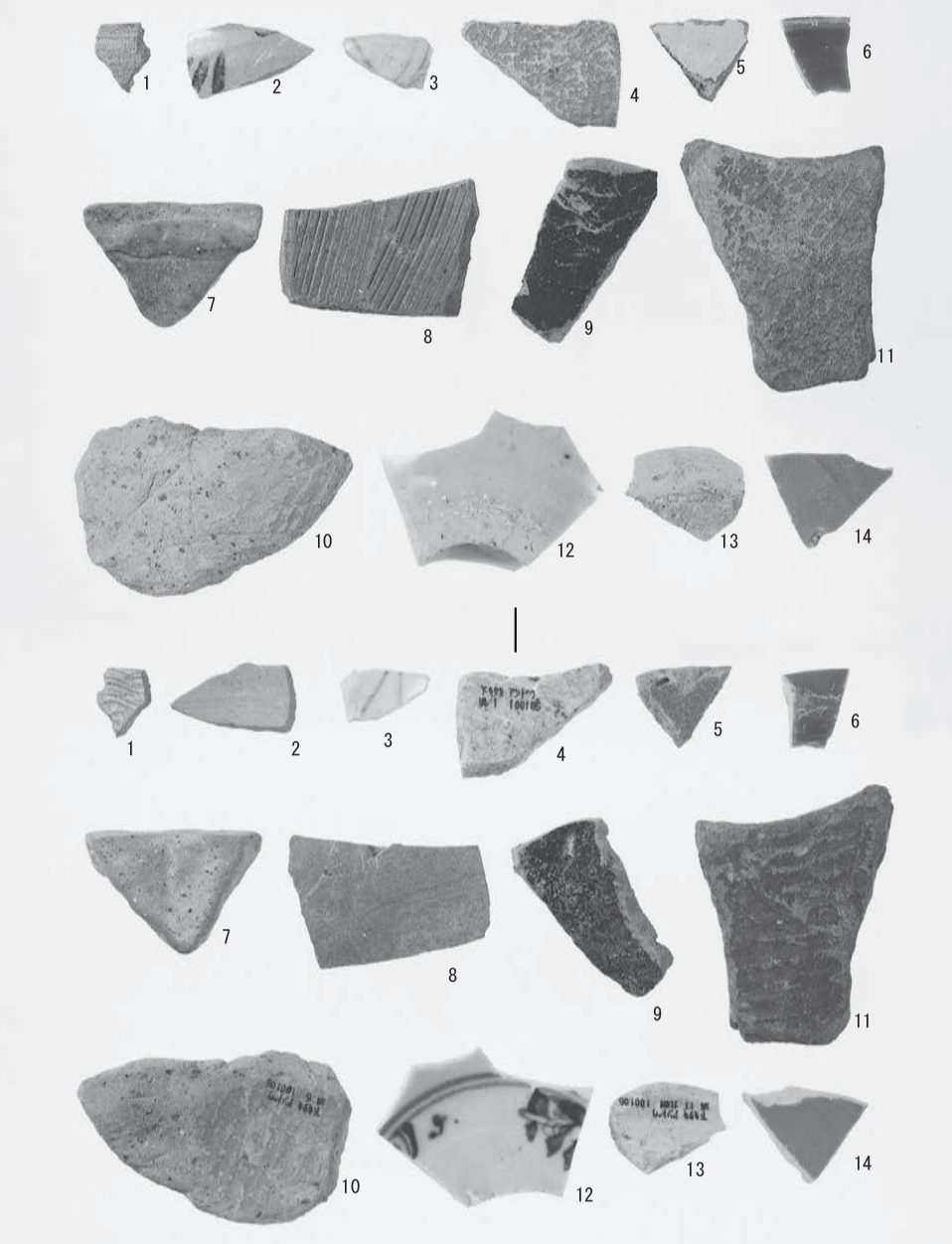
3　11 号溝土層〔p-p'〕（南から）

図版 10

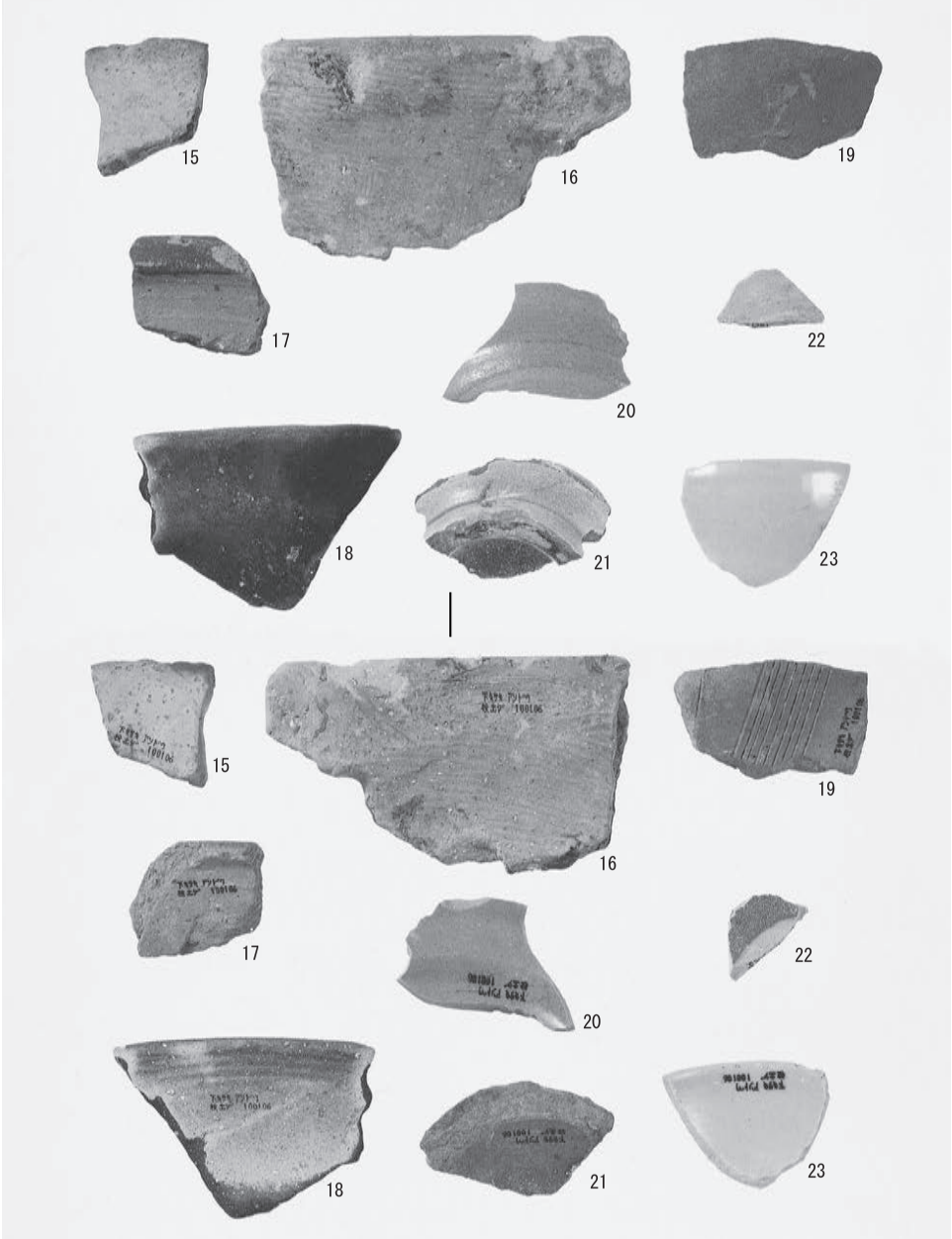
1　11 号溝土層〔q-q'〕（南から）

2　12 号溝土層〔r-r'〕（南から）

3　調査区埋め戻し状況



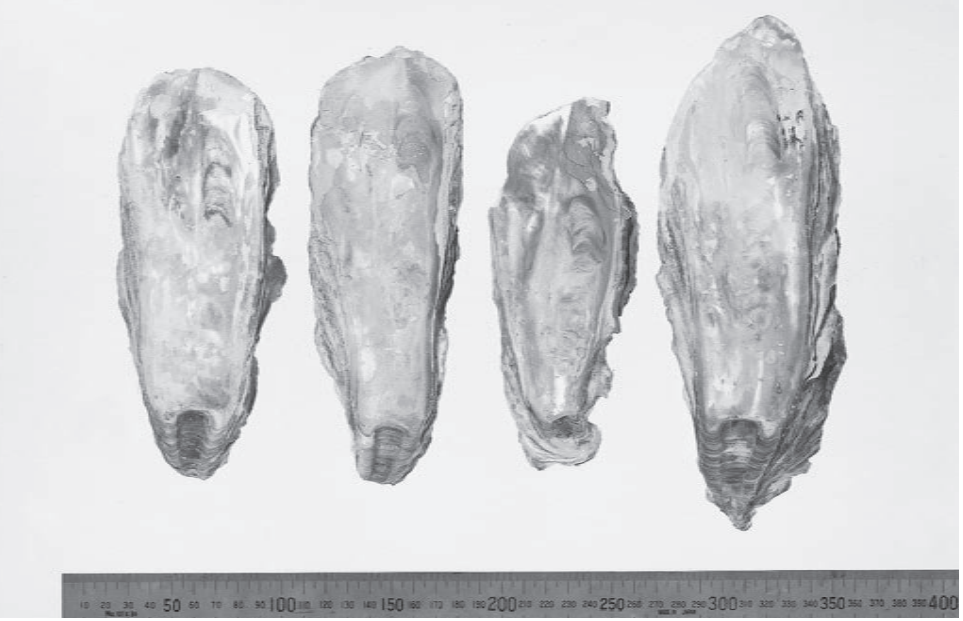
1　出土遺物①



2　出土遺物②

1　調査区下層出土牡蠣貝殻①

2　調査区下層出土牡蠣貝殻②



東蒲池蓮池遺跡

Ⅳ　東蒲池蓮池遺跡

１　調査の経過

東蒲池蓮池遺跡の調査は、平成 20 年 8 月 3 日から平成 20 年 8 月 31 日にわたって実施した。

バックホーを 8 月 3 日に搬入し、表土掘削を開始した。試掘調査の結果から表土の堆積が 2 m以上と想定していたが、試掘調査時のトレンチ設定箇所が近現代の旧クリークの中であったことがわかり、遺構面は調査区東側約２／３の表土下 50 ㎝にあることを確認した。なおこの旧クリークをさらに下層まで掘削したところ、最下層に近代の遺物がわずかに出土するのみでほぼ現代のものであった。遺構は溝 13 条を確認し、8 月 9 日に建機および道具類を搬入して作業員の人力による作業を開始した。

遺構面では、灰色粘土層および白黄褐色粘土層に切り込む黒色土埋土の溝と、鉄分を含む黄褐色土埋土の溝を確認した。遺構はすべて残存状況が悪く、数条の溝は削平により一部しか残存していなかった。また、柳川市域で良く見られる水田造成時の客土や中世の造成によると思われる遺物の混入があり、表土および遺構内からは弥生時代～中世までの遺物が混在して出土した。

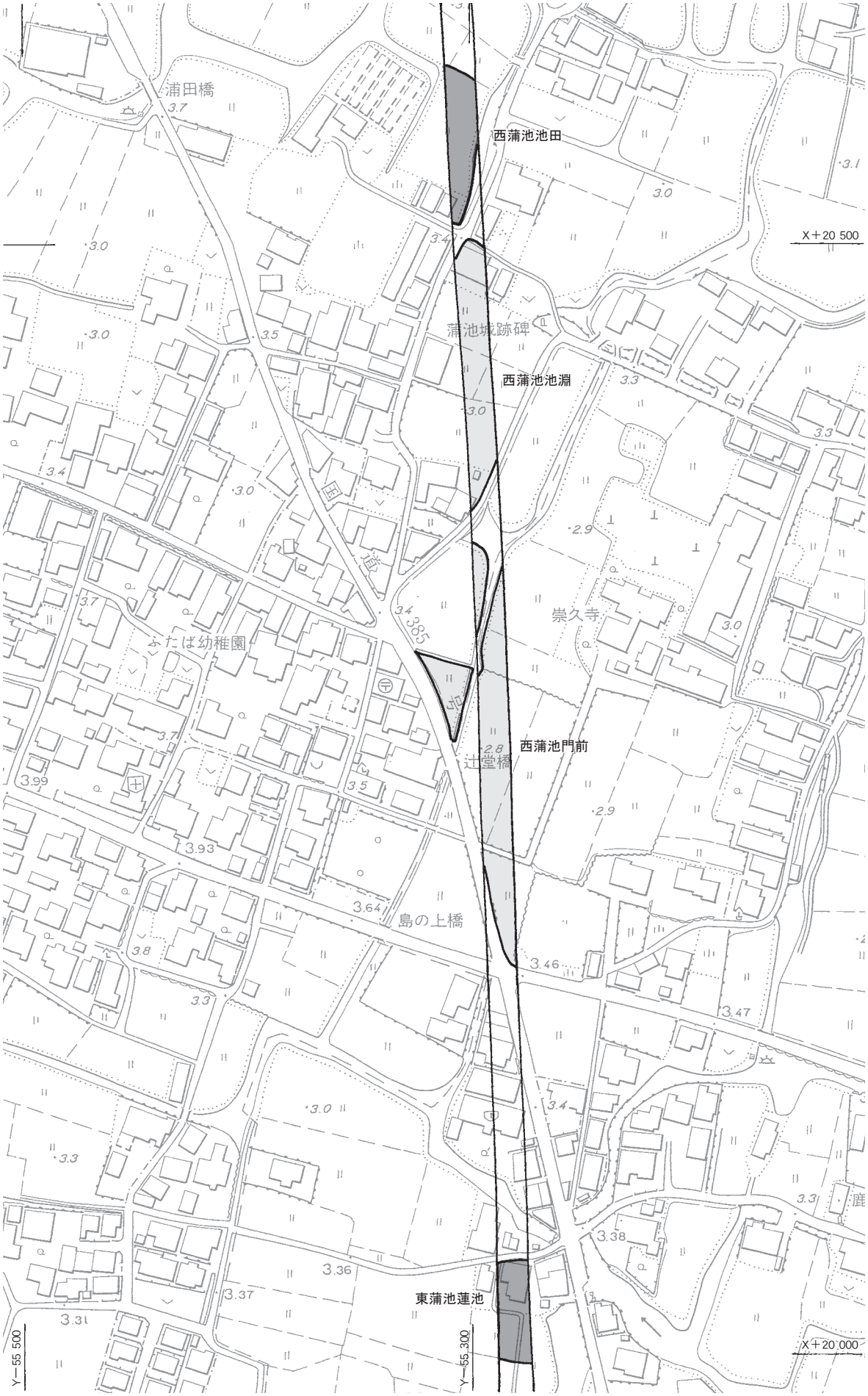
周辺の遺跡同様、遺構面は乾燥によりヒビ割れするとともに雨水の影響によって泥質化し、掘削から時間を置くと遺構検出が著しく困難となるため、バックホーでの表土の除去と並行して人力による遺構の検出作業を行った。遺構検出後 8 月 10 日から人力による遺構掘削を行い、降雨や湧水による現場水没に悩まされながらも、8 月 25 日に掘削を終了した。

8 月 26 日に清掃を開始し、8 月 27 日に全体写真を撮影、その後ベルトの除去および図化を行って、8 月 31 日にすべての調査を終了した。検出した遺構・遺物が少ないことと、道路工事の施工工期の関係から、現地説明会などは開催しなかった。

２ 遺跡の概要

調査区は、国道 385 号バイパスと有明沿岸道路が交わる柳川西 IC 交差点から北側へ 250 m程の地点、現在国道と柳川市道の交差点になっている地点である。筑後川の堆積作用と有明海の潮汐により蓮池粘土層上に形成された低平地上で、調査前の地表高は標高 2.9 m程度と蒲池地区内ではやや高い。調査区内の堆積層は粘質土が主体であり、「蓮池」の地名からも過去泥湿地であったことが予想される。また調査区東南部には南北に流れるクリークがあり、地図上で現況のクリークの流路をみると、以前は調査地に隣接する家屋部分にまで流路が伸びていたと考えられる。調査区北側にも小道を挟んで東西に流れるクリークが接しており、クリークに囲まれた地区である。

調査区は南北長 19 m程度、東西幅で最大 12 m程度、面積は 158 ㎡で、遺構面の標高は 2.0 ～ 2.4 m前後である。検出した遺構は溝 13 条と小ピットのみで、ピットからの出土遺物はなく、遺構の切りあいは激しくないが残存状況が非常に悪く、溝の浅いものは部分的にしか残存していない。溝はいずれも調査区南北軸に対してほぼ平行もしくはほぼ直交する。なお調査区東側で確



第９図　蒲池遺跡群周辺地形および各調査区位置図（1/2,500）

認した旧クリークは埋土中に近現代の遺物が入り、前述の調査区南東に位置する現クリークの続きと考えられる。しかし、その流路の主軸が他の南北溝と同じであることから、中世から現代に至るまで、地形的な制約が連綿と続いたことが考えられ、今回は遺構として取り扱った。なお、直交方向の溝はすべて東側、旧クリークの方向に向かって底面が傾斜していた。

全体的に出土遺物が非常に少なく、弥生土器や土師器、須恵器、陶磁器類がパンケース 5 箱分のみが出土した。このうち遺構内の遺物も混入と考えられるものが多く、遺構の時期を特定できるものが非常に少ない。このことから、切り合いや埋土の状況から遺構の時期を推定した。

3　基本層序

調査区南壁面で遺構の土層とともに記録した基本土層は第 11 図に示すとおりである。調査前は住居地であったため上層には厚さ 10 ～ 30cm の瓦礫が置かれ、その下に旧表土が 5cm 程度堆積し、以下に旧水田耕作土が 20cm 程度堆積する。調査区東側ではその直下に灰色粘質土の堆積が 20cm 程度認められたが、西側では削平のため残存しない。この層の下が軟質の白黄褐色粘土層となり基盤層と考えられる。遺構は東側では灰色粘質土上面で確認されたため、本来西側もその面から切り込まれたと思われる。また、一部調査区東側では耕作土の下に床土と見られる鉄分を含む黄褐色土があり、溝の最上層部に埋土として入っていた。

なお、基盤層となる白黄灰褐色土層および上層の灰色粘質土の上面は東に向かって標高が下がり、東西方向に流れる溝底面の傾斜と対応している。

4　検出遺構と遺物

(1)　溝

1 号溝（図版 14、第 11 図）

調査区北側に位置する東西溝で、東西端は消滅している。現存長 380m、最大幅 60cm、深さ 20cm を測り、断面椀型に壁が立ち上がる。埋土は黒灰色粘質土で壁付近は基盤層との混在土となる。

出土遺物

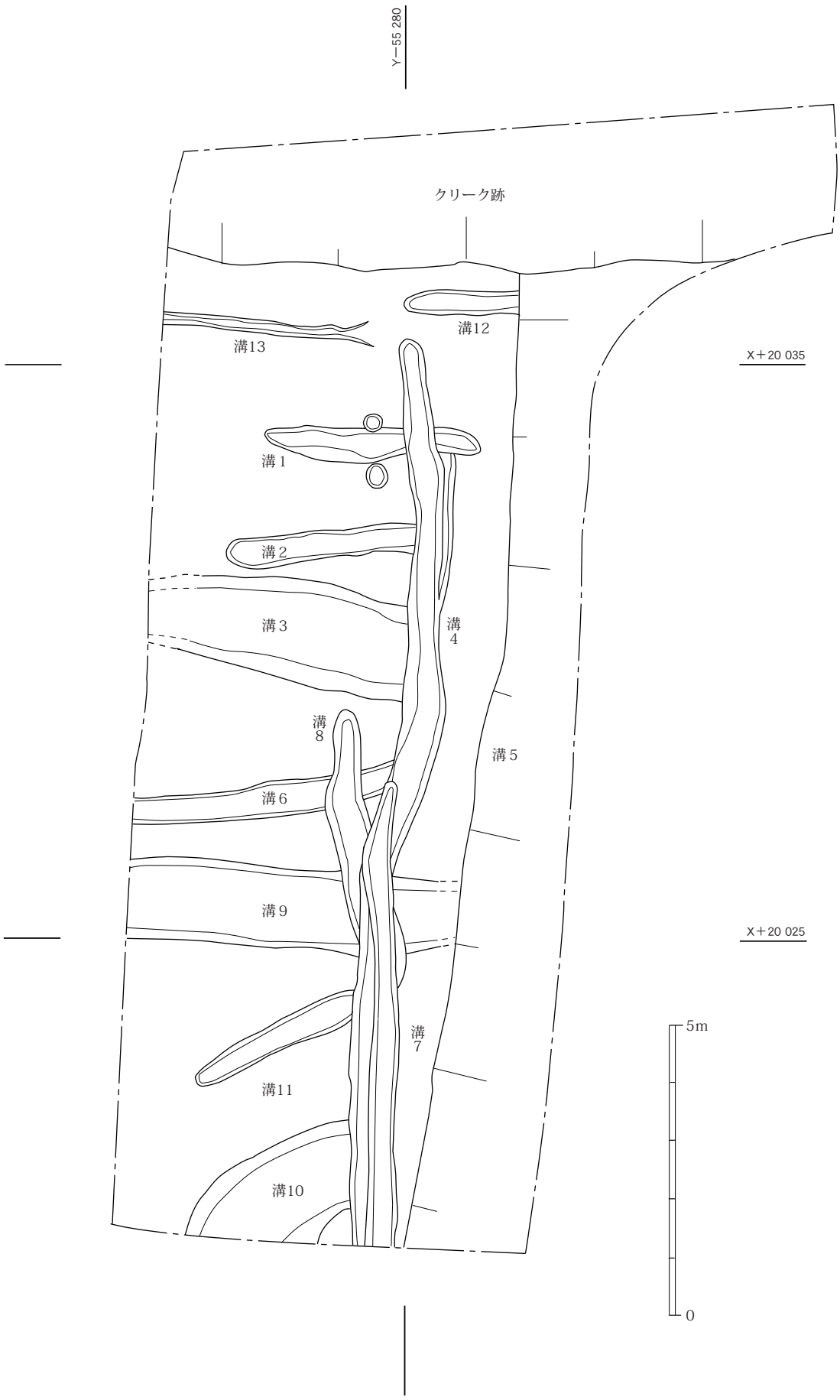
青磁片が出土しているが、小片のため図示できない。椀の小片で見込みに片彫りの飛雲文が認められるが、その他は不明である。釉は薄く淡緑色を呈する。

2 号溝（図版 14、第 11 図）

調査区北部、1 号溝の南に位置する東西溝で、東は 4 号溝に切られ西端は消滅する。現存長 330cm、最大幅 50cm を測り、断面椀型に壁が立ち上がる。埋土は 1 号溝と同じ黒灰色粘質土の単一層である。

出土遺物（第 12 図 1）

1 は土鍋の体部から底部にかけての破片で、内外面ともにハケ目が明瞭である。内面中位は帯状にマメツが激しい箇所があり、使用時に擦り切れたものと思われる。内外面ともに二次被熱により茶色化し、外面には煤が付着する。



第 10 図　東蒲池蓮池遺跡遺構配置図（1/100）

3 号溝（図版 14、第 11 図）

調査区中央、2 号溝の南に位置する東西溝で、東は 4 号溝に切られ、西は調査区外に伸びる。現存長 400cm 弱、最大幅 180cm、深さ 30cm 前後を測り、底面は平坦で壁は緩やかに立ち上がる。埋土は上層が 1・2 号溝同様の黒色粘質土、下層は基盤土に黒色粘土ブロックが混入する。出土遺物は少なく、糸切り底の土師器が出土しているが、小片のため図示できない。

4 号溝（図版 15、第 11 図）

調査区中央を南北に分断する溝で、1・2・3・6・8・9・10・11 号溝を切り、7 号溝に切られ、北端は消滅する。現存長 620cm、最大幅 70cm、深さ 20 ～ 30cm 前後を測るが、北側では一部深さ 60cm と深くなる。底面は平坦で壁は急峻に立ち上がる。埋土は上層が床土に似た茶褐色土、下層は軟質の暗下灰茶色粘土である。出土遺物は少なく、糸切り底の土師器が出土しているが、小片のため図示できない。

5 号溝（第 11 図）

調査区東側を南北に走る大溝で、南北および東端は調査区外に伸びる。旧クリークと考えられ、上層には近現代の陶器等が、下層には弥生土器や須恵器などの混入品と近代陶磁器小片が出土した。調査東南に位置する南北方向に流れるクリークと方向を同一にするもので、現代まで開口していたと考えられる。

出土遺物（第 12 図 2）

2 は青磁椀の口縁小片で、口唇部が強く外反する。外面にはなでつけによる 3 条の稜が巡り、胎土は緻密で、釉薬は灰色味を帯びる。

6 号溝（図版 14、第 11 図）

調査区中央に位置する東西溝で、東端は 4 号溝に切られて消滅し、西側は調査区外に延びる。現存長 450cm、最大幅 60cm 弱、深さ 10cm 前後と残存状況が非常に悪い。埋土は 1・2 号溝と同様黒色粘質土で、ローリングを受けた土器小片が少量出土したのみで図示できない。

7 号溝（図版 15、第 11 図）

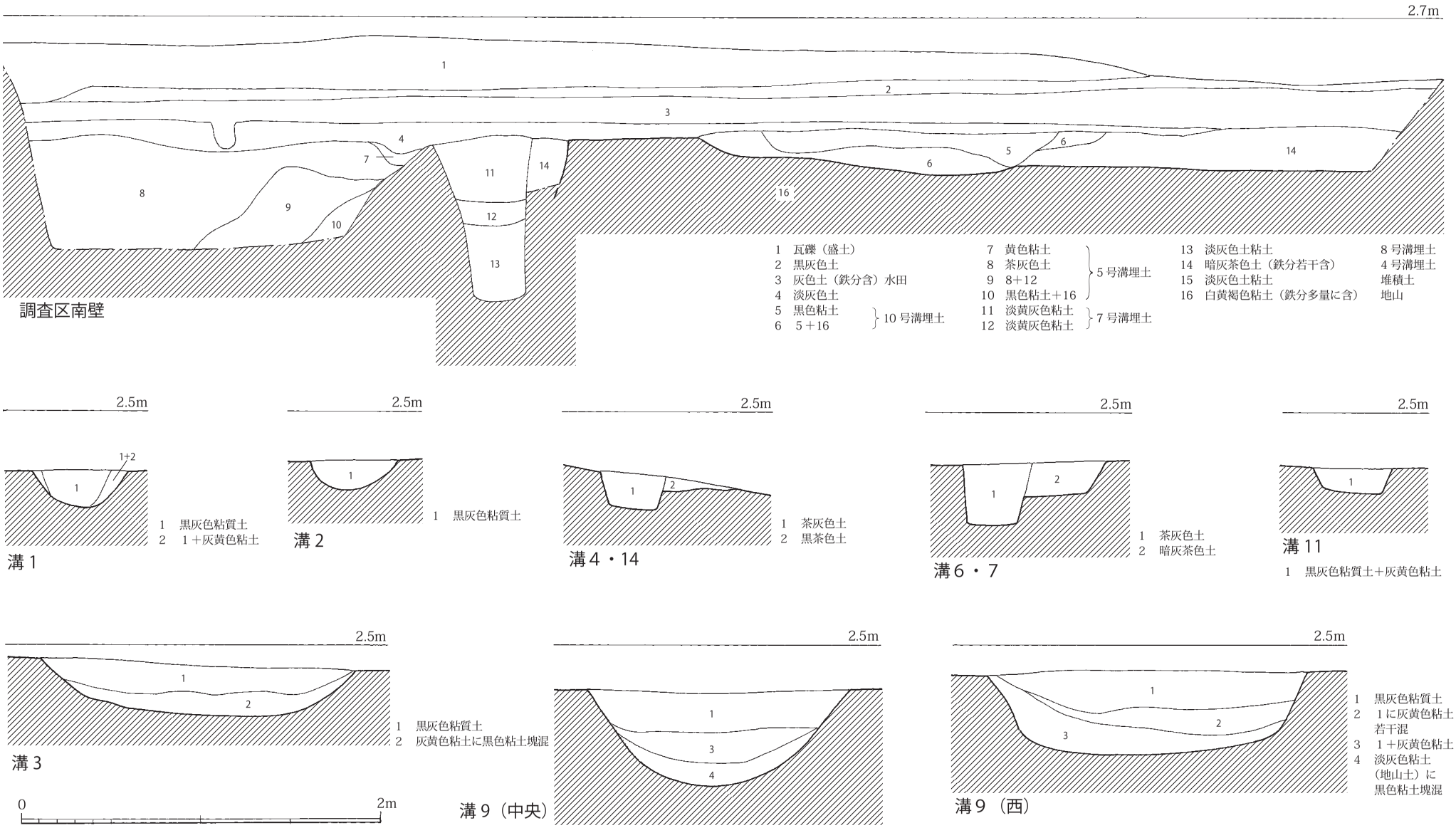
調査区中央南側を走る東西溝で、4・8 号溝を切り、北側は削平により消滅し、南側は調査区外に伸びる。現存長 820cm、最大幅 80cm、深さ 30cm 前後で、壁は急峻に立ち上がる。南側では 8 号溝と同位置を走る。埋土は上層が 4 号溝に似た鉄分の多い茶灰色土で、下層は基盤層に似た淡黄灰色粘土が堆積する。

出土遺物（第 12 図 3）

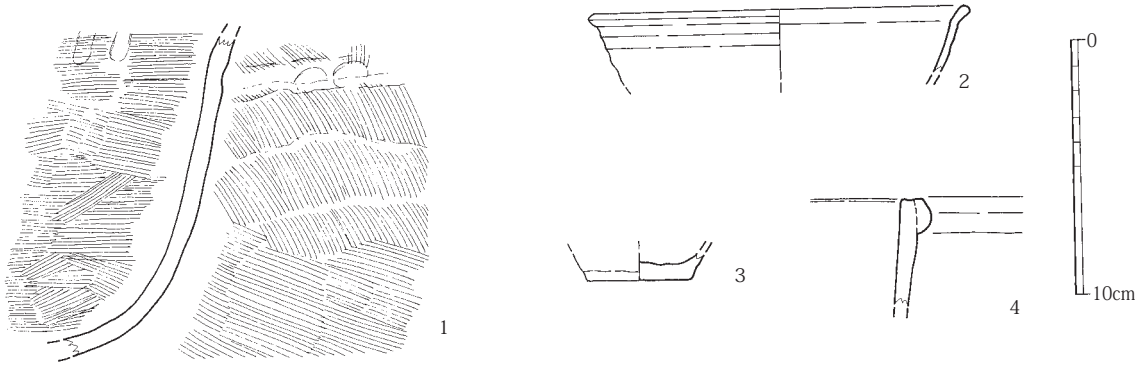
3 は土師器小皿底部片で、底部は糸切り、平底で経が小さく明橙色を呈する。

8 号溝（図版 15、第 11 図）

調査区中央から南端に走る南北溝で、北側は消滅し、南側で 7 号溝に切られるが、南が深くなるためその下に残存する。残存長 950 m、最大幅 80cm、深さは検出面からすると最大 90cm で、



第 11 図　1 ～ 11 号溝、調査区壁面土層図（1/30）



第12図　2・5・7・8号溝出土土器実測図（1/3）

壁は急峻に立ち上がる。埋土は北側は茶褐色土単層だが、中央から南側は下層に淡灰色粘土が堆積する。

出土遺物（第12図4）

土鍋口縁部小片で、口唇部の凸帯は貼り付け痕が明瞭である。外面は薄く煤が付着する。

9号溝（図版14・16、第11図）

調査区南側を東西に走る大溝で、東を4・5・7・8号溝に切られ西側は調査区外に伸びる。現存長580cm、最大幅150cm、最深55cmを測る。底面は西側では平坦だが東側では丸みを持ち、幅も狭くなる。壁は緩やかに立ち上がる。埋土は上層に黒灰色粘質土、中層に基盤土に黒色土ブロックの混入土、下層に軟質の淡灰色粘土が堆積する。出土遺物は糸切り底の土師器などもあるが、小片のため図化できない。

10号溝（図版14、第11図）

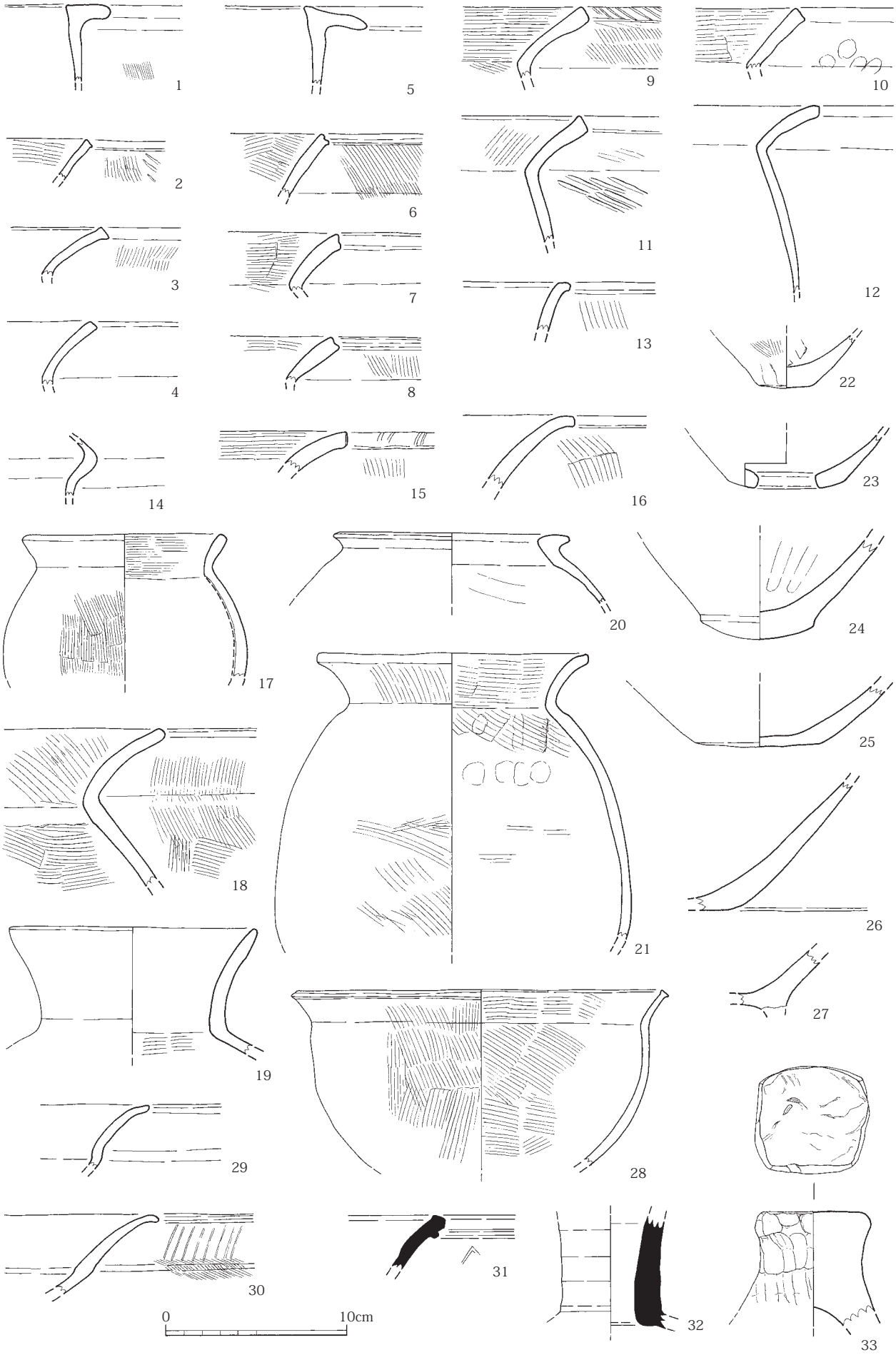
調査区南端に位置する大溝で、他の溝と異なり曲線を描きながら南西から東側に伸びる。南側は調査区外に伸び、東側は4･7号溝に切られて消滅する。現存長300cm弱、最大幅200cm弱、深さは20cm前後で南に向かって浅くなる。今回の調査の中で、この溝のみが曲線を描くプランを呈するが、断面形状や埋土に、他の溝と異なる特徴は見出せなかった。埋土は黒灰色粘土の単一層で、出土遺物はほとんどなく、図化できるものがない。

11号溝（図版15、第11図）

調査区南側､7号溝の南に位置する南西―北東溝で､西側は消滅し東側は4･7号溝に切られる。現存長280cm、最大幅60cm、深さ15cmと浅い。底面は平坦で壁はやや急峻に立ち上がり、埋土は黒色土と基盤土の混在土の単一層である。出土遺物はほとんどなく、図化できるものがない。

12号溝（図版15、第11図）

調査区北東端に位置する溝で、東側は5号溝に切られ、東側は削平により消滅したと思われる。現存長200cm、最大幅40cm、最深10cmと残りが悪く、埋土は灰色粘土の単層、遺物は出土していない。



第13図　その他の遺物実測図（1/3）

13 号溝（図版 16、第 11 図）

調査区北西端に位置する溝で、西側は調査区外に延び、東側は削平により消滅する。現存長 340cm、最大幅 20cm、最深 8cm と残りが悪い。埋土は床土に似た鉄分の多い茶灰色土の単一層で、遺物は出土していない。

(2)　その他の出土遺物

今回の調査では、各遺構や表土から弥生時代～中世の土器が出土した。ほとんどが混入品と思われるが、周辺に遺跡が存在することが想定されるため、すべてあわせて報告する。

出土遺物（図版 16、第 13 図）

1 ～ 13 は弥生土器の甕の口縁部である。1・2 は中期の甕口縁部小片で 1 はわずかに外面にハケ目が残る。3 ～ 13 も小片であるが傾きや口唇部の形状から甕として報告する。9 は口唇部に斜の刻み目が認められる。11 は体部外面に叩きが認められる。すべて摩滅が激しくローリングを受けるが、内外面ともにハケ目が認められるものが多い。14 ～ 22 は壷と考えられる。14 は袋状口縁壷口縁部小片で、屈曲部は丸みを持つ。他の弥生土器と異なり明橙色を呈し、胎土は精良である。磨滅が激しく調整は不明。15・16 は広口壷口縁部小片で、15 は口唇部に太く粗いキザミが認められる。17 は頸部が短い口縁部片で、胎土が精良である。口縁部内面および外面にハケ目が残存するが、内面は剥離のため調整不明。18 は内外面共にハケ目がよく残る。頸部の屈曲は強く屈曲部内面に稜線がつく。19 は口縁部の長い広口壷で、磨滅が激しいが体部内面に僅かにヨコハケが残る。20 は無頸壷で、口縁部は断面三角で体部は大きく張る。内面はケズリで調整し、上部には強い横ナデにより稜線が作られる。21 は口縁が強く外反する。外面と内面をハケ調整した後、内面口縁部から頸部までをナデ調整する。外面には多量に煤が付着しており、煮炊きに使用された痕跡が明瞭に残る。22 はミニチュア壷の底部と思われる。手捏ね後に外面をハケで粗く調整する。内面にも工具の当たりが残るが、その後粗いナデで調整する。23 ～ 26 は底部片で、甕・壷の区別が困難なため底部として一括で掲載した。23 は底面はややレンズ状を呈し、中央に焼成後の穿孔が認められる。調整は摩滅のため不明で、全体に二次被熱のため茶色を呈する。24 は底面はレンズ状を呈し、体部との境界はやや絞まり体部が大きく広がる。器壁は厚く、摩滅が激しいため調整は不明。25・26 は底面がわずかにレンズ状を呈し、器壁は厚い。27 は脚付き壷の底部片で、外面に煤が付着する。28 は鉢で、器壁が薄く硬質である。頸部の屈曲は緩やかで、口唇部は中央に浅い沈線を入れることで内外面に粘土が広がり凸線状になる。29・30 は高坏で、30 は外面をハケ調整した後ミガキを施し、口縁部付近のミガキは縦位の暗文状に施される。31・32 は須恵器。31 は壷口縁部小片で、外面口唇部下に凸線が巡り、波状文がわずかに認められる。32 は長頸壷の頸部片で、粘土継ぎ目で剝離している。内外面とも回転ナデ調整、胎土は精良で外面にやや艶を持つ。33 は支脚の上半部と思われる。全体にスサが混じるような胎土で、整形も粗い。受け部は平坦で断面は方形、側面は粗い指圧により上部が絞られ、下位は大きく広がる。下位は中空で、ナデによって調整される。外面にはわずかに二次被熱の痕跡がある。

また、今回の調査では遺構内および表土等から軽石が出土している。総量は多くないが、遺構の少なさから考えると目立つ遺物である。出土遺構は 1・3・4・5・8・12・13・14 号溝である。

5　小結

今回の発掘調査では、計 13 条の溝を確認した。出土遺物に混入品が多く、また遺物がない遺構もあるため時期の確定が難しいが、埋土の状況や切り合い関係から中世から近現代のものと考えられる。特に 5 号溝は近現代のクリークであり、全面的な掘削は行わなかったためここでは言及しない。その他の溝は北西－南東に流路をとるものと南北方向にとるものに分かれる。これらは切り合い関係から前者が新しく後者が古いことがわかる。また断面形状も前者は椀状を呈し、後者は逆台形を呈して掘形もシャープである。

南北方向に流れる 4・7 号溝は同一線上に位置し、同一溝として連続するように見えるが、調査区南側でプランを異にすることと土層の状況から、規模の違いと時期差が認められるため別遺構とした。8 号溝も同方向同一線上で 4・7 号溝と重なるが、プランと埋土の違いから別遺構とした。いずれも出土遺物が少なく、8 号溝出土の土鍋から 15 世紀を上限として近代までの時期が想定できるが、4・7 号溝が 5 号溝と同じ主軸を持つこと、埋土が 5 号溝下層の埋土と近似していることから、4・7 号溝の掘削時期は近世～近代の可能性が高い。また 4・7 号溝はほぼ同じ位置に掘削されていることから、大きな時期差はないと考え、8 号溝はそれをやや遡るが、断面形状や埋土から同じく近世～近代の範疇に入ると思われる。用途は不明であるが、排水溝などの可能性が考えられる。

北西－南東方向に流れる溝は溝幅により大小に分けられる。3・9・10 号溝は現存最大幅 150 ～ 200cm と幅広く大型で、残存する深さも 20cm 以上ある。10 号溝はプランがやや円弧を描くことから他の溝とは性格が異なるように見えるが、埋土や断面形状が同じであり、一連のものと考えたい。1・2・6・11 ～ 13 号溝は最大幅 100cm 以下で残存する深さも 20cm 未満と浅く、両端を消失しているものもある。ただし幅の大小はあるものの埋土は共通しており、主軸もほぼ同じであることから大きな時期差は考えられない。出土資料は少ないが、糸切り底の土師器や青磁椀の小片から埋没の時期は 13 ～ 14 世紀頃の範囲に収まると考えられる。またその機能については、狭小な調査区でありかつ出土資料が少ないことから想定することは困難であるが、周辺に現存する水田畦畔の方向と主軸をほぼ同じにすることは特徴的である。

本調査地の南側では、有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財発掘調査において条里に伴う遺構を複数個所で調査している。これらの調査は低地においても表層条里が残存することを証明したものであったが、その中に規模や埋土、主軸方向が類似する溝が認められる。本調査地付近は表層条里が明確に残存せず、また周辺遺跡や地名から旧地形を想定した場合、水田耕作に適した面積を確保できる可能性が少ない。さらに字名に示される「蓮池」の名称からある時期に池であった可能性が高い。しかし今回の調査において確認された溝群は現在の水田畦畔と主軸を同一にすることから考えて、中世のある段階に形成された水田に関連する排水溝であったことも想定できる。ただ今回検出の遺構には規模に大小があることや溝同士の間隔に規則性を見出せないといった問題点があり、水田や条里関連遺構を裏付ける根拠はない。ここではその問題点が時期差や時間差である可能性を残し、今後の周辺域の調査による土地利用の歴史の解明を待ちたい。

東蒲池蓮池遺跡図版

1　東蒲池蓮池遺跡
全景（南から）

2　遺跡西半部
（南から）

1　1・2 号溝（東から）

2　2・3・6 号溝（東から）

3　6・9・11 号溝（東から）

1　4・7・8 号溝（北から）

2　10・11 号溝（東から）

3　7 号溝南壁土層

1　9 号溝中央土層（東から）

2　出土土器・土製品

西蒲池池田遺跡

Ⅴ　西蒲池池田遺跡

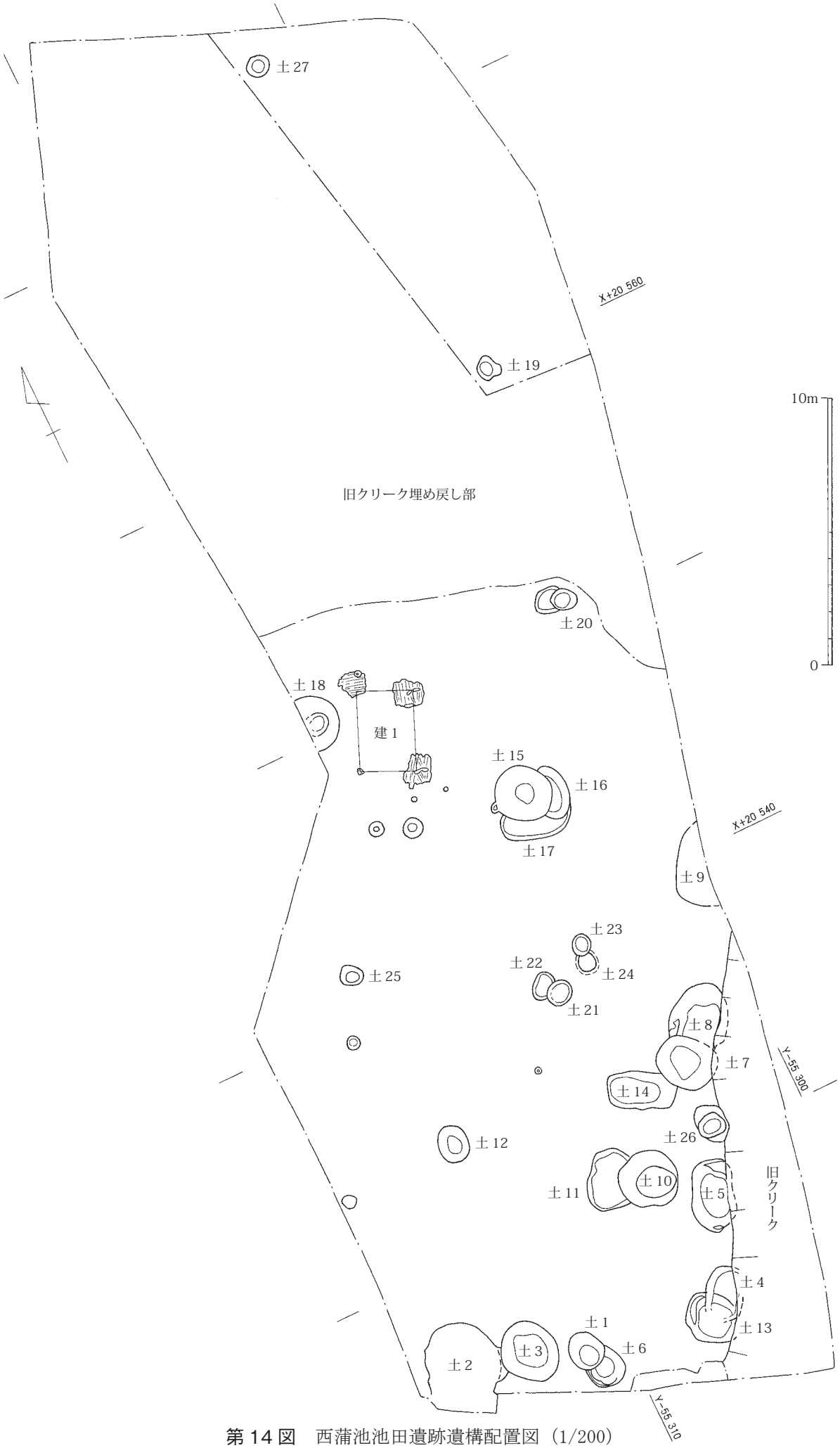
１　調査の経過

西蒲池池田遺跡の調査は、平成21年6月8日から平成21年7月17日にわたって実施した。

バックホーを6月8日に搬入し、一部試掘未実施の部分にトレンチを設定して遺跡の範囲を確定した。結果、旧地形は北に向かって傾斜しており、地盤が軟弱になるにつれ遺構密度が薄くなり、調査対象地北側約1／3には遺構がまったく認められなかった。このため調査範囲を南側2／3に限定し、表土掘削を開始した。調査地点は全域が田畑であり、まず再利用される耕作土を分けて掘削・仮置きした後、更に掘削を行った。表土除去後、調査区全体に遺物を含む黒色土の堆積が認められたが、遺物が少量であり混入品も多いことから、一部を包含層として人力で掘削することとして残し、その他は明確な遺構面まで黒色土を除去した。この黒色土は一部遺構上面に埋土として残ったが、本来の遺構面に土坑および溝のプランを確認した。

6月10日には建機および道具類を搬入し､6月11日より作業員の人力による作業を開始した。周辺の遺跡同様、遺構面は乾燥や雨水の影響を受けて泥質化およびヒビ割れし、再度の遺構検出が著しく困難となるため、バックホーでの表土の除去と並行して人力による遺構の検出作業を行った。6月12日より順次人力による遺構掘削を行い、当初に調査区東側に位置する溝が隣接する現代のクリークの旧ラインであることを確認した。この旧クリークにより遺構面が大きく削平されていること、また旧クリークの肩が軟弱で掘削による崩落が考えられること、隣接する現クリークの水が調査区に大量に流れ込むと考えられることから、旧クリーク部分の全掘削を諦め、他の遺構の状況によって必要箇所のみを掘削することとした。この結果主に土坑の掘削が中心となり、順次図面の作成も進めていった。土坑は切り合いがあり、前後関係が不明瞭な部分もあったため土層を残しながら掘削を行った。しかし、梅雨の時期であったことから降雨の影響を受けて現場に大量の水が滞水することや、隣接するクリークからの湧水により土層および遺構が大きく崩落したものが多々あった。また、調査区北側を東西に横断する大溝についても、検出時点で表層に近現代の遺物が多いことからトレンチを設定して重機により内容を確認したところ、現代にクリークを埋めたものと判明した。これについても崩落の危険性があったことから急遽現地表レベルまで埋め戻しを行った。この折、軟弱地盤故に重機のキャタピラーがはまり込んで引き上げられなくなるという事態になった。この溝は遺構番号を付したものの、安全性の問題からトレンチのみの掘削で終了した。

7月2日、土坑の掘削をほぼ終了したところで、調査区北西部から掘立柱建物の柱基礎である「礎盤」が検出された。このためこれに組み合う柱掘形の検出を行い、残り3個の柱基礎を確認、検出を行った。7月9日には遺構の掘削をすべて終了し、7月13日にラジコンヘリによる空撮を行い､17日には調査を終了した。また､調査実施中に近隣住民の見学が多かったため、7月11日に地元対象の現地説明会を実施し、あいにくの雨天にもかかわらず30名以上の参加があった。



第14図　西蒲池池田遺跡遺構配置図（1/200）

２ 遺跡の概要

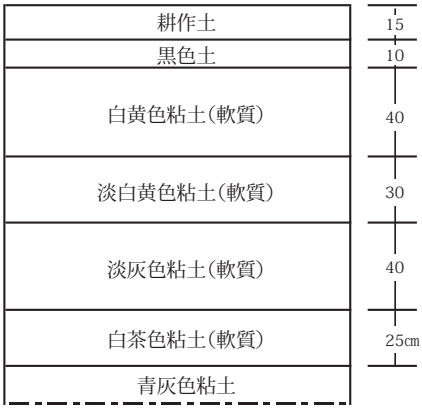
本調査地点は柳川市の北部、大川市との市境に近い蒲池地区に位置し、国道 385 号バイパスと有明沿岸道路交わる柳川西 IC 交差点から北側へ約 800 ｍの地点である。筑後川の堆積作用と有明海の潮汐により形成された低平地上で、調査前の田畑の地表高は標高 3 ｍ程度である。このため調査区内の堆積層は軟弱な粘質土が主体で、「蒲池」の名を裏付けるように基盤層下層には葦などの植物遺体の痕跡が確認できた。現在の標高は調査区から西北に向かって徐々に高くなり、南に 100 ｍ程離れた住宅密集地区とは 1 ｍ程も高低差がある。地域住民の話ではその地区は昔から水害の影響を受けないことから一等地とされており、おそらく地盤が安定している優良地であったと思われる。調査区は、地盤安定地区から徐々に北に向かって標高が下がり軟弱地盤へと変換する地点であり、それにあわせて現代の土地利用が宅地から水田へと変化している。また水田域には本地域に特徴的な景観を形成するクリークが縦横無尽に走り、調査区東にも隣接している。さらに蒲池地域は昔イグサ栽培が盛んであり、現水田も以前はイグサを栽培していたらしく、遺構面にも直径 5 ～ 10㎝ 程度の杭の痕跡が無数に認められた。

調査区は南北長 60 ｍ程度、東西幅で最大 20 ｍ程度、面積は 996 ㎡で、調査面の標高は 2.0 ～ 2.4 ｍ前後である。検出した遺構は掘立柱建物 1 棟と土坑 28 基、小ピットが数基である。掘立柱建物は 1 間× 1 間を検出し、出土遺物がほとんどないため時期の特定は困難であるが、その他の状況から弥生時代後期のものと思われる。土坑は直径 1 ｍ程度の小型円形のものと 2 ～ 3 ｍの大型のものに分かれ、大型の土坑にはプランが円形・楕円形・隅丸長方形のものがあり、断面形状がすり鉢状になるものと底面が平坦になるものとがある。小型の土坑は弥生時代後期と古墳時代、大型の土坑は中世と大きく 3 時期にわかれ、埋土の状況も時期差に連動していた。

出土遺物は少なく、土師器、須恵器、陶磁器類がパンケース 20 箱分出土した。遺構に伴うものが大半ではあるが、混入と思われる遺物も多数出土した。また黒色土包含層にも中世以前の複数時期の遺物が混入していた。

３ 基本層序

調査区西壁で記録した基本土層は第 15 図に示すとおりである。調査前は水田であったため上層には厚さ 15㎝ 程の耕作土が積まれ、その下に遺物を包含する黒色土が 10㎝ 前後堆積する。なお調査区南側ではこの下に暗灰色粘土層が認められた。黒色土を除去すると基盤層である軟質の白黄色粘土となり、この面で遺構が検出された。さらに下はより軟質の淡白黄色粘土となり、以下は同様に軟質の淡灰色粘土・白茶色粘土となり、グライ化した青灰色粘土層に続く。淡白黄色粘土層以下は足が沈むほどの軟弱粘土層で、調査区北に向かってこの面より上の層の堆積がなく、これに伴って遺構が減少、消滅していく。



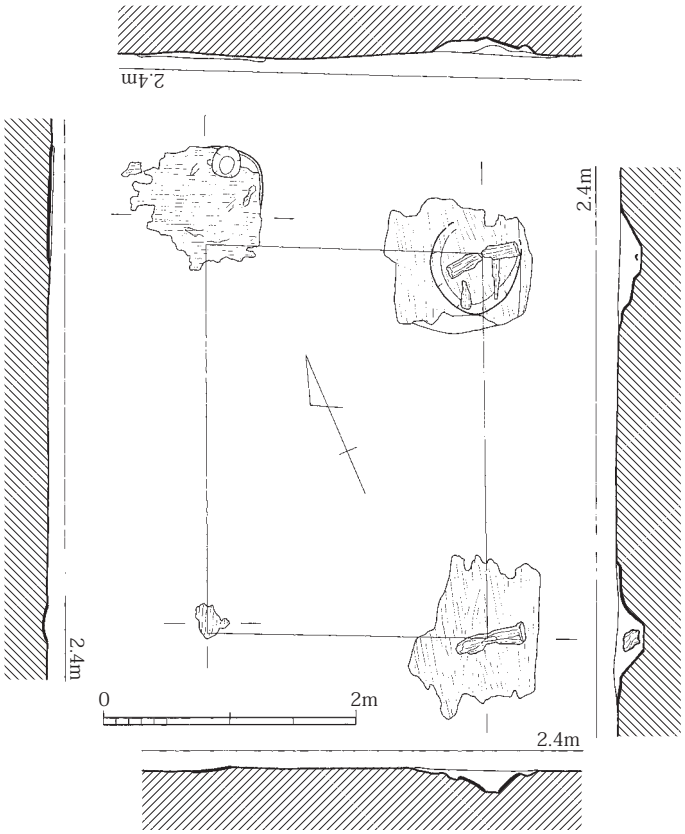
第 15 図　基本層序

4　検出遺構と遺物

(1) 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡(図版 18、第 16 図)

調査区北東部に４つの柱掘形の痕跡を確認した。１間×１間分を検出したが西南隅の柱掘方は底面の一部しか残存していなかった。他の柱掘方も底面以外ほとんど残存しないが、その形状から１m前後の隅丸方形になると推定する。掘方底に樹皮もしくは葦状の植物を敷設し、中央に柱受材として横木を据えて柱を立てる「礎盤」の構造である。2つの掘方に横木が残存しており、いずれも板材の中央部両側に大きな欠き込みをし、柱側の下部中央を欠き込んで組み合わせるタイプである。横木は広葉樹と思われるが残存状況が悪いため取り上げることができなかった。敷設植物は繊維の方向が複数に及ぶことから、樹皮を数枚もしくは葦の束を数束重ねたと考えられる。また、横木のあるものは柱の重圧で中央部が大きく窪んでいたが、横木のないものは敷設植物が平坦なままであった。これら４つの柱穴は、構造がやや異なること、柱間間隔や軸にずれがあることから本来は2棟分の可能性もあるが、掘方底面のレベルがほぼ同じであり、周辺を確認したが他に痕跡が認められなかったことから、ここでは1棟として報告する。



第 16 図　1 号掘立柱建物実測図（1/60）

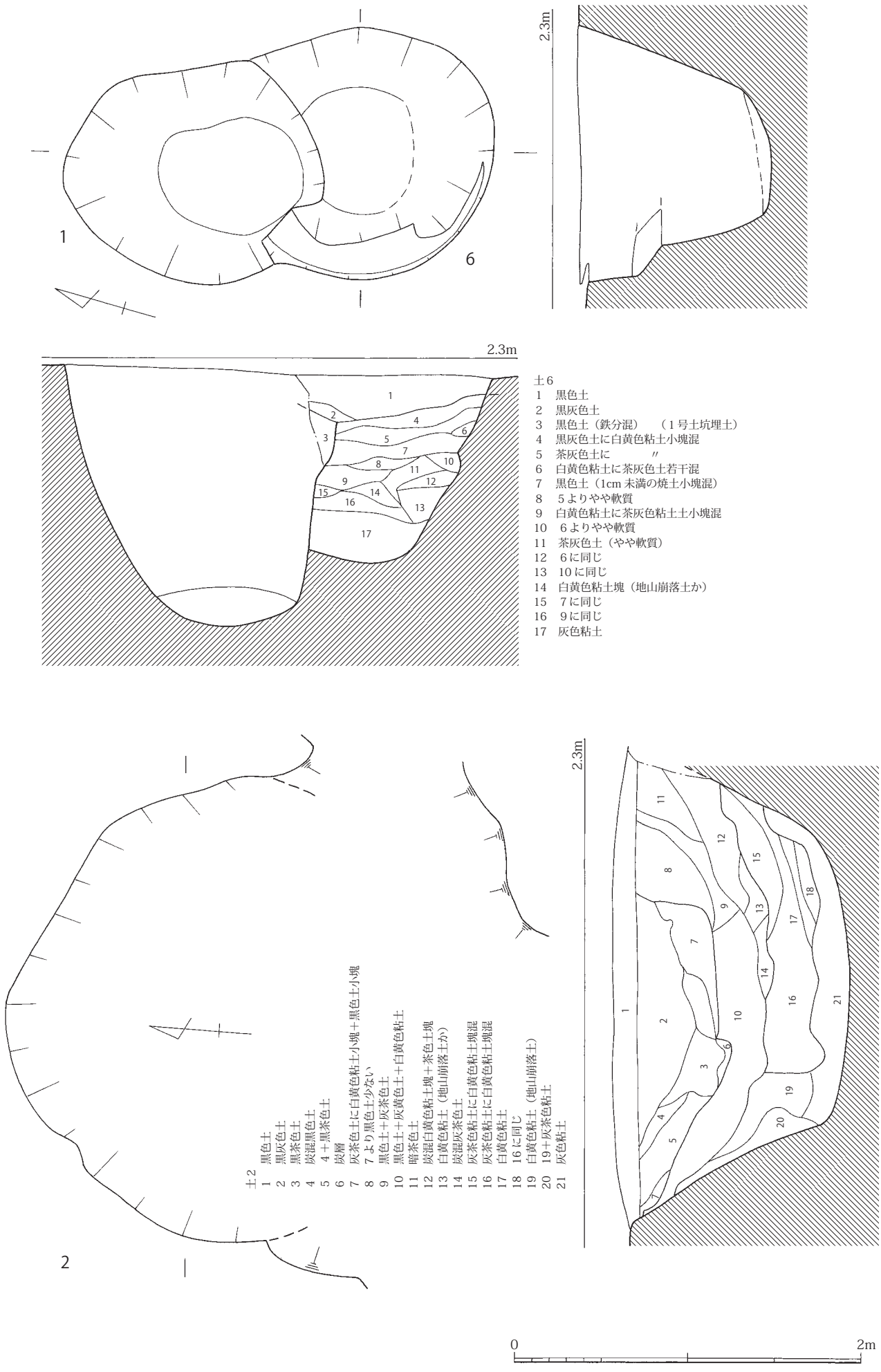
出土遺物（図版 32、第 33 図 1）

1は不明土製品で、製品か否かも不明である。表面は緩やかに湾曲し、中央に工具のあたりのような方形の孔が3つ連続してある。全体に被熱のため赤変し、胎土にはスサが多量に混じっていた痕跡が残る。

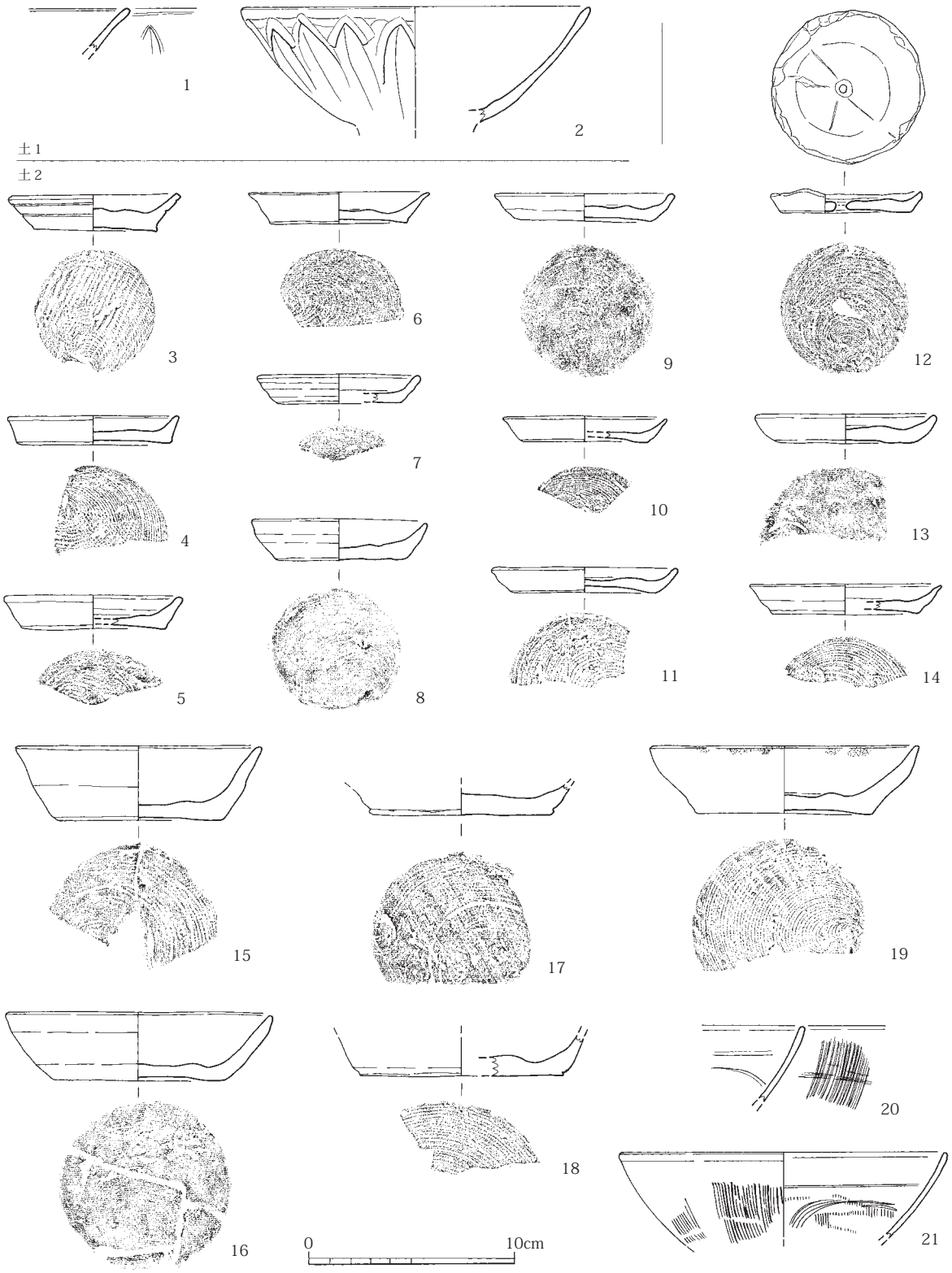
(2) 土坑

1号土坑（図版 19、第 17 図）

調査区南端の中央部に位置し、6号土坑を切る。長軸 160 ㎝弱、短軸 120 ㎝前後の楕円形土坑で、深さは 150 ㎝前後、壁の立ち上がりは北側が崩落のため不明確であるが、6号土坑を切る南側は急峻である。最上層に黒色土が入り、当初6号土坑を含めて1遺構としていたが、黒色土除去段階で2基の土坑であることを確認した。調査途中にベルトが崩落したため土層図がないが、上層部は黒色土に灰色土塊が混入した斑土、中層部には地山に近似した黄色粘土が入り、使用時の壁面の崩落かと思われる。更に下層部には地山粘土に黒色土塊が混入し、以下は



第17図　1・2・6号土坑実測図（1/30）



第18図　1・2号土坑出土土器・陶磁器実測図（1/3）

グライ化した軟質粘土の地山となる。

出土遺物（第 18 図 1・2）

1･2 ともに蓮弁文を有する青磁碗である。2 は口縁が大きく開く碗で、口唇部を肥厚させる。外面には片彫りで鎬蓮弁を表現するが、彫りが浅いため明瞭さを欠く。胎土は灰色で精良、釉はやや淡い緑色を呈する。

2 号土坑（図版 19 ・20、第 17 図）

調査区南西隅に位置する直径 5 m以上の円形土坑である。調査区外に広がるため一部南側に調査区を拡張してプランを検出したが、調査中に雨水の影響を受けて崩落したため正確な規模や形状は不明である。また再崩落の危険が伴うため、以後の掘削は部分的に行った。上層部には黒色土、黒灰色土が入り、中層部軟質の黒色土が中心で、いずれも一括で埋められたようである。下層は茶色土と白黄色粘土が中心の軟質層となる。下層の一部には崩落したとみられる地山土粘土の大型塊があった。最下層の灰色粘土は自然堆積であろう。出土資料は土器類の他、ハイガイや杉と思われる木材片があり、下層には巨石が廃棄されていた。

出土遺物（図版 28、第 18 図 3 ～ 21、第 34 図 4・5）

3 ～ 14 は糸切り底の小皿。口径は 8.4 ～ 9.2cm、器高 1.2 ～ 1.9cm とバラつきがあり、形状的にも時期に幅がある。14 が最下層からの出土。3・4 は外底部に板状圧痕が認められる。12 は底部中央に焼成前穿孔があり、穿孔を中心に放射状の工具痕が認められる。13・14 は内底部に部分的な赤変箇所がある。15 ～ 19 は糸切り底の杯。これらも時期幅が考えられる。17・19 は外底部に板状圧痕が認められる。20・21 は同安窯系の青磁碗片。20 は口縁部小片で、外面に縦位の櫛描文を、内面には略化した花文を描く。内面口縁部付近は幅 1 cmほどが薄く削られ、釉の濃淡により帯状の文様を表現する。釉は薄い黄緑色を呈する。21 も同様の文様であるが、20 より文様が明瞭で、口縁部が若干肥厚する。釉は灰色味が強く透明感がある。

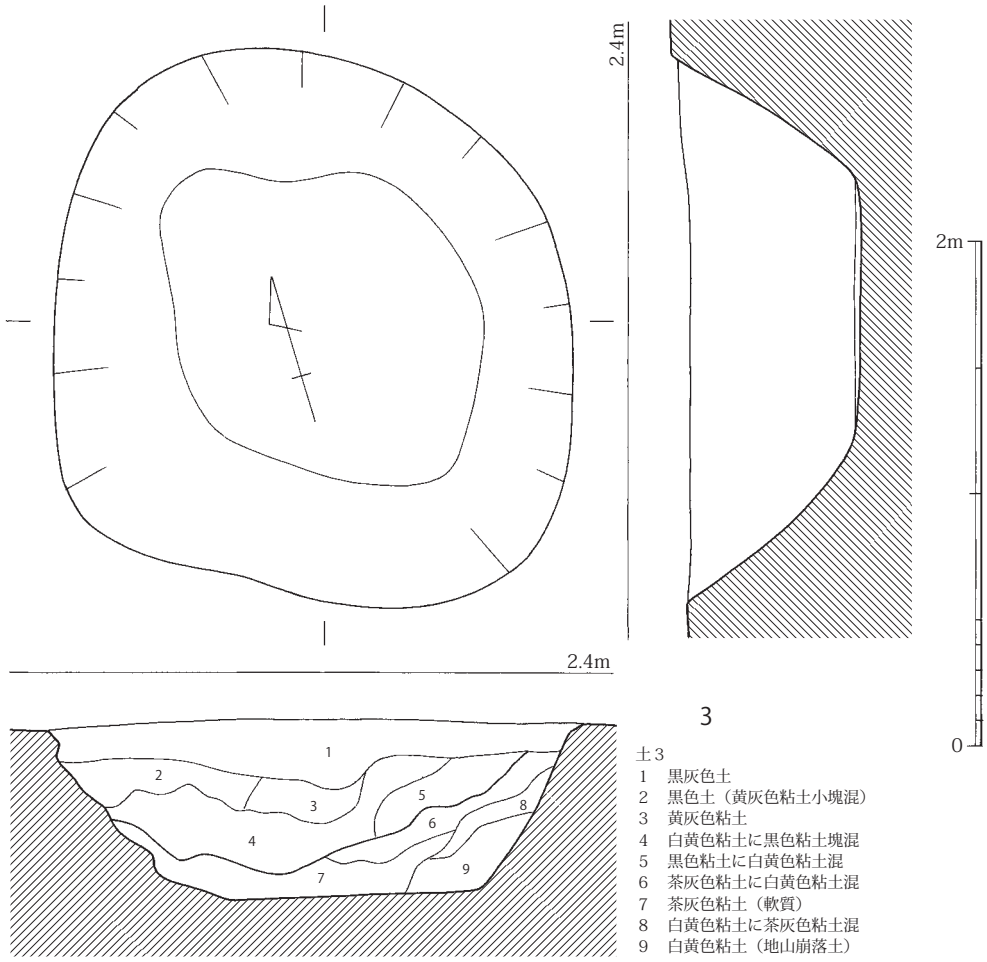
第 34 図 4･5 は口縁部直下に鍔が巡る滑石製石鍋である。4 は断面正台形の鍔が巡るもので、器壁は平滑さを欠き全体に作りが粗い。石質も粗悪で外面には使用中に抉れた痕跡があり、抉れ面に煤が付着する。破損後も使用されたのであろう。5 は断面縦長台形の鍔が巡るもので、外面は数段に分けて細かく削って調整される。内面は極めて平滑で、石質も良質で全体に作りが良い。外面には部分的に煤が付着する。

3 号土坑（図版 20、第 19 図）

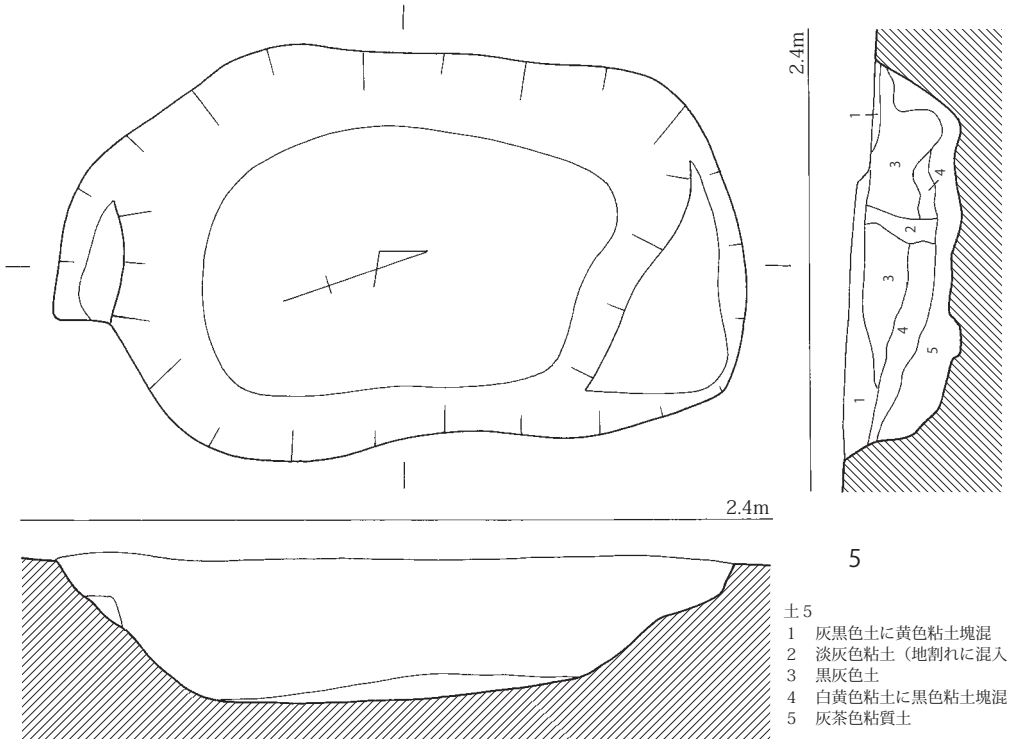
調査区南西隅、2 号土坑の東に隣接する直径 200 cm前後の不整円形土坑で、深さは 80 cm弱、底部は平坦となり、壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は上層部には黒色土・黒灰色土が入り、中層は地山の白黄色粘土および黄灰色粘土を含む層が塊状に堆積しており、意図的に埋められたと思われる。下層部は地山白黄色粘土が壁面から崩落した状態とその後に堆積したと思われる軟質の茶灰色粘土があることから、自然崩落および堆積であろう。使用後一定期間開口した後、意図的に埋められたものであろうか。

出土遺物（第 20 図 1）

糸切り底の土師器杯片で、底径が小さく口縁が直線的に大きく開く。体部の下位は強いナデ

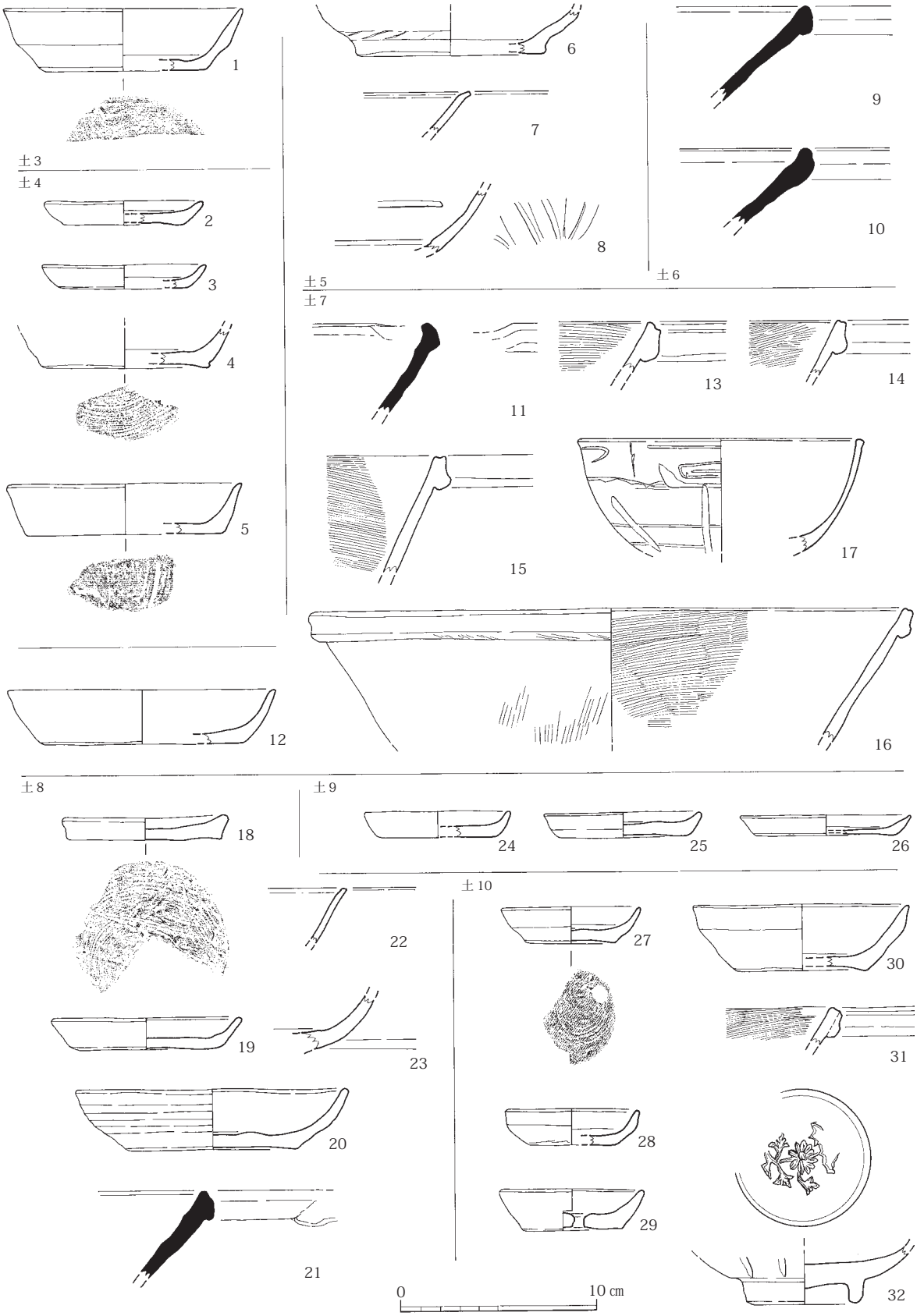


土3
1　黒灰色土
2　黒色土（黄灰色粘土小塊混）
3　黄灰色粘土
4　白黄色粘土に黒色粘土塊混
5　黒色粘土に白黄色粘土混
6　茶灰色粘土に白黄色粘土混
7　茶灰色粘土（軟質）
8　白黄色粘土に茶灰色粘土混
9　白黄色粘土（地山崩落土）

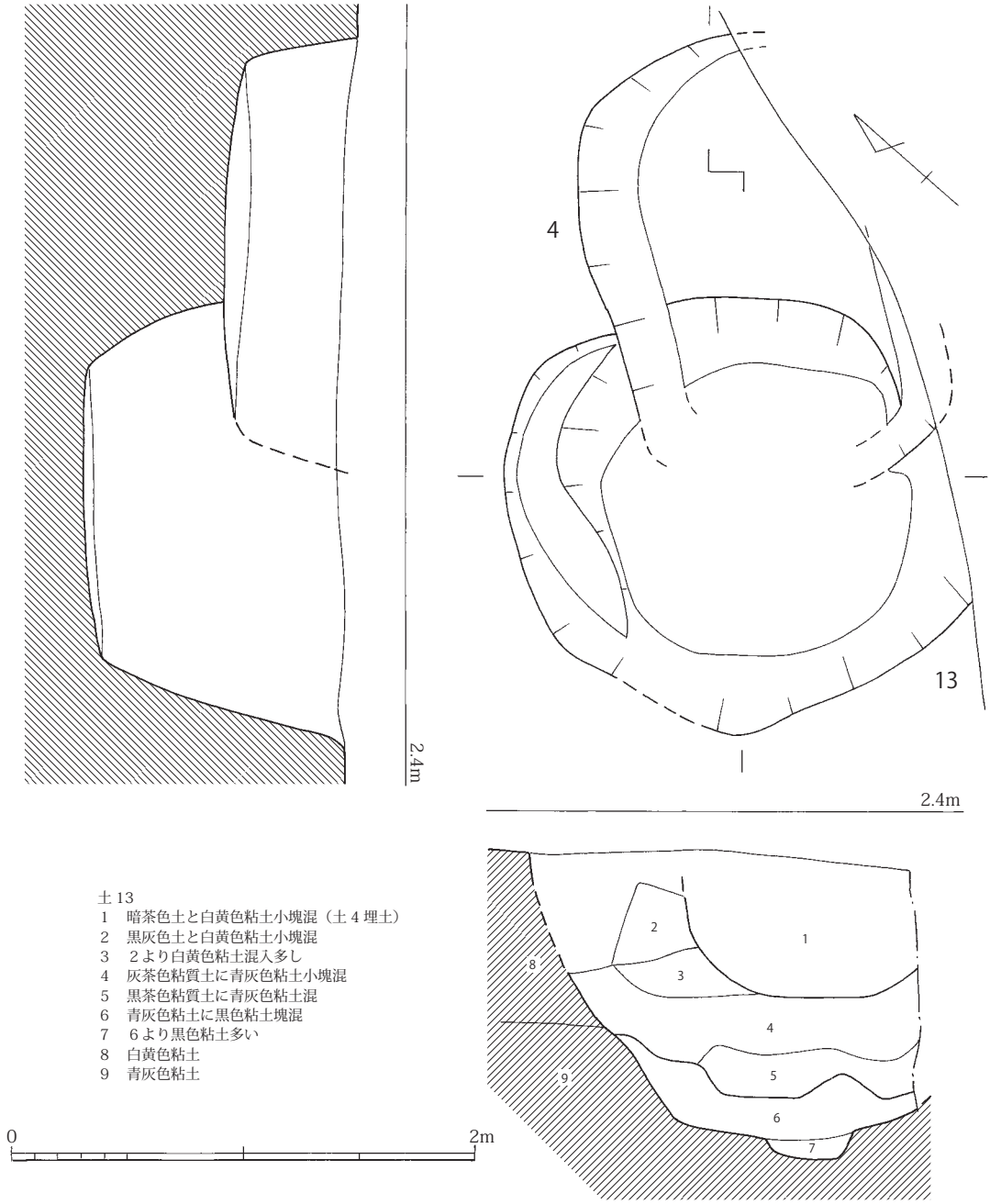


土5
1　灰黒色土に黄色粘土塊混
2　淡灰色粘土（地割れに混入？）
3　黒灰色土
4　白黄色粘土に黒色粘土塊混
5　灰茶色粘質土

第19図　3・5号土坑実測図（1/30）



第20図　3～10号土坑出土土器・陶磁器実測図（1/3）



第 21 図　4・13 号土坑実測図（1/30）

により器壁が薄くなり、底部は平坦になる。

4 号土坑（図版 20、第 21 図）

調査区南東隅、旧クリークに切られる。当初 13 号土坑と同一遺構として掘削したが、半裁時に 13 号土坑の掘方を確認した。調査途中に南側は崩落したため正確なプランは不明であるが、隅丸長方形の土坑で長辺 200 cm弱、短辺 130 cm前後と思われる。深さは 60 cm前後、壁の立ち上がりは急峻であるが底部付近で緩やかに丸みを持ち、底部は平坦面となる。崩落のため土層図はないが、埋土は最上層が黒色土、上層部は地山白黄色粘土と黒色粘土の斑状の層で、

5 号土坑等と共通する。下層は暗茶色土と地山土の小ブロックが混じった埋土で、意図的に埋められた様子である。5 号土坑とは近似した主軸をなしている。

出土遺物（第 20 図 2 ～ 5）

すべて糸切り底の土師器で、2・3 は小皿片。器高は低く口縁が大きく開き法量は極めて小さい。2 は外底部に板状圧痕が残る。4・5 は杯片で 5 は体部が直線的に開く。

5 号土坑（図版 21、第 19 図）

調査区南西部、4 号土坑の北側に位置し、東側上面は旧クリークに削平されるがプランは確認できた。プランは上面が不整楕円形で中位以下は隅丸長方形を呈し、上面の一部が崩落したと思われる。上面では長軸 270 ㎝前後、短軸 150 ～ 170 ㎝、中位からは長軸が 220 ㎝、深さは 60 ㎝弱である。壁の立ち上がりは西壁以外は緩やかで、底部は一部凹凸があるもののほぼ平坦面となる。土層は全体に水平堆積しており、上層部は灰黒色土および黒灰色土の暗い埋土が主体で、下層部は地山白黄色粘土に黒色ブロックの斑状土、軟質の灰茶色粘土と明るい層が堆積する。4 号土坑と近似した主軸をなしており、形状や埋土の状況も近似する。

出土遺物（第 20 図 6 ～ 8）

6 は糸切り底の土師器杯で底部は厚く、体部下位は工具ナデによって底部を小さく作る。7 は口禿の白磁碗口縁部小片で、釉はやや緑色味を帯びる。8 は龍泉窯系の青磁碗で外面に片彫りの鎬蓮弁が表現される。胎土は良質で釉は暗緑灰色を呈する。

6 号土坑（図版 19、第 17 図）

調査区南端部、3 号土坑の北側、 1 号土坑の南側に位置し、1 号土坑に切られる。当初 1 号土坑を含めて 1 遺構として認識したが、黒色土除去段階で 2 基と認識した。直径 150 ㎝前後で、中位やや上部にテラスを有する。底面は断面レンズ状で直径 70㎝ の円形を呈する。壁は緩やかに湾曲しながらも急峻に立ち上がる。埋土は上層が黒色土や黒灰色土が中心で水平堆積し、中層は白黄色粘土と茶灰土の互層、最下層はグライ化した軟質粘土に黒色粘土が混入する。中・下層は意図的に埋められた様相を呈する。出土遺物は破片が多く、図化できるものはわずかである。

出土遺物（第 20 図 9・10）

9・10 は共に東播系須恵器の鉢口縁部小片で、9 は口唇部を断面三角に肥厚させる。10 は口唇部がわずかに内傾し、口唇部は緩やかに肥厚する。

7 号土坑（図版 21、第 22 図）

調査区中央よりやや南に位置し、8 号土坑と 14 号土坑の間にあって双方を切る。長軸 220㎝、短軸 190㎝ 前後の隅丸方形に近い円形の大型土坑で、崩落のため底部の形状は一部不明であるが、隅丸不正台形と考えられる。壁の立ち上がりは緩やかであるが、埋土中に地山の崩落土があることから、本来の形状は異なるかもしれない。埋土は大きく 5 つに分かれ、最上層は黒色土、黒灰色土、地山土に似る白黄色粘土、次層は地山粘土と黒色土が混じる斑の層で、その下の層はやや明るい埋土であるが、様々な土が混じる汚れた埋土であり、ある段階の意図

土7
1 黒色土
2 黒灰色土（鉄分多）
3 白黄色粘土
4 2に白黄色粘土混
5 黄茶色土（黒色土塊混）
6 白黄色粘土に茶色土塊
7 灰茶色粘土
8 茶色土（やや粘質）
9 茶色土
10 茶色粘土
11 茶色粘土＋黒色粘土＋白黄色粘土塊
12 黒色土塊混灰茶色粘土
13 白黄色粘土塊
14 暗灰色軟質粘土
15 灰色軟質粘土

土8
1 黒色土
2 黒色粘質土
3 黒灰色土（やや粘質）
4 黒灰色土粘土
5 茶色土（やや粘質）
6 茶色粘土
7 炭・白黄色粘土混暗茶色粘土
8 炭層
9 淡黄茶色粘土
10 7と似る。白黄色粘土小塊多
11 9＋白黄色粘土（軟質）
12 6に白黄色粘土小塊多量に混入

第22図　7・8号土坑実測図（1/30）

的な埋め土と思われる。下層部は軟質の粘土層で特に最下層には自然木が多く、使用時の自然堆積と考えられる。断面形状と埋土の状況が下層部とそれ以上で異なることから、最掘削か崩落後に意図的に埋められたと考えられる。10 号土坑と断面形状・埋土が近似する。

出土遺物（図版 28、第 20 図 11 ～ 17）

11 は東播糸須恵器の片口鉢口縁部小片で、口唇部は断面三角に肥厚する。12 は糸切り底の土師器杯で、全体に摩滅が激しい。体部は直線的に立ち上がる。13 ～ 16 は土師器土鍋で、いずれも口唇部を肥厚させる。内面は横ハケ調整、外面はナデ調整を行うが、16 の外面にはわずかに縦ハケの痕跡が認められ、煤が多量に付着する。17 は体部が丸味をもつ青磁碗で、口唇部は若干肥厚させる。外面口縁部付近には雷文が、体部には片彫りによる分割線が表現される。胎土は灰色で、釉は暗緑灰色を呈する。

第 34 図 3 は頁岩質砂岩の砥石の破片で、残存する 3 面すべてを砥面として使用する。2 面は使用が顕著で平滑であるが、1 面はあまり使用されず凹凸が多い。

8 号土坑（図版 22、第 22 図）

調査区中央やや南に位置し、7 号土坑に切られる。不整楕円形のプランを呈するが、底部が隅丸方形である。また、埋土の状況からも 4 号・5 号土坑同様、隅丸長方形のプランで、上面が若干崩落したものとも考えられる。長軸 210 ㎝以上、短軸 210 ㎝前後と推測され、底部は平坦面となる。壁の立ち上がりは緩やかである。埋土は最上層部が黒色土と黒灰色土、上層部は茶色土を主体とする暗い埋土、中層部には 1 ～ 3 ㎜の炭層とその上面に堆積する炭混入の暗茶色土、下層部は地山白黄色粘土を主体とする明るい埋土である。炭層までの上層部・中層部は水平堆積で、下層は自然堆積状を呈する。西側には更に下層に茶色粘土が堆積するが、これを切るように上層～下層が堆積しており、再掘削が行われたことが考えられる。

出土遺物（第 20 図 18 ～ 23）

18・19 は糸切り底の土師器小皿。19 は口縁が直線的に開き器壁は薄く、底部は平坦である。20 は糸切り底の土師器杯。外面には強い回転ナデによる稜線が数条残る。21 は東播系須恵器の片口鉢。22 は口禿の白磁碗口縁部小片。釉は厚めのため露胎部分との境に段が生じる。釉はやや青色を帯びる。23 は灰釉の碗底部小片で釉はきわめて薄い。

9 号土坑

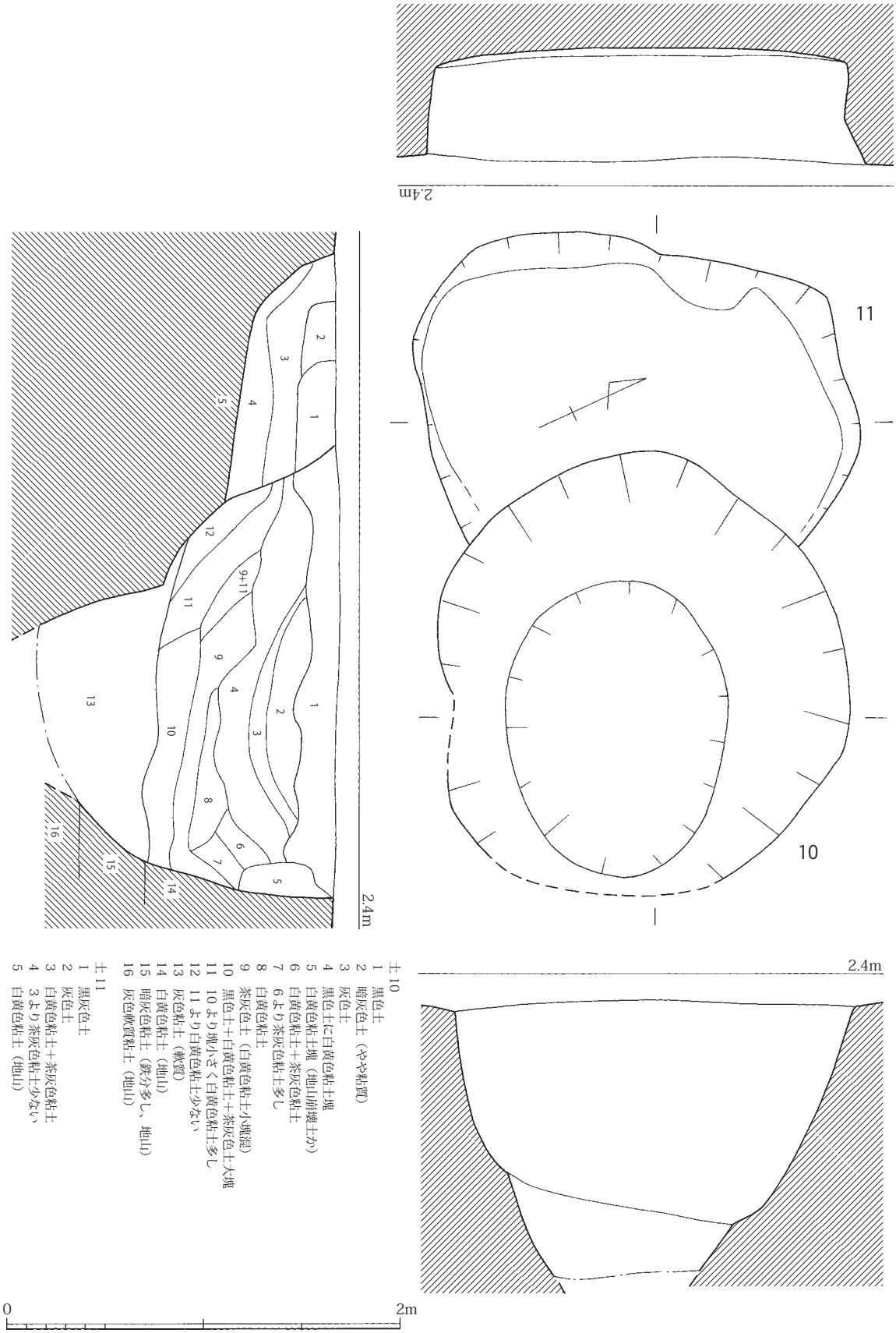
調査区中央東端に位置する土坑で、現クリークに切られるためほとんど残存しない。また湧水が激しく、崩落によって現クリークを破損する恐れがあったため、掘削を途中で断念した。埋土は上層が黒色土、中層は灰色土である。

出土遺物（第 20 図 24 ～ 26）

すべて糸切り底の土師器小皿である。いずれも器高が低く法量は少ない。

10 号土坑（図版 22・32、第 23 図）

調査区東南部、5 号土坑と 11 号土坑の間に位置し、11 号土坑を切る。長軸 220cm 以上、短軸 210cm 前後のほぼ円形の大型土坑である。壁の立ち上がりは中位以上は緩やかであるが、下



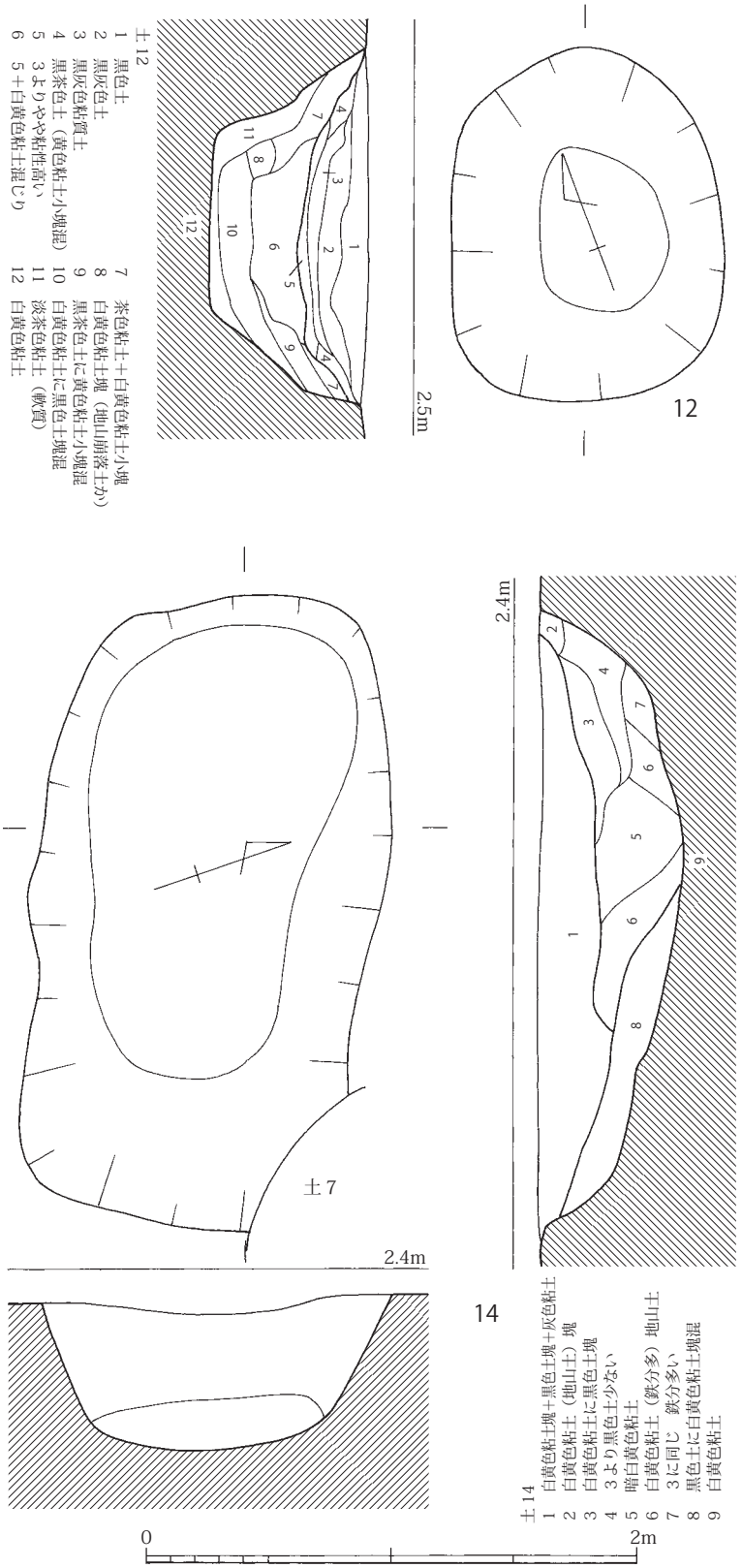
第23図　10・11号土坑実測図（1/30）

位はやや急峻に立ち上がる。調査中に壁が崩落し危険が伴ったため、下層の掘削を断念した。埋土は7号土坑と近似しており、上層部は黒色土を中心の自然堆積、中層部は地山の白黄色粘土中心の意図的な埋め土、下層部は軟質粘土の自然堆積で、断面形状も7号に近似している。

出土遺物（図版28、第20図27～32、第34図6）

27～29は糸切り底の土師器小皿で、いずれも底部径の比率が小さく器高が高い。29は底部中央に焼成前穿孔がある。30は糸切り底の土師器杯で、小皿と同様底部径が小さく器高が高い。31は土師質の土鍋口縁部小片で、内面は横ハケで調整する。32は青磁碗の底部で、見込みに草花文と圏線を描き、外面には片彫りによる分割線がわずかに認められる。高台は高く、外面端部は面取りされる。釉は高台畳付まで厚く施され、底部外面はほぼ露胎となる。釉は深い緑色でやや暗めに発色する。

第34図6は滑石製石鍋で、口縁部直下にやや退化した鍔が巡る。外面は縦ケズリで細かく調整され、内面は平滑に仕上げられる。外面鍔以下には煤が付着する。



第24図　12・14号土坑実測図（1/30）

11号土坑（図版22、第23図）

調査区南側中央部、10号土坑の西に位置し10号土坑に切られる。長軸220cm前後、短軸

160cm 以上の隅丸長方形の大型土坑で、底面の形状も隅丸長方形になると思われる。深さは現存で 60cm 前後と浅く、底面は平坦で 8 号土坑と形状が近似する。埋土はほぼ水平堆積で、上層に黒色土が入るが以下は地山の粘土に茶灰色土が混じる層で、意図的な埋め土の可能性が高い。出土遺物は少なく図示できるものがないが、糸切り底の土師器が出土している。

12 号土坑（図版 23、第 24 図）

遺構の希薄な調査区西部南側に位置する土坑である。長軸 145cm、短軸 110cm の中型の土坑で、深さ 60cm 強とやや浅い。埋土は最上層部に黒色土・黒灰色土が入り、中層部は地山土に茶色土塊などを含む粘土で、意図的な埋め土と見られる。最下層部は軟質粘土で自然堆積と思われ、再掘削後か使用終了後に廃棄され埋められたか。遺構の時期を示す遺物は少なく、図示できるものがない。

13 号土坑（図版 23、第 21 図）

調査区東南隅、4 号土坑の南に位置し 4 号土坑に切られる。直径 190cm 以上のほぼ円形を呈する土坑で、深さは 130cm、底面もほぼ円形を呈する。埋土は上層部は黒灰色土と地山粘土の混じったやや汚い土がブロック状に入り、下層部はグライ化した地山粘土に黒色土のブロックが混入する軟質粘土の自然堆積と思われる。上層部と下層部の間に一部炭の混入が認められた。

出土遺物（図版 29、第 25 図 1 ～ 3）

1 は瓦質の片口鉢口縁部小片で、全て横ナデ調整。2 は糸切り底の土師器杯で底部はやや小さく体部は直線的に大きく開くが、端部付近を若干外反させる。3 は龍泉窯系の青磁碗口縁部から体部片で、体部は直線的に立ち上がる。外面には片彫りによる鎬蓮弁が表現される。胎土は灰色で釉は暗緑灰色に発色する。

14 号土坑（図版 23、第 24 図）

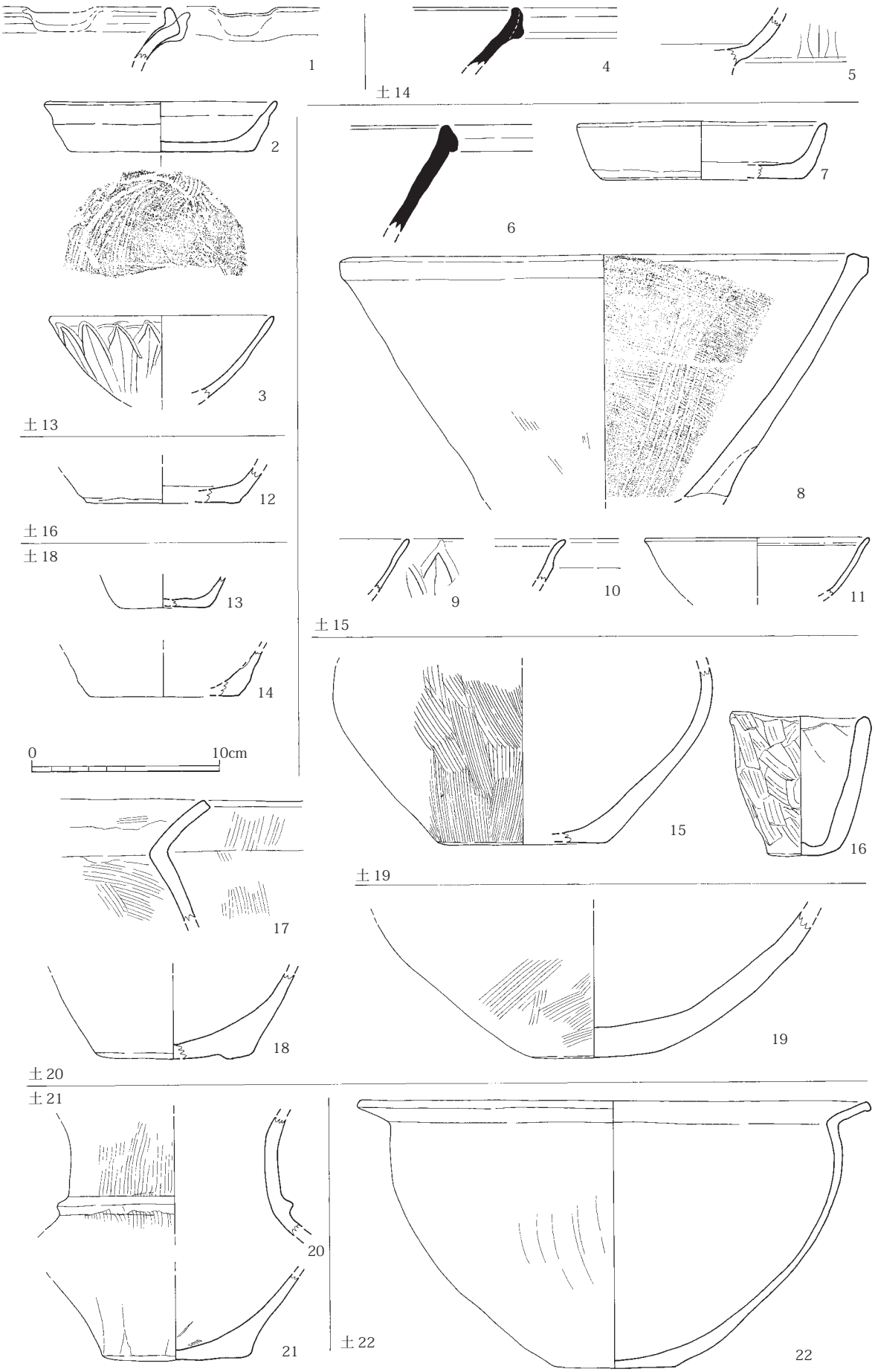
調査区中央よりやや南に位置し、7 号土坑に切られる。長軸 250cm 以上、短軸 140cm 前後の隅丸長方形を呈する土坑で、深さは 65cm と浅い。壁の立ち上がりは緩やかで、断面形状は碗型を呈する。最上層部には地山粘土と黒色土､灰色粘土のブロックが混在した斑の埋土があり、意図的な埋め土と思われる。下層部は地山粘土に黒色土などの小ブロックが混入した明るい埋土で、廃棄時に埋められたものか。11 号土坑と埋土が似る。平面形状は 4･5 号土坑と近似し、最上層の埋土は同様であるが下層以下の堆積状況や断面形状に違いがあり、使用および廃棄時期に若干ずれがあると思われる。17 号土坑とは近似した主軸をなす。

出土遺物（第 25 図 4・5）

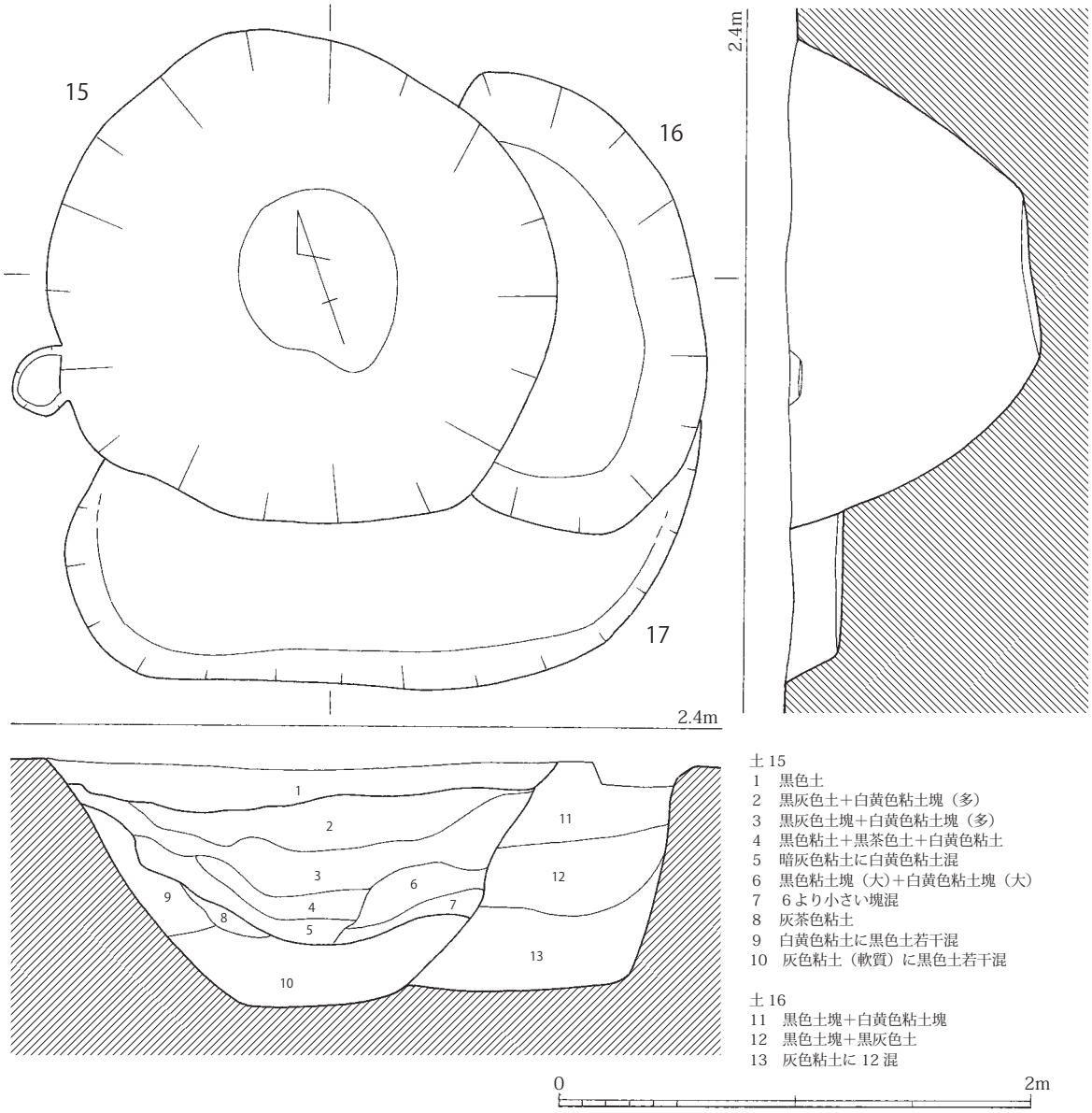
4 は東播系須恵器の鉢口縁部小片で、口唇部内面に強い稜をもち、外面には自然釉が被る。5 は龍泉窯系の青磁碗小片で、外面に稜線の甘い鎬蓮弁を描く。貫入が多い。

15 号土坑（図版 24、第 26 図）

調査区中央に位置し、16・17 号土坑を切る。直径 210cm 前後の大型土坑で、底面も円形を呈する。深さは 80cm と他の円形大型土坑に比べて浅い。底面は平坦で壁は椀状に緩やかに立



第 25 図　13 ～ 16・18 ～ 22 号土坑出土土器・陶磁器実測図（1/3）



第 26 図　15 ～ 17 号土坑実測図（1/30）

ち上がる。埋土は上層部は黒灰色土が水平に入り、中層部は黒色土などの暗い土と地山粘土がブロック状に混在する汚い土がほぼ水平堆積する。下層部は軟質粘土が厚く堆積し、使用時の自然堆積と思われる。

出土遺物（図版 28、第 25 図 6 ～ 11）

6 は須恵器の鉢口縁部片。7 は糸切り底の土師器杯で、器壁が厚く体部はやや内湾する。8 は瓦質のすり鉢で、内面は横ハケで調整した後に櫛描き条痕を 2.2cm 幅中に 5 本配する。外面下位にもハケ目が残る。9 ～ 11 は磁器。9 は体部が開く青磁碗の口縁部片で、外面には片彫りの鎬蓮弁を描く。器壁は薄いが胎土はやや粗く、淡青色の釉は厚くかけられる。10 は白磁皿の口縁部小片で、口唇部下の強いナデにより端部が強く外反する。胎土は白色で、釉は淡灰色に発色する。11 は口禿の白磁碗で、体部は緩やかな丸みをもつ。器壁は薄く、釉は厚く透明感がある。

16 号土坑（図版 24、第 26 図）

調査区中央に位置し、15 号土坑に切られ、17 号土坑を切る。長軸 200cm 前後、短軸 100cm 以上の楕円形土坑で、本調査区の中では他にない形状である。深さは 95cm 前後で、底面も楕円形で平坦である。埋土は分層が困難なほどの近似した土であり、厚い層がほぼ水平堆積するため意図的な埋め土と思われる。残存状況が悪く、出土遺物も少量である。

出土遺物（図版 25、第 25 図 12）

糸切り底の土師器杯底部片で、底部径はやや小さく、体部はやや丸味をもつと思われる。

17 号土坑（図版 24、第 26 図）

調査区中央に位置し、15 号・16 号土坑に切られる。長軸 260cm 前後、短軸 120cm 以上の楕円形土坑で、20cm ほどしか残存しない。14 号土坑とは近似した主軸をなす。出土遺物は少量で図示できるものがない。

18 号土坑（図版 24、第 27 図）

調査区北側に位置し、半分は調査区外に広がる。直径 210cm 前後の円形土坑と思われ、断面形状は碗型を呈し、下層部のみやや狭くなる。埋土は上層部は黒色土等の暗い土がほぼ水平堆積し、中層部は地山粘土と茶色粘土の混じる土が厚く堆積し、意図的な埋め土と思われる。下層部は自然堆積と思われる軟質粘土が堆積する。

出土遺物（第 25 図 13・14）

いずれも糸切り底の土師器で 13 は小皿、14 は杯の破片。

19 号土坑（図版 25、第 27 図）

調査区北側、旧クリークの北に位置する。長軸 85cm、短軸 70cm 弱の楕円形土坑であるが、上面形状はやや乱れる。深さは 35cm と浅く、壁は直線的に立ち上がり、底面は平坦になる。埋土は軟質の茶色土の単層である。

出土遺物（図版 29、第 25 図 15・16）

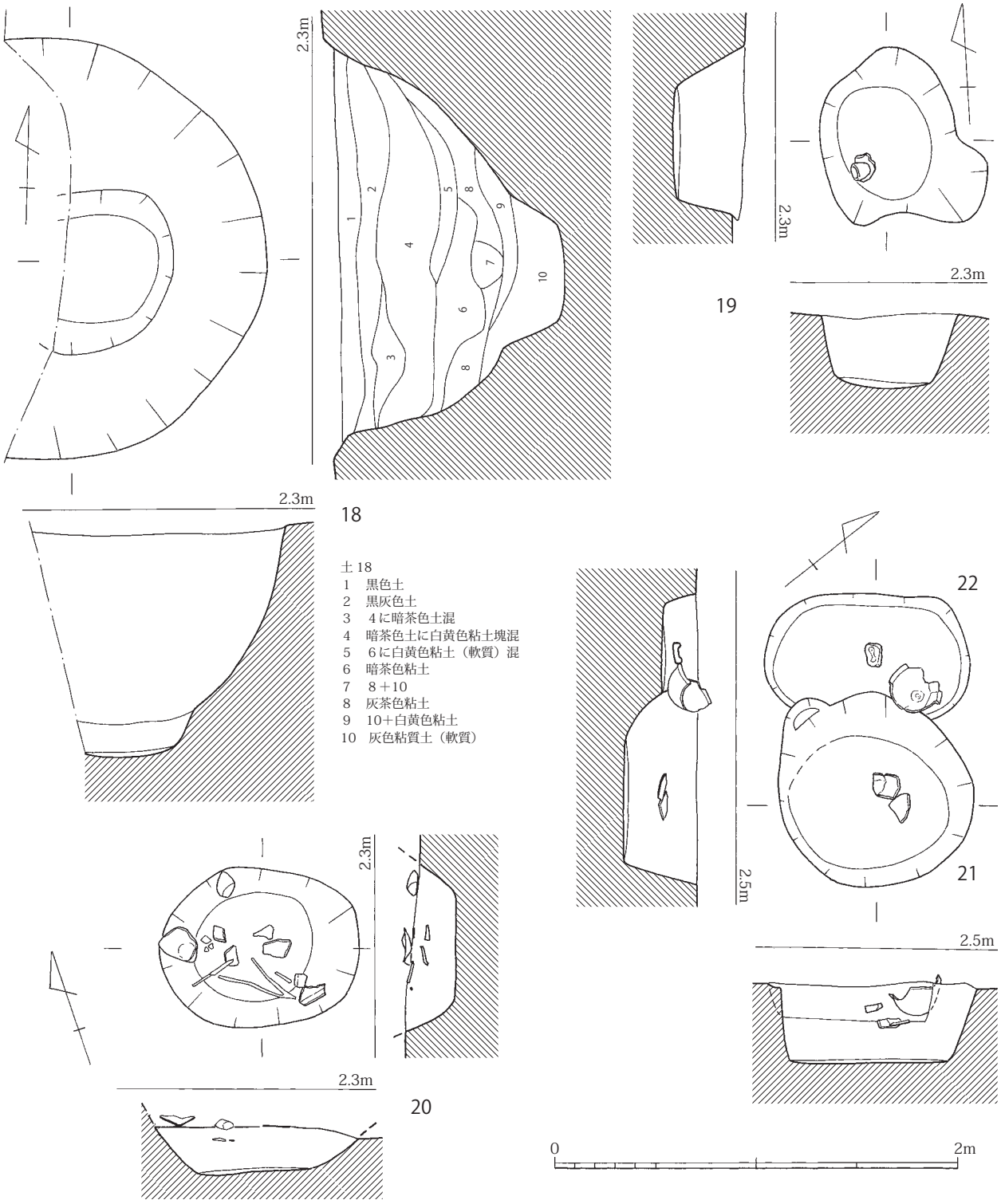
15 は土師器壷体部下位で、外面は縦ハケ調整、内面はナデ調整、外底部は未調整である。16 は手捏ねの鉢で、外面は工具により抉るようなケズリで調整するため凹凸があり木目が残る。内面は剥離が激しいがナデ調整と思われる。

20 号土坑（第 27 図）

調査区北側、旧クリークの南に位置する。長軸 100cm 前後、短軸 80cm 前後の楕円形土坑であるが、埋土が地山に似る白灰色粘土のため上層を掘りすぎている。深さは 20cm 前後残存しており、底面は平坦で壁は碗状に緩やかに立ち上がる。上層に土器片と自然木が包含されていたが、下層からは遺物は出土していない。

出土遺物（第 25 図 17 ～ 19）

17 は甕口縁部小片で、外面は縦ハケ、内面は横ハケで調整する。18 は底部片で内外面ともにナデ調整、底部は内面が粗いナデ、外面は未調整である。19 は体部下位から底部で、磨滅が激しいが内外面共にハケメが認められる。



第 27 図　18 ～ 22 号土坑実測図（1/30）

21 号土坑（図版 25、第 27 図）

調査区中央、23･24 号土坑の西側に位置し、22 号土坑を切る。直径 95cm 前後の円形土坑で、西側に小さなテラスを有する。深さは 40cm 前後、底面は平坦で壁は直線的に急峻に立ち上がる。埋土は上層が暗灰色土、下層は灰色粘土である。

出土遺物（第 25 図第 25 図 20・21）

20 は壷頸部小片で、屈曲部に断面三角の凸帯を貼付し、外面は縦ハケ、内面はナデ調整する。21 は底部片で、内外面ともに工具によりナデ調整する。

22 号土坑（図版 25、第 27 図）

調査区中央、23・24 号土坑の西側に位置し、21 号土坑に切られる。長軸 105cm、短軸 60cm 以上の楕円形土坑で、深さは 20cm 以下と残りが悪い。底面は平坦で壁は急峻に立ち上がる。上層からスサ入りの焼土小塊が多数出土した。

出土遺物（図版 29、第 25 図 22）

22 は土師器の鉢で、口縁部が強く外反する。器壁は薄く、外面は工具によるナデ調整、内面は摩滅が激しいがナデ調整と思われる。外面口縁部から体部下位にかけて煤が付着する。

23 号土坑（図版 26、第 28 図）

調査区中央、21・22 号土坑の東 24 号土坑を切る。直径 75cm 前後の円形土坑で、深さは 115cm、壁の立ち上がりは直線的で、底面は中央がやや深くなる。埋土は大きく 3 つに別れ、上層部は黒色土・黒灰色土・地山粘土の暗い色の混在層で後世の埋め土と思われ、中層は地山粘土を中心とした明るい埋土が中心となり、廃棄時の埋め土と思われる。下層部はグライ化した軟質粘土層で、使用時の自然堆積か。出土資料は少なく、図化できるものがないが、焼土塊が出土している。

24 号土坑（図版 26、第 28 図）

調査区中央、21・22 号土坑の東で 23 号土坑に切られる。直径 70 ～ 75cm の不正円形土坑で、深さは 100cm 弱、壁は底面に向かって袋状に広がり底面は平らになる。埋土は上層が黒色土・黒灰色土中心層となり、中層は軟質の黒色土層となる。調査途中に崩落したため土層は残せなかったが、下層部は 23 号土坑と同様のグライ化した軟質粘土である。

出土遺物（第 29 図 1）

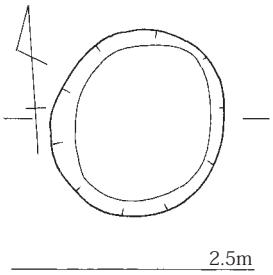
1 は青磁碗の口縁部で体部がやや直立する碗と思われる。外面に片彫りの蓮弁を表現するが、釉が厚く施されるため明瞭でない。胎土はやや粗悪で釉は淡青緑色に発色する。

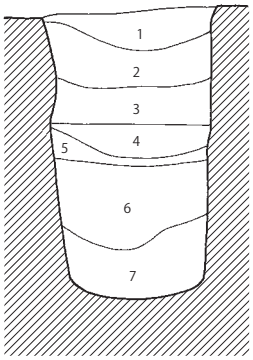
25 号土坑（図版 26、第 28 図）

調査区中央西側、1 号ピットの北側に位置する。長軸 80cm 前後、短軸 70cm 前後の上面隅丸方形の土坑である。下部は北半部に不整形のテラスを持ち、最下部は中央が小土坑状に掘削される。上層部は黒色土と黒灰色土が入り、中層部は軟質の黒色土を中心とした炭交じりの互層となる。下層部は軟質の灰色粘土、小土坑内はグライ化した粘土が堆積するが、調査中に崩落したため図化できなかった。上層部は後世の埋め土、中層部は使用後の意図的な埋め土、下層部は使用時の自然堆積と思われる。

26 号土坑（図版 26、第 28 図）

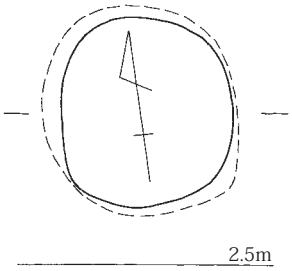
調査区西南部、5 号土坑の北側に位置する。上面は長軸 150cm 前後、短軸 130cm 前後の楕円形、

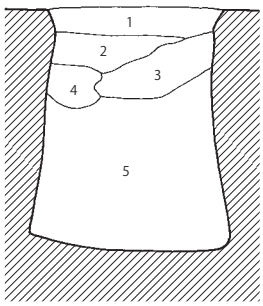




23

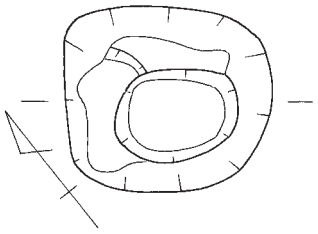
土 23
1　黒色土
2　黒灰色土に白黄色粘土塊（大）混
3　２より塊小さく少ない
4　白黄色粘土に黒色土混
5　白茶色粘土
6　白黄色粘土に黒色土若干混
7　暗灰色粘質土

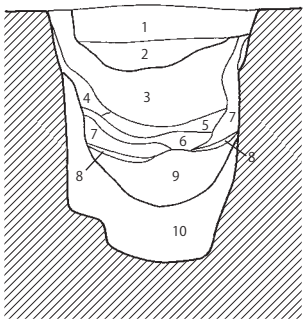




24

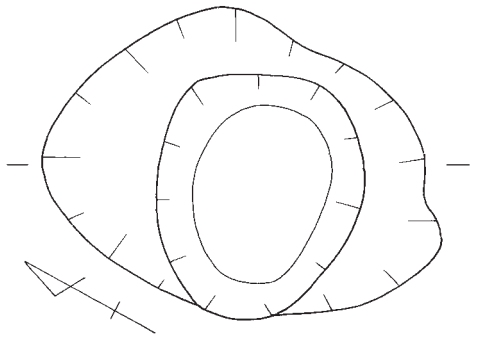
土 24
1　黒色土
2　黒灰色土に白黄色粘土塊混
3　２より白黄色粘土多
4　白黄色粘土に黒色土塊混
5　黒色土・青灰色粘土

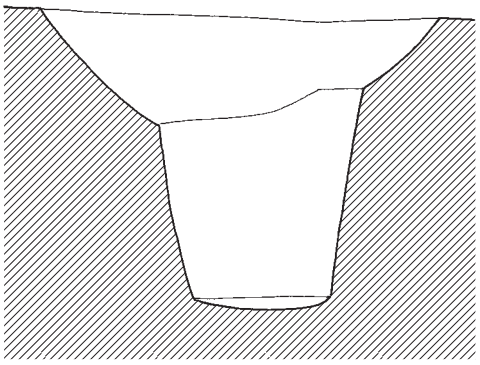




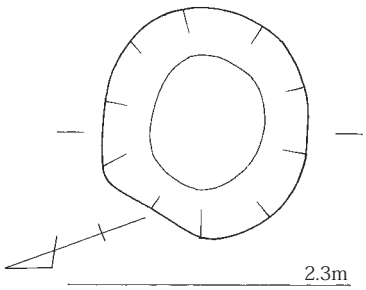
25

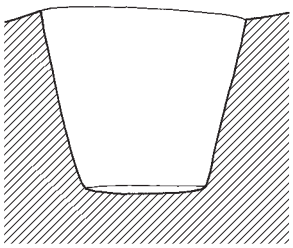
土 25
1　黒色土
2　黒灰色土
3　炭粒混黒色土（白黄色粘土塊混）
4　灰黄色粘質土
5　３より軟質
6　黒色粘土
7　暗茶色粘土
8　黒灰色粘土
9　灰色粘土
10　青灰色粘土





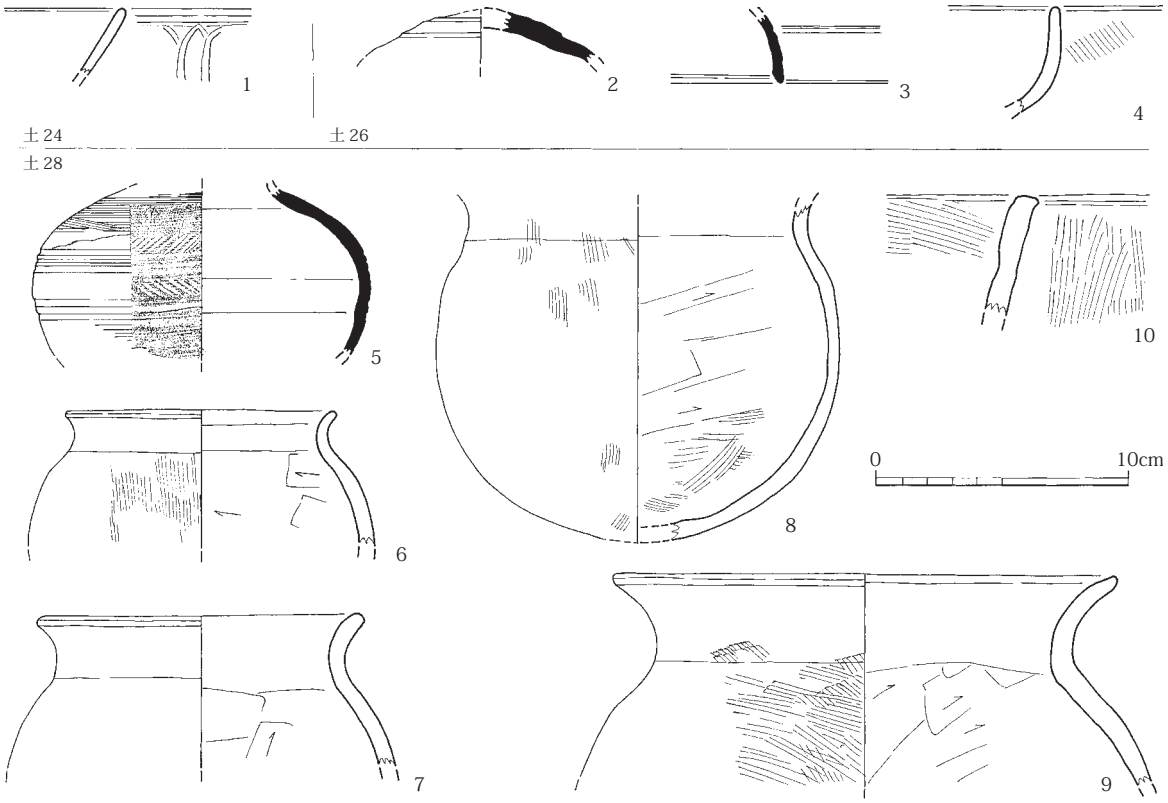
26





27

第 28 図　23 ～ 27 号土坑実測図（1/30）



第29図　24・26・28号土坑出土土器実測図（1/3）

下位は長軸90cm、短軸80cm前後の円形になる土坑で、深さは120cm前後である。上位の壁面は碗型に大きく広がるが、地表下30～40cmに段を有して以下が円形土坑となり、壁の立ち上がりは急峻である。土層は崩落したために図を残せなかったが、上層に黒色土と黒灰色土が入り、中層は軟質の黒色土、下層は軟質の灰色粘土を中心とした埋土であった。上位は崩落時した状況でもなく、再掘削されたものであろうか。

出土遺物（第29図2～4）

2・3は須恵器杯蓋である。2は天井部のみをケズリ、3はすべて回転ナデで沈線を有する。4は土師器杯口縁部で外面の一部に工具の痕跡が認められる。

27号土坑（図版27、第28図）

調査区北端に位置する。直径80cm前後の円形土坑で、深さ70cmを測る。底面は平坦で壁は直線的に斜めに立ち上がる。軟弱地盤で崩落の危険があったため土層を残さずに掘削したが、埋土は黒色土が中心で最下層はグライ化した軟質粘土である。出土遺物はほとんどなく、図化できるものがない。

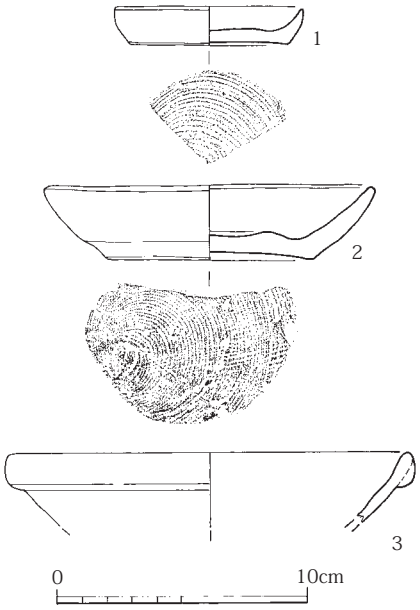
28号土坑（図版27）

調査区西側の遺構が少ない場所で検出した小規模な土坑である。直径40cm弱、深さ110cmで埋土は灰色粘土である。

出土遺物（図版 32、第 29 図 5 ～ 10、第 34 図 2）

第 29 図 5 は須恵器壷もしくは瑳の破片である。体部中位に上下 2 段の刺突文を施し、その間に沈線を数条施す。下位はカキ目による調整、中位以下に自然釉がかかる。6 ～ 9 は土師器甕。6・7 は口縁部から体部中位の破片で、6 は外面を細かい縦ハケ調整、内面は横ケズリで調整する。7 の外面は摩滅のため調整不明、内面は横ケズリする。8 は外面は縦ハケ調整、内面は横ケズリでその後底部付近を工具等でナデ調整する。口縁部の屈曲は緩やかである。9 は頸部は緩やかに屈曲してやや強く外反する。外面は横ハケ調整、内面は口縁部付近は横ナデ、体部は横ケズリで調整する。10 は甑口縁部で、外面を横ハケ、内面を縦ハケ調整する。

第 34 図 2 は白色凝灰岩の砥石で、7 面残存し 6 面を砥面として使用する。4 面は使用が顕著で平滑である。図面下位の 2 面は割れ面部分において鋭利な刃部を研ぎ出した痕跡が明確に残る。



第30図　黒色土包含層出土土器・陶磁器実測図（1/3）

(3)　包含層

調査区全体を覆う黒色土の包含層で、遺構の最上層にも多々認められた。弥生土器を始め多岐にわたる時代の遺物が混入するが、該当する時期と考えられるものを図示する。

出土遺物（図版 29、第 30 図）

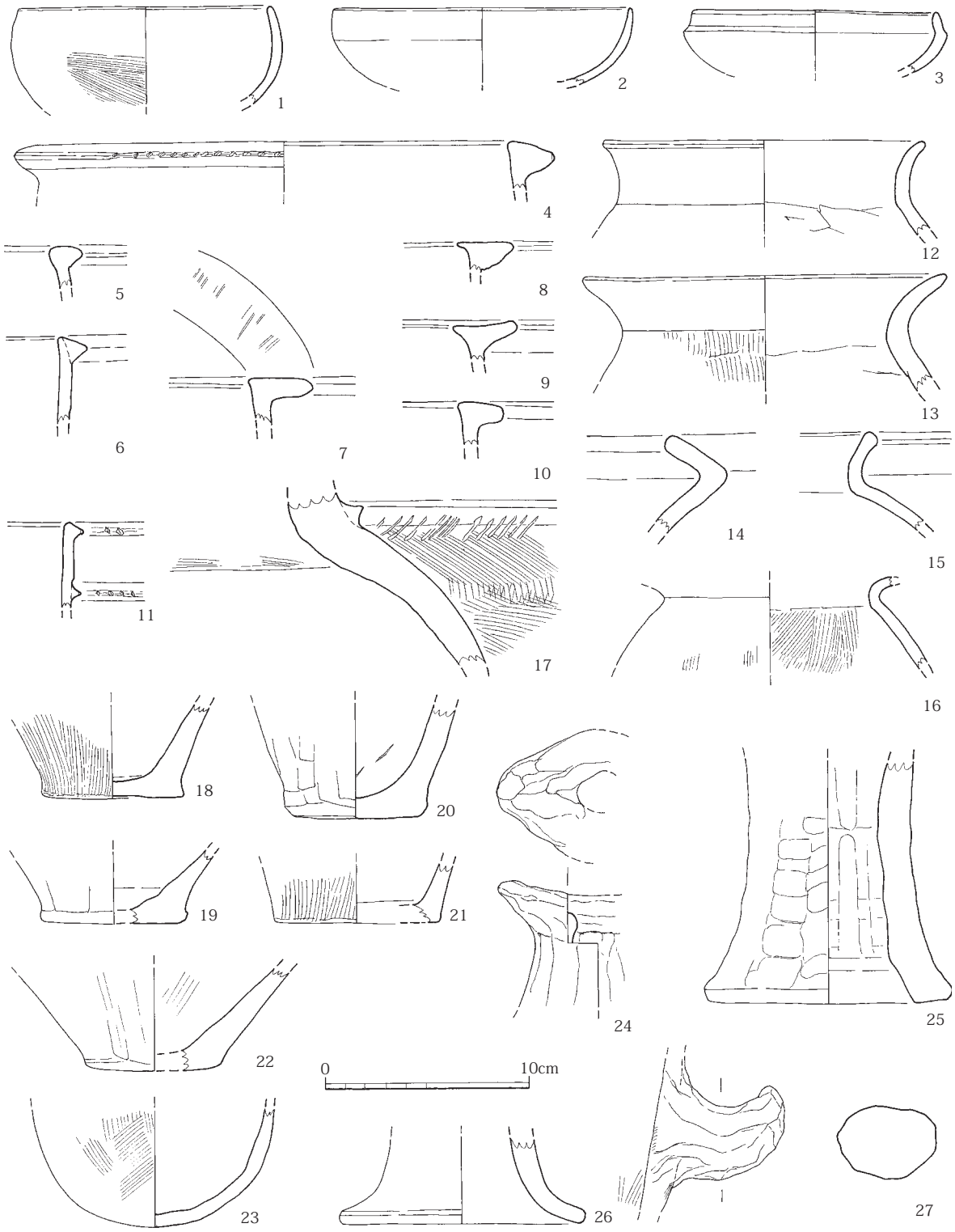
1 は糸切り底の土師器小皿で底部の器壁が厚く法量は小さい。2 は糸切り底の土師器杯で底部径が小さく体部は直線的に大きく開く。外底部に板状圧痕が認められる。3 は白磁碗口縁部で、表面には気泡が多く全体に作りが粗雑である。釉はやや厚く、灰色味を帯びる。

(4) その他の出土遺物

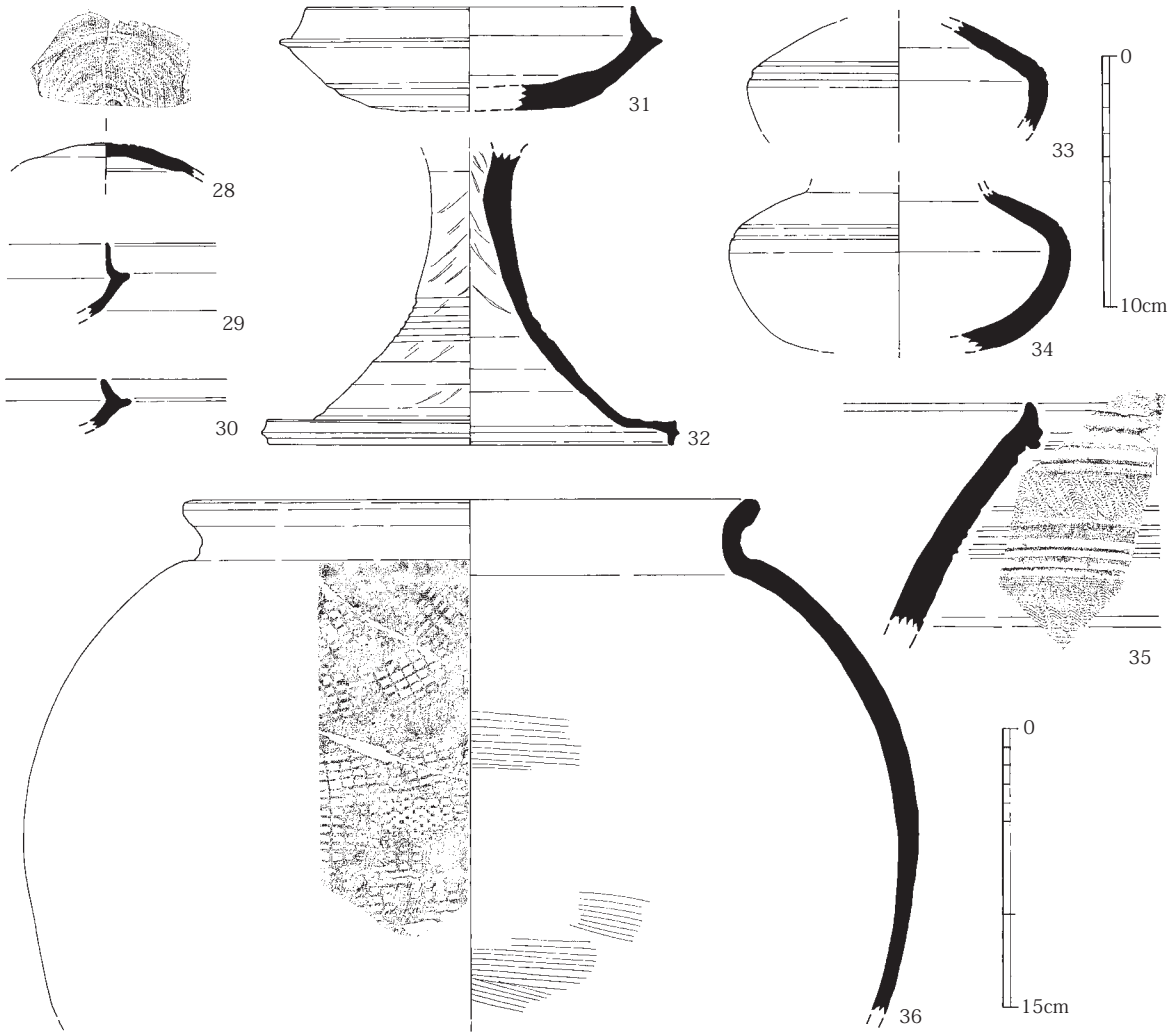
今回、遺構および表土、包含層から多数の遺物が出土したが、そのほとんどが混入と考えられるものであった。このため、遺構の時期には伴わない土器をここで別途掲載する。

出土遺物（図版 29 ～ 31、第 31 ～ 33 図、第 34 図 7）

1 ～ 3 は土師器の杯である。1・2 は埦型杯で、外面の一部に横ハケが認められる。2 は黒塗りの可能性がある。3 は模倣杯であるが、摩滅が激しく調整不明。4 ～ 11 は弥生土器の甕口縁部小片。7 の口縁上端部には放射状の暗文が認められる。4 は口縁端部にキザミを施し、11 は口唇部と口縁部下位に断面三角の凸帯を貼付してキザミを施す。12・13 は土師器の甕で頸部が緩やかに屈曲して外反し、頸部内面にはケズリによる稜がつく。外面は 12 が横ナデ、13 が縦ハケ、内面はいずれも横ケズリする。14 ～ 17 は壷と思われる。14 は袋状口縁壷口縁部小片でで、くの字に強く屈曲する。15 は口縁が短く口唇部を玉縁状に肥厚させる。16 は頸部から口縁部が大きく屈曲して開くもので、内面に縦ハケが認められる。17 は大型壷の頸部から体部上位で、頸部に断面三角の凸帯を貼付し、その下に斜位の刻み目を施す。外面は斜位お



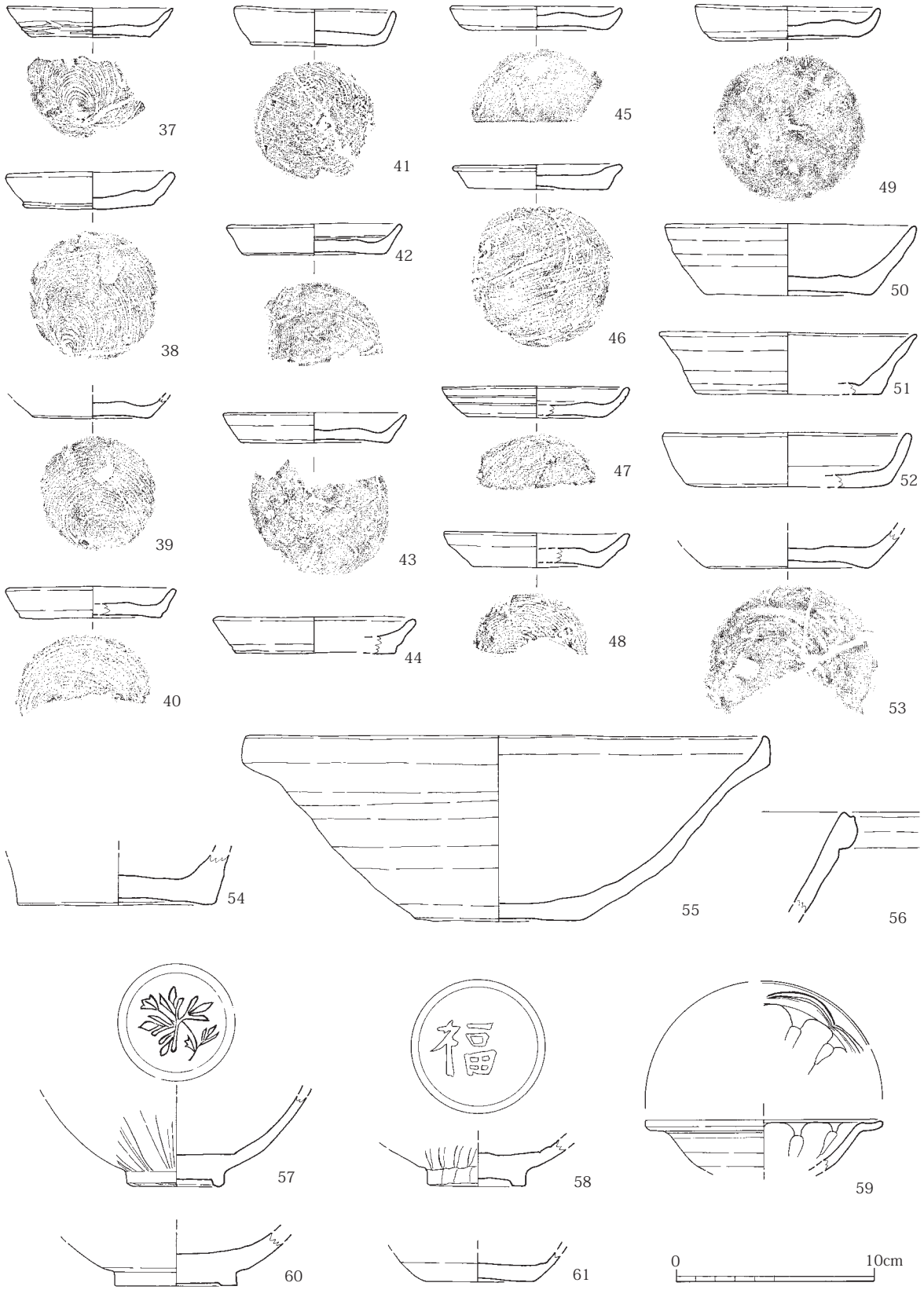
第 31 図　その他の出土遺物実測図（1）（1/3）



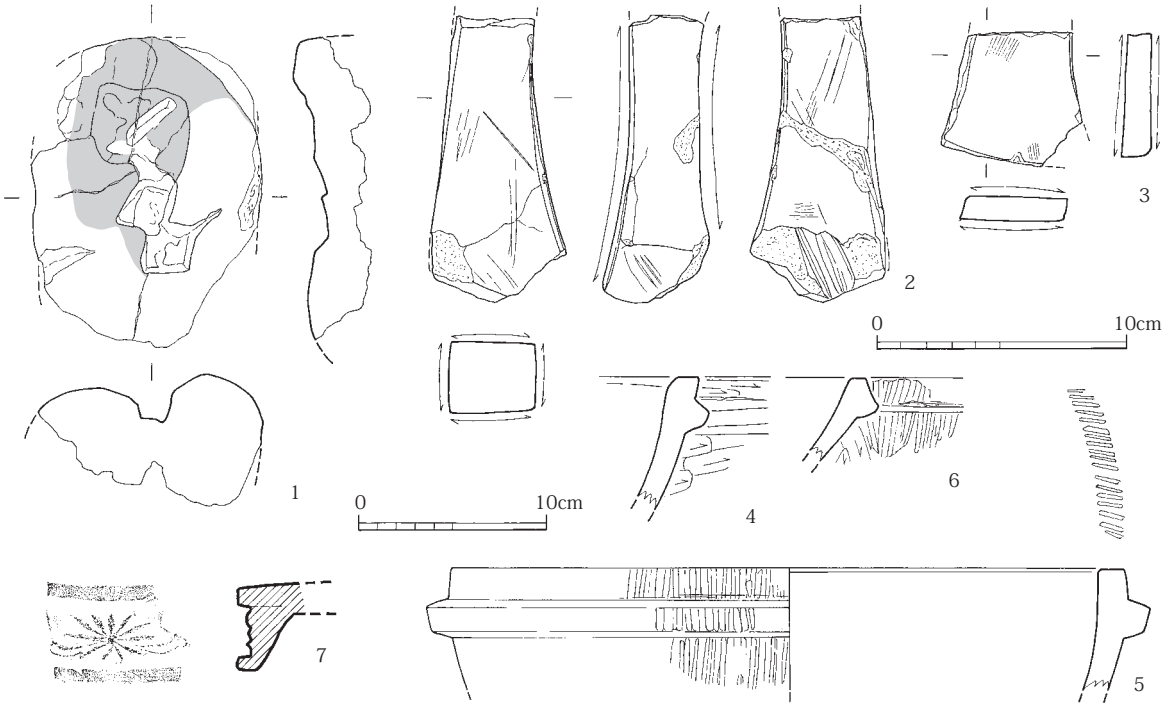
第 32 図　その他の出土遺物実測図（2）（36 は 1/4、他は 1/3）

よび横位のハケ目調整、内面は器壁が剥離するが頸部に横ハケがわずかに残る。18 ～ 22 は底部片である。すべてほぼ平底で、18・21 は外面が縦ハケ、内面がナデ調整、19 は前面ナデ調整。20 は壷底部と思われるが断定はできない。内外面ともに工具によるナデで、外面底部付近のみケズリで調整する。22 は内外面ともにハケ目が認められる。23 は壷の底部片で外面はハケ調整、内面は摩滅のため調整不明。24 は支脚の受け部片で、斜めに傾斜し中央に穿孔する。全面ケズリによって整形する。25 は支脚の下位で、外面は叩き後ナデ調整、内面は縦ナデ調整する。26 は脚部小片で、摩滅が激しく調整不明。27 は取手で全面ナデによる整形、本体は全面ハケ調整と思われ、取手取り付け部内面のみ縦ケズリする。先端には黒斑が認められる。

28 ～ 36 は須恵器。28 は杯蓋の天井部片で前面回転ナデ調整、外面に「ℓ」のヘラ記号がある。29 ～ 31 は杯身片で 29･31 は外底部に回転ヘラケズリが認められる。33･34 は瑳の体部片。いずれも中位のやや上方に 2 条の沈線を巡らせる。外面中位以下は回転ヘラケズリ後部分的にナデ調整、その他は横ナデ調整する。35 は大型の壷口縁部片。口唇部は内面の強いナデによって摘み上げるように作る。口唇部のやや下に断面m字の凸帯を巡らせ、口唇部から頸部付近まで波状文帯と凸線文帯を交互に配する。36 は胴部が球状に張る丸底の広口甕で、口縁は頸



第 33 図　その他の出土遺物実測図（3）（1/3）



第 34 図　出土土製品・石製品・瓦実測図（1 ～ 3 は 1/3、4 ～ 7 は 1/4）

部から強く外反して短く立ち上がり、端部は肥厚する。外面は長方形の格子叩きで調整され一部粗いナデを施し、口縁部から頸部は横ナデ調整する。内面にはカキメ状の工具痕が認められる。

37 ～ 49 は糸切り底の土師器小皿で、形状・法量ともに様々であり時期差が認められる。37 は造りが粗く体に被熱して赤橙色を呈するが、特に外面から外底部の一部に火襷上に赤変する。外面下位には叩き状の工具痕がある。38 は外底部に板状圧痕とは異なる平行した凹線が 2.5 ～ 3.0 ㎝間隔で 3 条認められ、何らかの器具のあたりと思われる。41・43・46 の外底部には板状圧痕が認められる。43 は全体が歪み、外底部には黒斑が認められ、中央に走るヒビは焼成時に入ったものと思われる。46 は全体に大きく歪み、糸切りも調整もすべてが粗い。内底部には油煙が付着し、灯明皿に使用されたと思われる。42 は内面に、47 は外面に沈線が認められる。50 はヘラ切りの土師器杯で、外面は回転ナデ時の凹凸が激しい。51 ～ 53 は糸切り底の土師器杯で、これらも時期差がある。51 は内面は細かい剥離が激しく、巧打によって意図的に剥がされた様に見える。外底部の糸切りは粗く、全体に被熱したように淡橙色を呈し硬質である。52 は外底部に板状圧痕が認められる。54 の外面は一部底部にいたるまで被熱して赤変する。54 は火消し･火置き等の底部と思われ、外面は被熱により赤変し、内面も白色化する。55 は瓦質の鉢で、口縁断面は三角形を呈する。内外面ともに粗い横ナデで、底部外面は糸切りのまま未調整である。口縁部は断面三角でやや外反し、口縁部から体部上位の一部は被熱により黒変する。56 は土師質の鉢で口縁部を玉縁状に作り、外面には煤が付着する。

57 ～ 60 は青磁である。57 は青磁碗の底部で、外面は蓮弁文が表現され、底部見込みには印刻の草花文が描かれる。高台は内部の刳りはやや浅く内外面ともに面取りする。釉は緑灰色でやや厚く、高台畳付は施釉が粗いため露胎部分が多い。底部外面はほぼ露胎で、一部釉が付着する。58 は体部が丸みをもつ碗の底部で、見込みに「福」字とこれを巡る圏線を印刻し、体

部外面は片彫りによる蓮弁文を一巡させる。高台は断面方形で、釉は全体に厚く施されるため内外面ともに文様が明確でない。釉はやや灰色味を帯びて鈍く発色し、畳付き付近は茶色になる。59 は浅形杯で底部を欠損する。口縁部は水平に屈曲し平坦とする。外面は無文、外面には縦位にケズリを入れて花弁文を表現する。また口縁平坦部には墨様の黒色塗料により円弧が描かれる。60 は碗の底部で、径から大型品と思われる。残存部に文様はなく、淡緑灰色の釉が薄く施釉される。高台内部の刳りは浅くまた粗雑なため、畳付きの幅が均一になっていない。畳付は粗く施釉され、内部にも釉がかかるがほとんどが露胎である。61 は白磁の底部片で、底部外面は 1 ／ 4 に施釉するが残りは施釉後に掻き取る。釉はやや緑味を帯びた白色である。

第 34 図 7 は軒平瓦の瓦当中央部片で、中心飾りに菊花文が使用される。凹面および顎部は木製工具で横ナデ調整し、顎は段顎で緩やかなカーブを有する。胎土は精良で、外面は黒色、断面は淡灰色を呈する。

（6）焼土塊

1 号掘立柱建物跡で出土した第 33 図 1 のような土壁か炉壁の残骸のようにも見える焼土塊が多数出土している。いずれも小塊で形状は様々で第 33 図 1 ほど明確な形は持たず、スサが多量に入っていたような痕跡があり、被熱して硬化および赤変している。遺構内で出土したのは 1・2・3・9・10・13・14・15・17・18・21・23・30 号土坑および包含層や表土からも出土している。

4　小結

今回の発掘調査では掘立柱建物 1 棟、土坑 28 基、ピット、包含層および旧クリーク 2 条を検出した。このうち旧クリークについては掘削はほとんど行っていないため言及しない。

掘立柱建物は、「礎盤」工法を採用するもので、この工法は柳川市・大川市など福岡県筑後地域に認められるほか、筑後川を挟んで隣接する佐賀平野でも多数調査されている。軟弱な有明粘土上に立地する有明海沿岸地域の集落に特徴的に取り入れられた工法と思われ、後世の敷き粗朶工法にも通じるところがある。本調査区では僅かに 1 棟分の柱掘方底部のみの検出であったが、後世の削平により消滅したとも考えられる。しかし前述したように本調査区は南西に

第２表　西蒲池池田遺跡　遺構番号対照表

遺構番号	取り上げ番号	遺構番号	取り上げ番号	遺構番号	取り上げ番号	遺構番号	取り上げ番号
建物 1	S-28	土坑6	S-14	土坑15	S-20	土坑24	S-18
建物 1	S-29	土坑7	S-7	土坑16	S-21	土坑25	S-23
建物 1	S-33	土坑8	S-8	土坑17	S-27	土坑26	S-6
建物 1	S-34	土坑9	S-9	土坑18	S-24	土坑27	S-31
土坑1	S-1	土坑10	S-10	土坑19	S-30	土坑28	S-15
土坑2	S-2	土坑11	S-11	土坑20	S-32	ピット1	S-22
土坑3	S-3	土坑12	S-12	土坑21	S-19	旧クリーク	S-26
土坑4	S-4	土坑13	S-13	土坑22	S-25		
土坑5	S-5	土坑14	S-16	土坑23	S-17		

位置する安定地盤の地域から標高が下がり、地盤が軟弱化してゆく場所にあたる。軟弱な地盤では礎盤工法を用いても建物が沈下するため、実質建物の建設が困難であり、建物自体が少なかったことが考えられる。本調査区より南西部で柳川市が行った調査では、遺構面の削平状況は本調査区と同様であったにも拘わらず、複数棟の掘立柱建物が確認されていることも含め、やはり集落の中心部は調査区より南西部の安定地盤上にあり、本調査区がその縁辺部であったと想定される。しかし今回の調査では検討材料が少なく、また本調査区の南接する西蒲池池淵遺跡ではより多くの掘立柱建物が検出されていることから､その報告時に再度検討を重ねたい。

土坑はその規模と形状、埋土の状況から大きく 3 時期に分けられる。まず 19･20･21･22 号土坑は直径 100cm 以下の円形を呈し、埋土は灰色軟質粘土が中心で残存深は 20cm 前後と浅い。出土する遺物は弥生時代後期のもので、前述の掘立柱建物の同時期性が考えられる。

次に 23・24・26 号土坑は直径 100cm 以下の円形もしくは不正円形で、残存深は 100cm を超える深い土坑である。12･27 号土坑も形状はわずかに異なるものの前出 3 基と埋土の状況が酷似し、出土遺物からもほぼ同時期と捉えられる。なお 23･24 号土坑は切り合いがあるが前後は微妙なものであったこと、形状が近似することから同じ機能を持つと考え、切りあいは時間差と捉えたい。これらは出土遺物から 6 世紀後半代と考えるが、これに伴う居住空間は確認できず、その機能についても井戸か深い土坑か断定は困難である。

その他の土坑はすべて中世のものであるが､その形状や埋土から埋没時期に相違が認められ、以下のように 3 段階に分けられる。

１段階：4･5･8･11･14･17 号土坑

平面隅丸長方形で底面は平坦、深さは浅く黒色土・地盤土他の小塊が斑に混じった埋土あり、全体的に不自然に水平堆積する。中には埋土に薄い炭層があるものもある。

２段階：3･6･16 号土坑

平面円形で底面は平坦または擂り鉢状、埋土は 1 段階の土坑と似るが 16 号と 17 号の切り合いから 1 段階より後と考える。

３段階：1･2･7･10･15･18 号土坑

平面円形または楕円形で直径 200 ㎝を超えるものが多い。埋土には上層に黒色土と黒灰色土が入り、中層は一括で埋められたように近似した種類の土が数回に分けて入る。

このうち 1 段階と 2･3 段階の土坑は、形状・堆積の状況が異なることから機能の違いが考えられる。またの 7・8 号土坑、10・11 号土坑に見られるように 1 段階の土坑と 3 段階の土坑は切り合いが多く見られ、1 段階土坑の機能終了後に形状の異なる土坑をほぼ同じ位置に掘削している。ただ、2･3 段階の土坑も切り合うこと、4 号・13 号土坑では 1 段階と 3 段階の切り合いが逆転していることから、これらの前後関係は完全ではない。かつ、出土遺物の状況、各段階の埋土にも若干の共通性が見られることなどから、比較的短期間に掘削・使用・廃絶・再掘削されたと考える。その廃絶時期については各遺構の出土遺物に幅が見られるものの 13 世紀～ 14 世紀が中心と想定され、3 段階の 7 号土坑出土の青磁碗が最終段階の埋没時期として 15 世紀が下限と考える。

西蒲池池淵遺跡においても同様の土坑が複数存在し、切り合い関係は同様ではあるが埋土に違いがほとんどないものもある。本調査区では上記の時間経過が認められるが、西蒲池池淵遺跡他、周辺遺跡の状況と合わせて再度検討の必要がある。

西蒲池池田遺跡図版

1　西蒲池池田遺跡遠景
（南上空から）

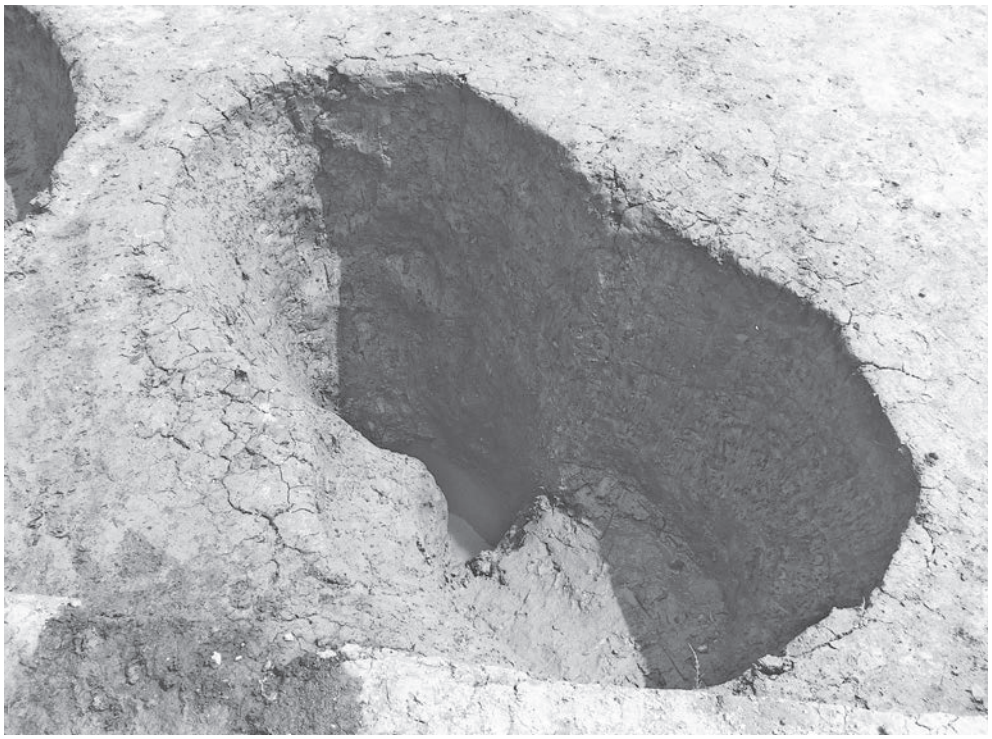
2　西蒲池池田遺跡全景
（上が北）

1　1 号掘立柱建物全景
（東から）

2　1 号掘立柱建物
北東隅柱穴礎盤（北から）

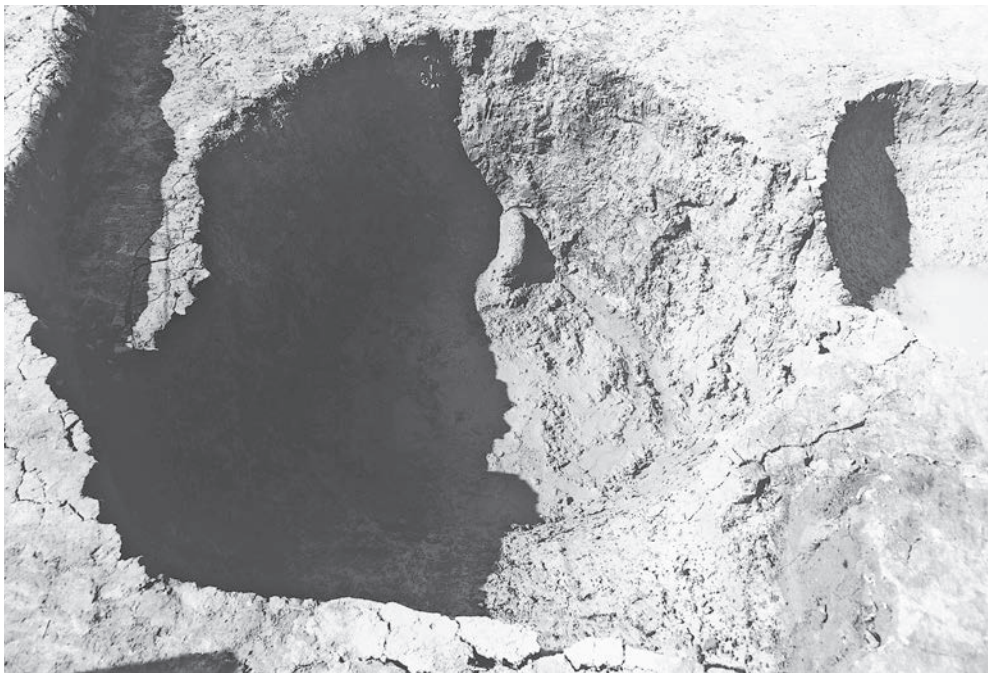
3　1 号掘立柱建物
南東隅柱穴礎盤（北から）

1　1 号掘立柱建物
北西隅柱穴礎盤（南から）



2　1・6 号土坑（南から）

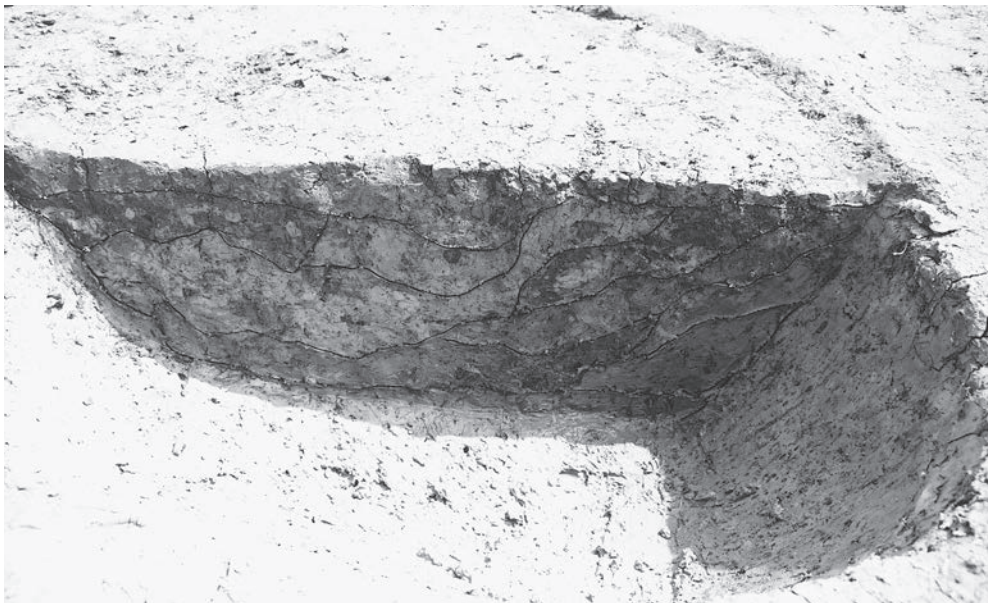
3　2 号土坑土層（南から）



1　2 号土坑（南から）

2　3 号土坑（北から）

3　4 号土坑（南東から）



1　5 号土坑土層（南から）

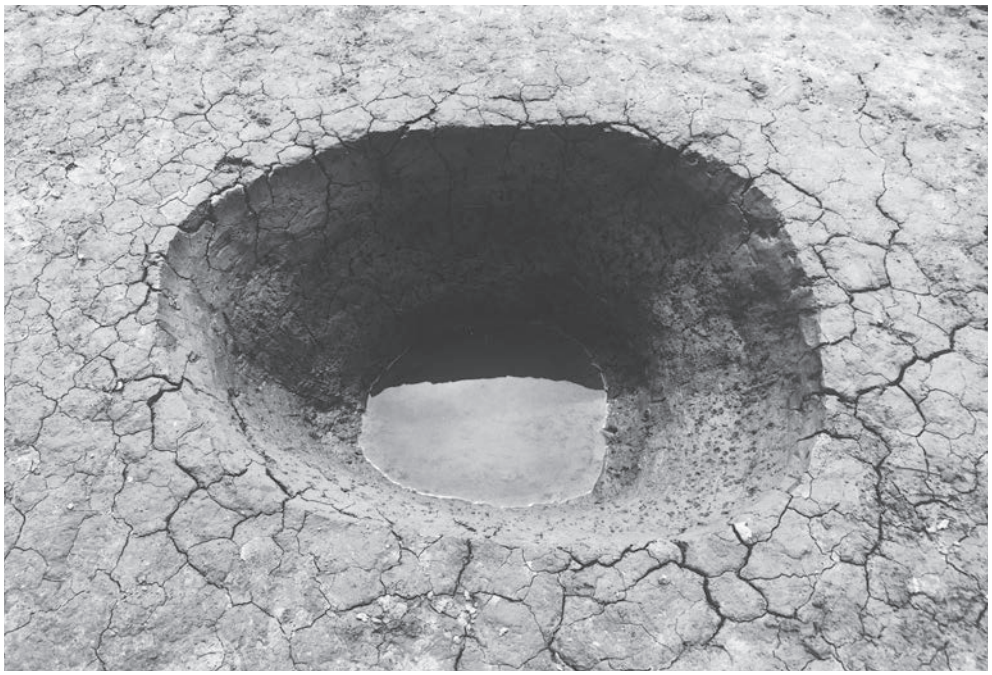
2　5 号土坑（西南から）

3　7 号土坑（北東から）

1　8 号土坑土層（北西から）

2　10 号土坑土層（南から）

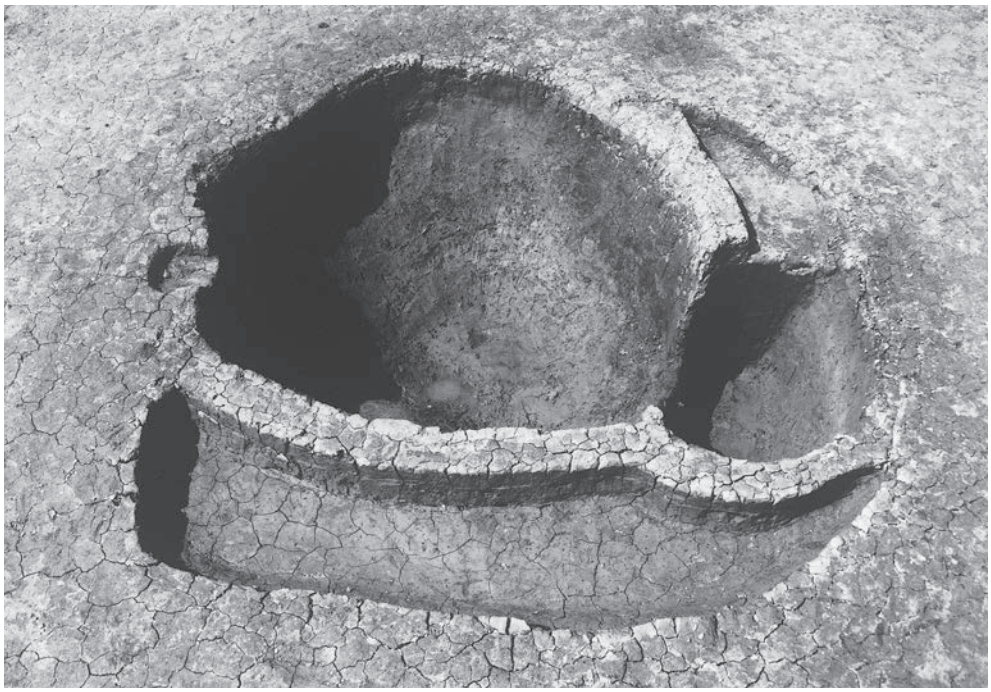
3　10・11 号土坑（南から）



1　12 号土坑（南から）

2　13 号土坑（南から）

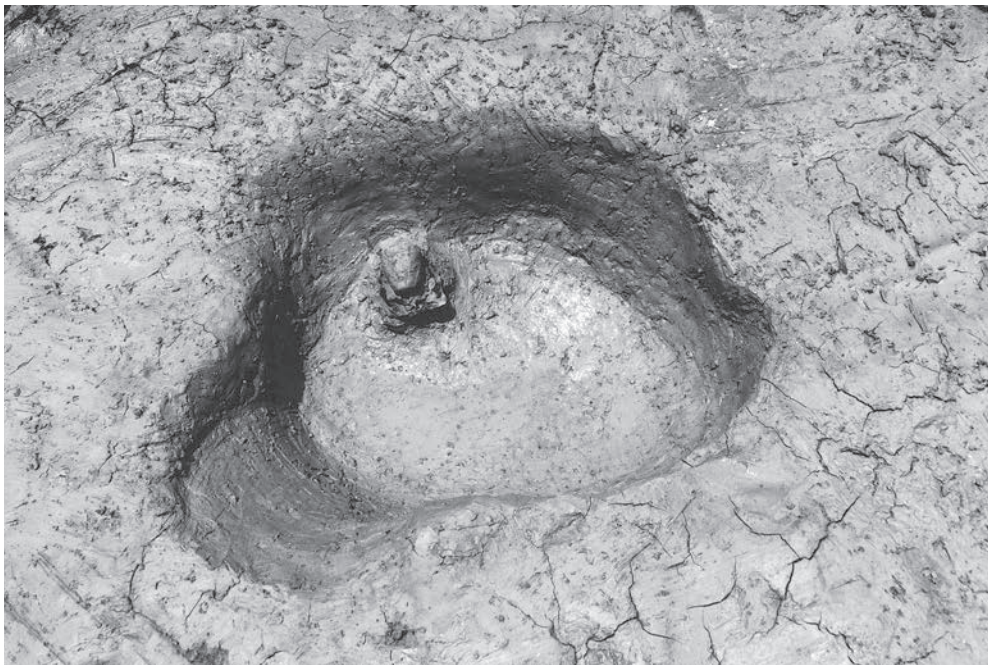
3　14 号土坑（北から）



1　15 ～ 17 号土坑土層
（北から）

2　16 号土坑土層（南東から）

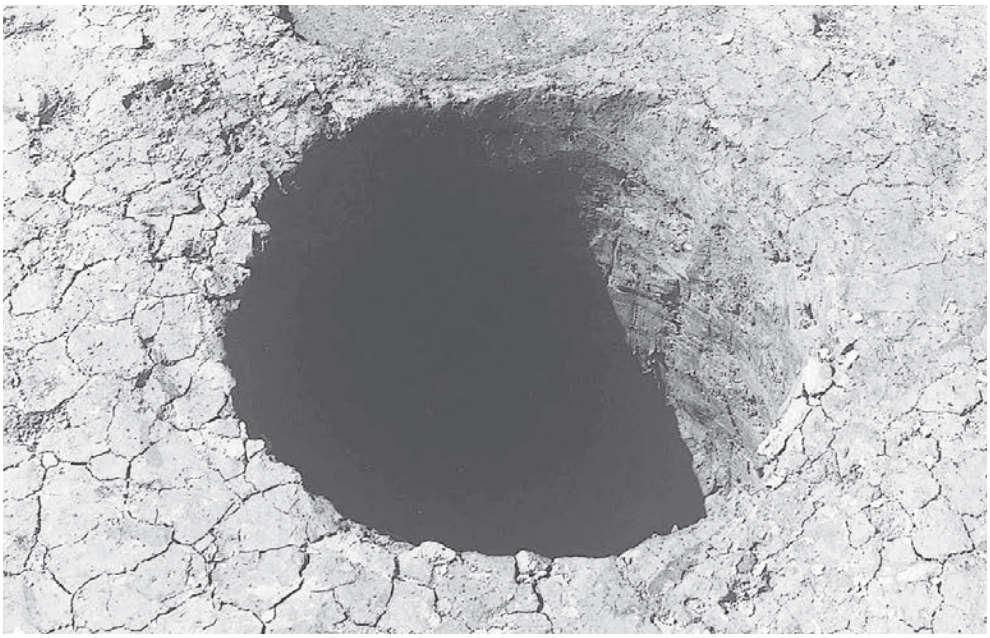
3　18 号土坑（東から）



1　19 号土坑（北から）

2　22 号土坑土器出土状況
（西南から）

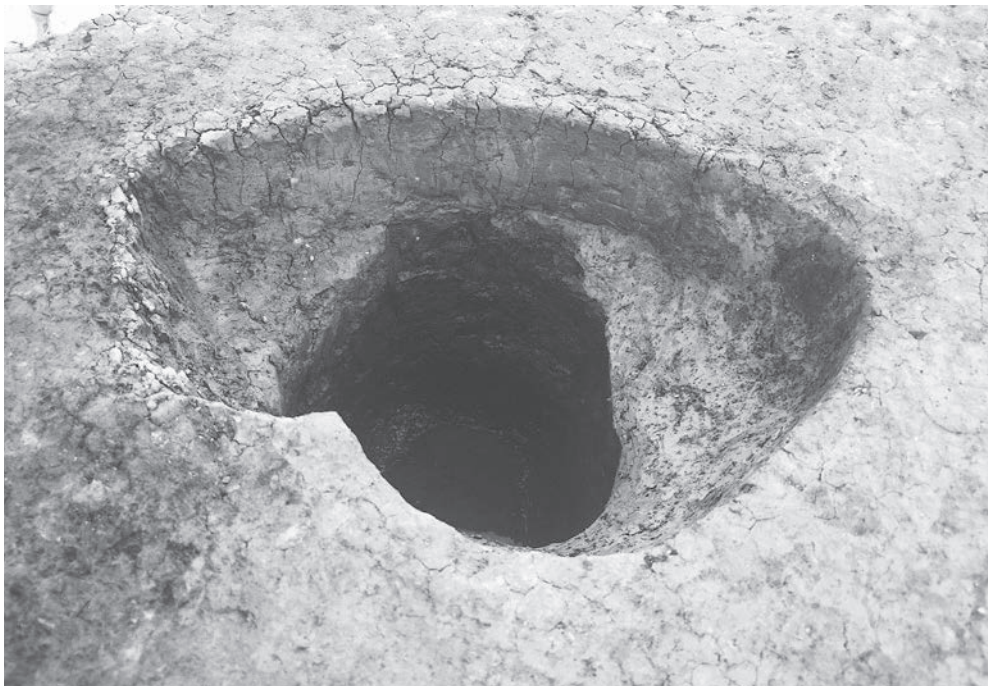
3　21・22 号土坑（南西から）



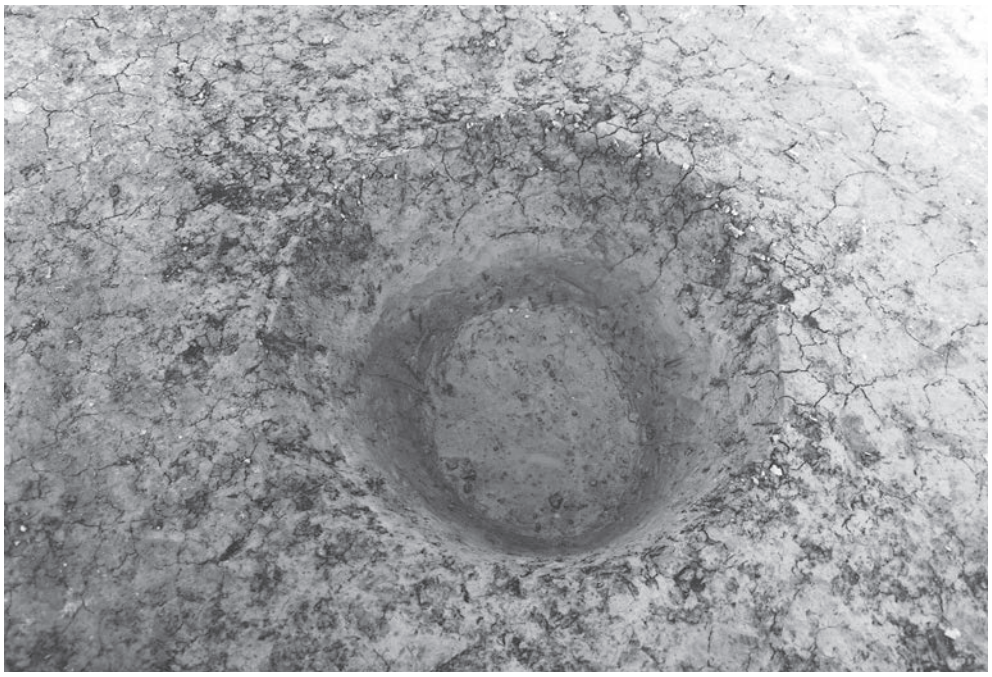
3　23 号土坑（南から）

2　24 号土坑　（北から）

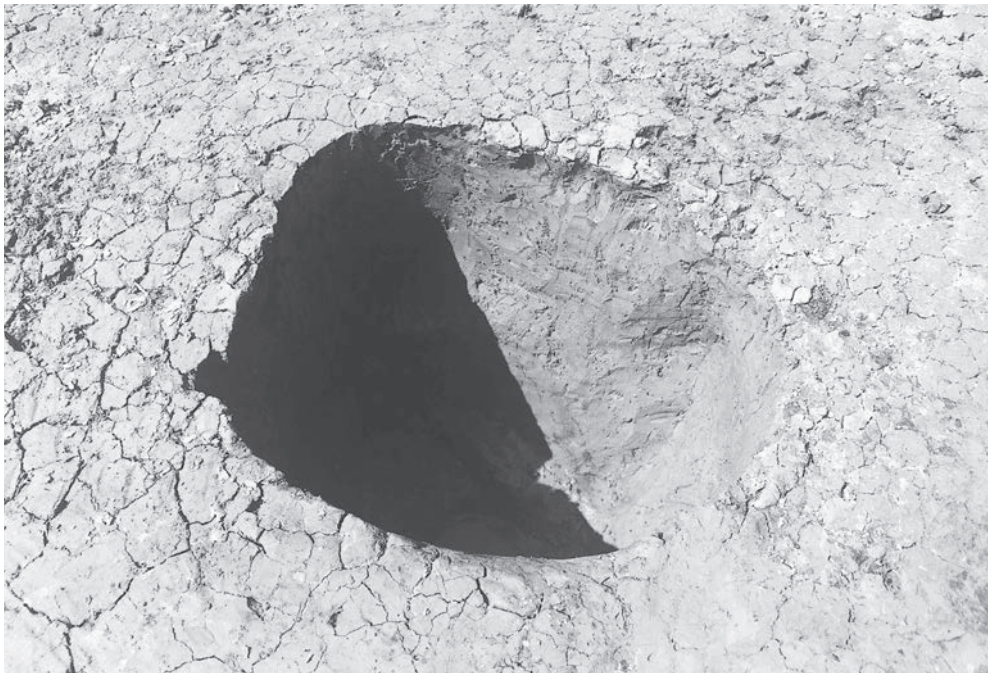
3　25 号土坑（東から）



1　26 号土坑（北東から）



2　27 号土坑（南西から）



3　28 号土坑（東から）

18-2

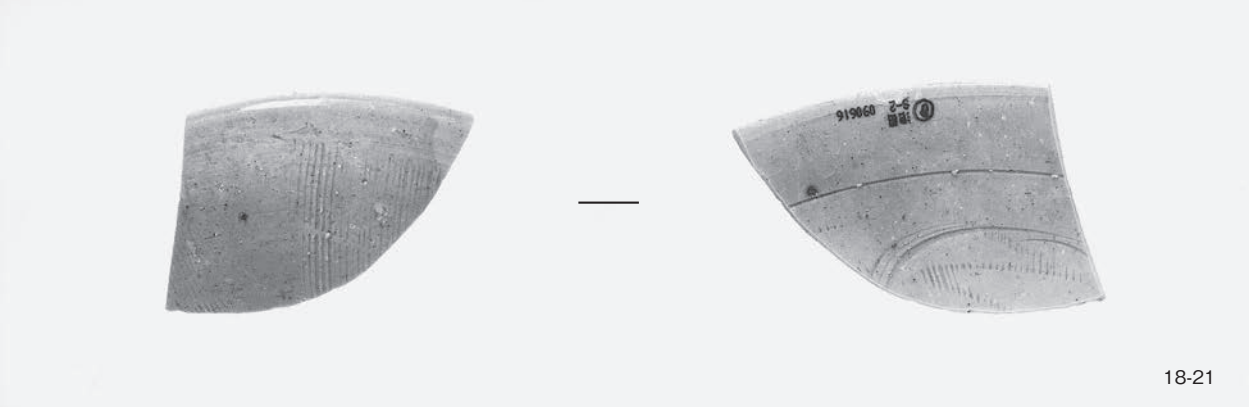
20-19

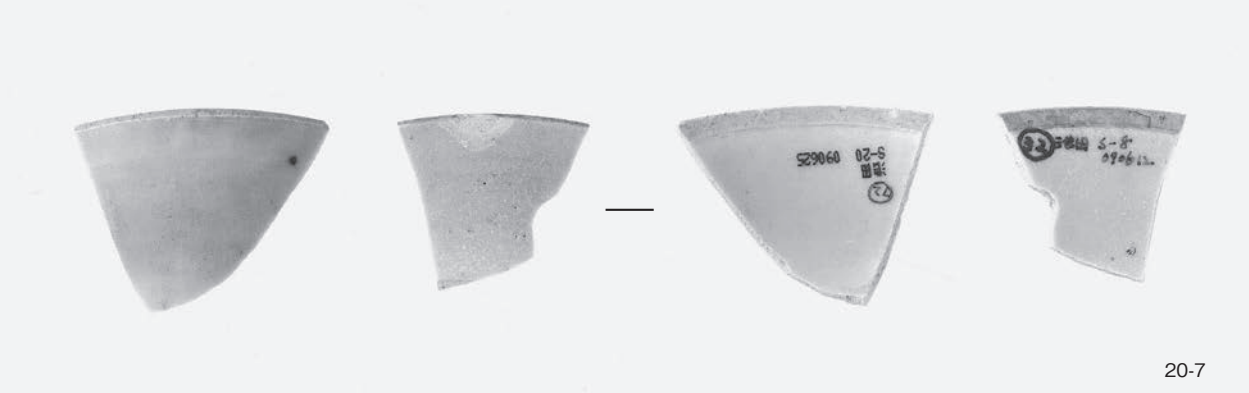
18-3

20-17

18-6

20-18


18-21

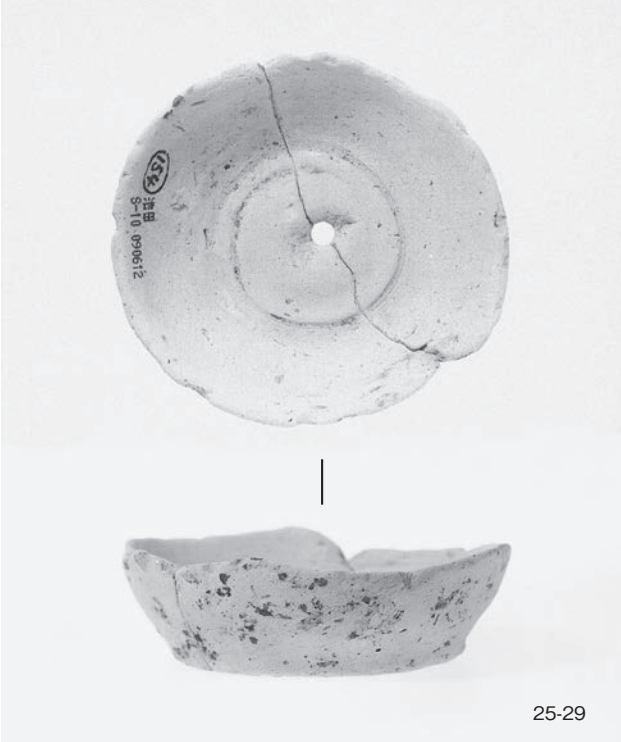

20-7

土坑出土土器・陶磁器（1）

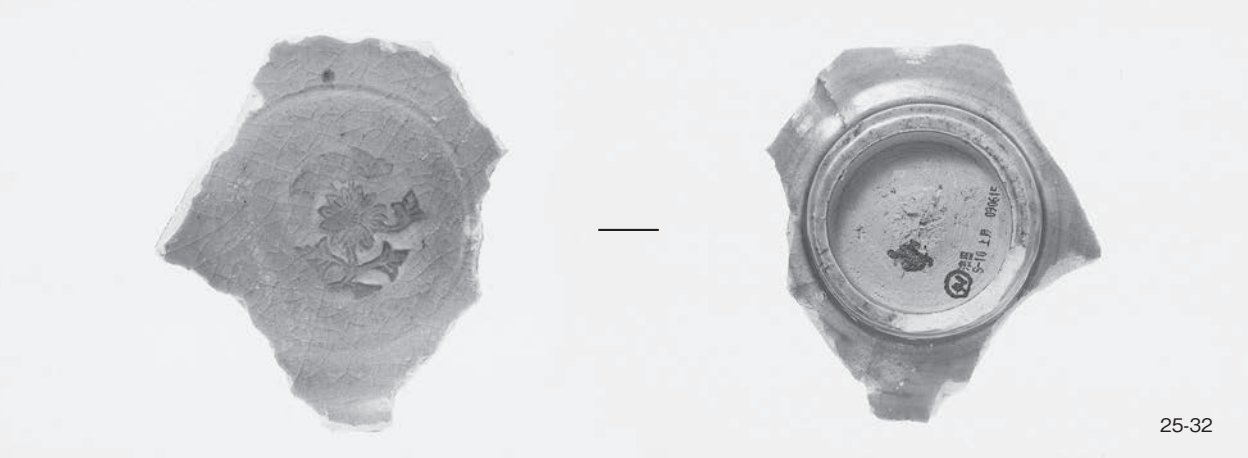
20-18

25-2

25-3


25-29

25-9


25-32

25-16

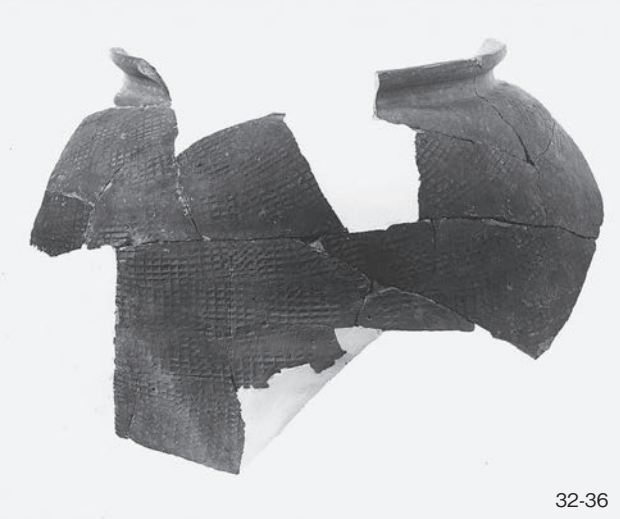
25-22

土坑出土土器・陶磁器（2）

31-25

33-46

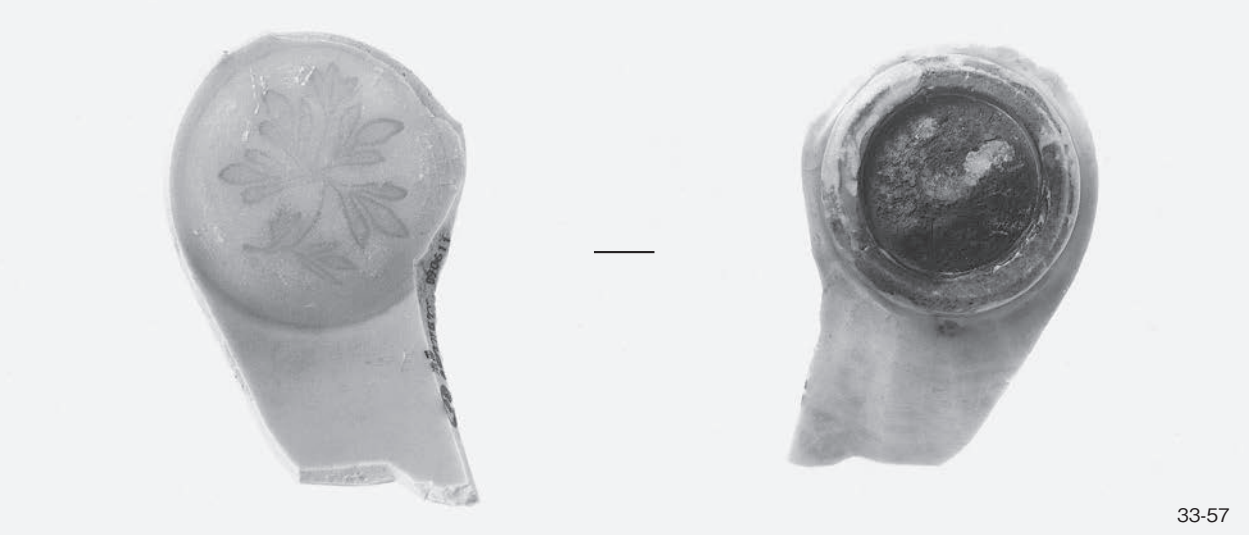
33-49


32-36

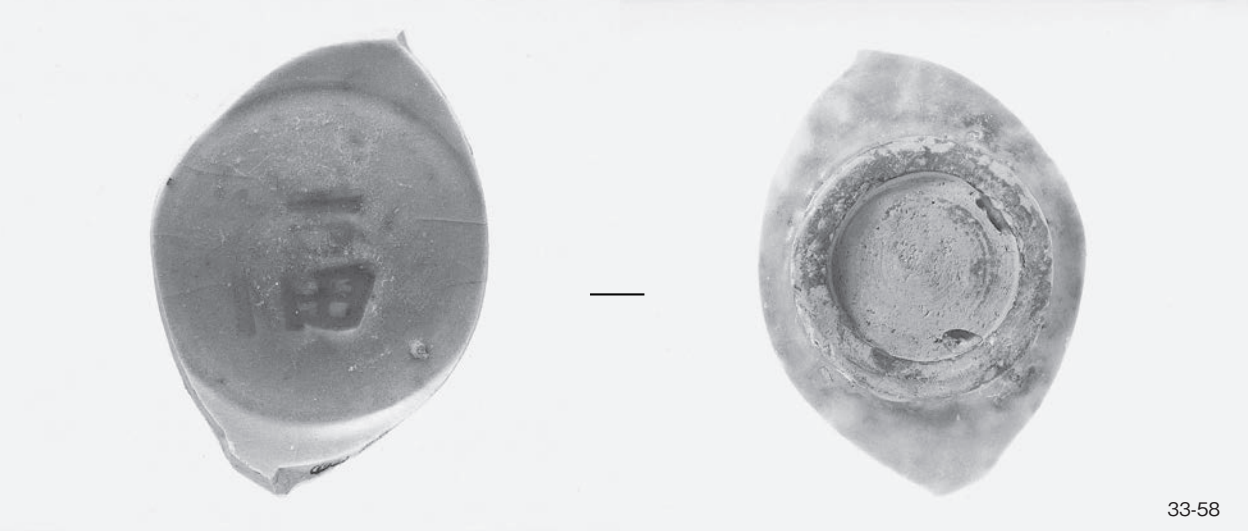
33-55

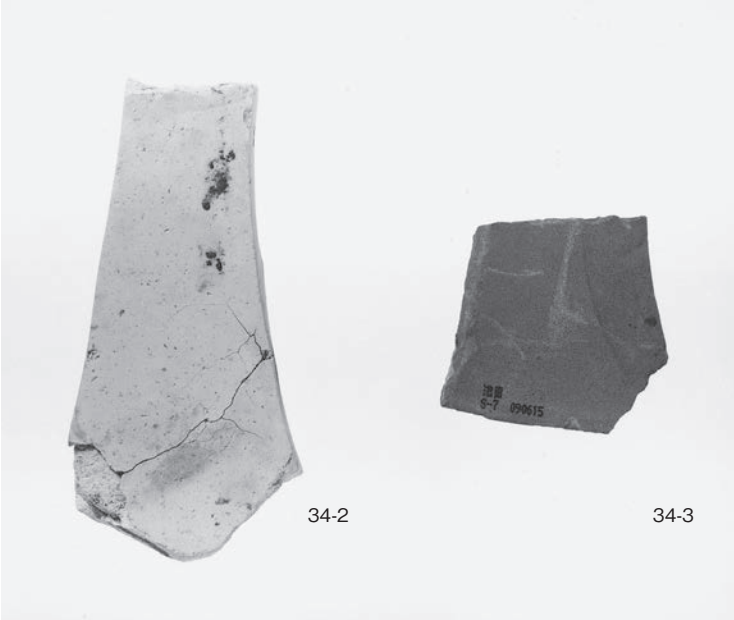
33-41

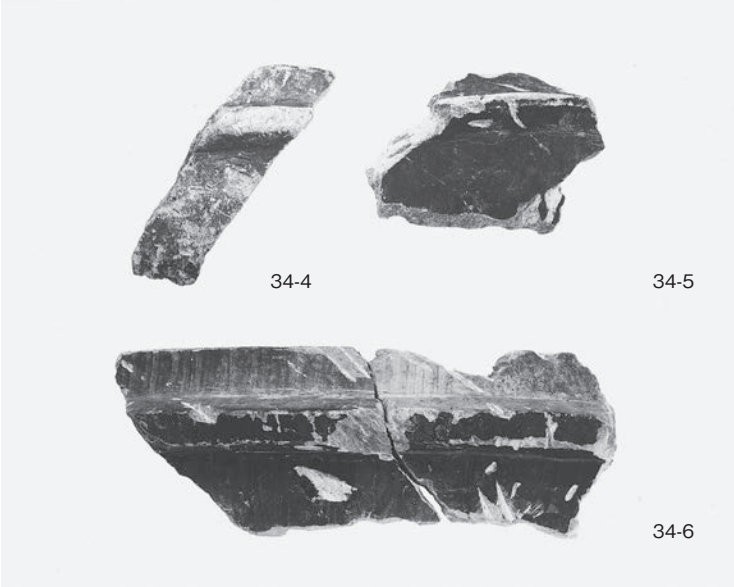
33-59


33-57

その他の出土遺物







その他の出土遺物、土製品・石製品

Ⅵ　おわりに

本報告で掲載した３つの遺跡は、同じ事業に係る調査であるものの距離も離れ、いずれも小規模の調査であることから、全てを関連づけて纏めることは難しい。このため各遺跡のまとめについては各章の小結を参照いただき、ここでは時期ごとに概観する。

弥生時代後期の遺構は、西蒲池池田遺跡で礎盤構造の掘立柱建物と土坑を検出している。これまでの周辺遺跡の調査では礎盤構造の掘立柱建物が確認されるのみで竪穴住居跡が存在せず、掘立柱建物が居住空間であると想定されている。福岡県筑後地域を含む有明海沿岸地域に見られる特徴的な集落の形態であろう。本調査では掘立柱建物は１棟の検出であるが、柳川市教育委員会が調査を実施した本調査区南東・南西隣接地では複数の掘立柱建物が確認されており、その出土状況から本調査地西南側の標高の高い地区に集落の中心があり、標高が下がる西蒲池池田遺跡を含む北東部地域にかけて展開することが考えられる。蒲池地域は縄文海進により陸地化したと想定されているが、現在確認されている周辺遺跡の状況や遺物の分布状況を見ると、潮の干満に左右されない小高い土地が各所に半島状に存在し、そこに集落が形成されていたことが想定できる。これは蒲池地域の遺跡において、牡蠣やハイガイの貝殻、魚の骨などが廃棄された状態で遺構内から多数出土すること、土錘や石錘が多数出土することなど、集落が臨海地にあったことを想像させる状況からも裏付けられるものであろう。

古墳時代後期の遺構は、西蒲池池田遺跡で少数ではあるが土坑が確認された。その形態から井戸が想定され、また南側に位置する池淵遺跡においても同様の遺構が確認されているが、いずれも湧水の痕跡は認められないため井戸と断言することは困難である。当該時期の遺構については周辺地域の発掘調査においても数が少なく、集落や生産形態の様相が不明瞭であるところが多い。ただし、南に位置する西蒲池池淵遺跡において当該時期の遺構を確認しており、また同様の形態の土坑が弥生時代終末～中世において認められることから、当地域特有の生活や生産に関わる機能を有していたことも考えられる。

今回報告した遺構の大半は中世のものである。下木佐木安堂遺跡では出土遺物が少なく時期決定は困難であるが、繰り返し掘削された溝が検出され、中世後期における水利的機能はもちろん、防御的な機能を想定できるものである。大川市・柳川市域のクリークをはじめとする水利施設が大きく整備されたのは江戸時代初頭であるが、東蒲池蓮池遺跡ほか周辺遺跡で確認されている中世の水田に関連すると考えられる溝、そして下木佐木安堂遺跡検出の溝が現クリークと方向を同一にすることもあわせ、その前身となる水利施設は中世段階で確立していたことが想定できる。これは中世後期に当地域を統治した蒲池氏による水利および防御施設の整備とも合わせ、当地域の政治的状況に合わせた土地利用のあり方を考える上で重要な成果であろう。西蒲池池田遺跡で確認した土坑については、段階により機能差が認められるが、特に隅丸長方形プランで底面が平坦にある浅い土坑は、埋土が水平堆積すること、薄い炭層が認められることから生産関連遺構の可能性も考えられる。南接する南蒲池池淵遺跡出土の同様の土坑も含めて類例を抽出し、検討することが必要である。

今回の報告では言及を先送りしたものが多いが、近年近隣地区の発掘調査が数多く行われており、それらの成果と合わせて検討するべきであると考える。今後報告予定の他遺跡をはじめとして、柳川市教育委員会の調査内容も整理した上で、改めて全体を検討したい。

第３表　東蒲池蓮池遺跡・西蒲池池田遺跡出土土器一覧表

挿図	番号	図版	出土遺構	種類	器種	登録番号	口径	器高	底径
蓮池遺跡									
12	1		2号溝	土師器	土鍋	30			
12	2	16	5号溝	青磁	椀	55	(16.0)		
12	3		7号溝	土師器	皿	58			(14.0)
12	4		8号溝	土師器	土鍋	59			
13	1		12号溝	弥生土器	甕	69			
13	2		包含層	弥生土器	甕	12			
13	3		包含層	弥生土器	甕	11			
13	4		包含層	弥生土器	甕	4			
13	5		包含層	弥生土器	甕	13			
13	6		12号溝	弥生土器	甕	67			
13	7		5号溝	弥生土器	甕	46			
13	8		包含層	弥生土器	甕	14			
13	9		包含層	弥生土器	甕	1			
13	10		12号溝	弥生土器	甕	68			
13	11		5号溝	弥生土器	甕	53			
13	12		包含層	弥生土器	甕	15			
13	13		13号溝	弥生土器	甕	71			
13	14		包含層	弥生土器	壷	8			
13	15		包含層	弥生土器	壷	10			
13	16		14号溝	弥生土器	壷	72			
13	17		包含層	土師器	壷	16	(11.2)		
13	18		5号溝	弥生土器	壷	45			
13	19		4号溝	弥生土器	広口壷	35	(13.8)		
13	20		5号溝	弥生土器	無頸壷	40	(13.0)		
13	21		9号溝	弥生土器	壷	64	(15.0)		
13	22		5号溝	手捏ね	壷	56			(3.0)
13	23		5号溝	弥生土器	底部(穿孔)	52			(6.5)
13	24		12号溝	弥生土器	底部	70			(7.2)
13	25		包含層	弥生土器	底部	6			(7.0)
13	26		包含層	弥生土器	底部	7			
13	27		5号溝	弥生土器	脚付壷	47			
13	28		包含層	弥生土器	鉢	5	(20.8)		
13	29		包含層	弥生土器	高坏	2			
13	30		1号溝	弥生土器	高坏	26			
13	31		5号溝	須恵器	壷	54			
13	32		6号溝	須恵器	長頸壷	57			
13	33		3号溝	弥生土器	支脚	32			
西蒲池池田遺跡									
18	1		1号土坑	青磁	椀	10			
18	2	28	1号土坑	青磁	椀	9	(17.0)		
18	3	28	2号土坑	土師器	皿	176	8.4	1.0	6.0
18	4		2号土坑	土師器	皿	122	(8.2)	1.3	(7.5)
18	5		2号土坑	土師器	皿	118	(8.4)	1.6	(7.0)
18	6		2号土坑	土師器	皿	124	(8.4)	1.5	(6.5)
18	7		2号土坑	土師器	皿	117	(7.8)	1.3	(6.0)
18	8		2号土坑	土師器	皿	174	8.6	2.0	6.5
18	9		2号土坑	土師器	皿	174	8.8	1.4	6.3
18	10		2号土坑	土師器	皿	144	(7.9)	1.2	(6.1)
18	11		2号土坑	土師器	皿	119	(8.9)	1.2	(6.7)
18	12		2号土坑	土師器	皿	121			6.3
18	13		2号土坑	土師器	皿	120	(7.7)	1.3	6.4
18	14		2号土坑	土師器	皿	125	(9.2)	1.4	(7.0)
18	15		2号土坑	土師器	杯	127	(11.8)	3.6	8.0
18	16		2号土坑	土師器	杯	126	(13.0)	3.3	8.1
18	17		2号土坑	土師器	杯	123			(8.8)
18	18		2号土坑	土師器	杯	179			(10.0)
18	19	28	2号土坑	土師器	杯	177	(13.1)	3.8	8.5
18	20		2号土坑	青磁	椀	11			
18	21		2号土坑	青磁	椀	8	(16.0)		
20	1		3号土坑	土師器	杯	128	(12.1)	3.2	(7.8)
20	2		4号土坑	土師器	皿	112	(7.9)	1.2	(6.0)
20	3		4号土坑	土師器	皿	113	(8.3)	1.2	(6.3)
20	4		4号土坑	土師器	杯	134			(8.5)
20	5		4号土坑	土師器	杯	133			(9.6)
20	6		5号土坑	土師器	坏	17			
20	7		5号土坑	白磁	椀	13			
20	8		5号土坑	青磁	椀	14			
20	9		6号土坑	須恵器	鉢	60			
20	10		6号土坑	須恵器	鉢	59			
20	11		7号土坑	須恵器	片口鉢	24			
20	12		7号土坑	土師器	坏	28	(13.6)	2.7	(10.2)
20	13		7号土坑	土師器	土鍋	136			
20	14		7号土坑	土師器	土鍋	25			
20	15		7号土坑	土師器	土鍋	29			
20	16		7号土坑	土師器	土鍋	23	(30.0)		
20	17	28	7号土坑	青磁	椀	22	(14.6)		
20	18		8号土坑	土師器	皿	141			
20	19		8号土坑	土師器	皿	33	(9.5)	1.6	(6.5)
20	20		8号土坑	土師器	坏	34	13.8	3.1	8.4
20	21		8号土坑	須恵器	片口鉢	30			
20	22	28	8号土坑	白磁	椀	32			
20	23		8号土坑	青磁	椀	143			
20	24		9号土坑	土師器	皿	36	(7.3)	1.3	(6.0)
20	25		9号土坑	土師器	皿	38	(7.9)	1.2	(6.6)
20	26		9号土坑	土師器	皿	39	(8.6)	1.0	(7.0)
20	27		10号土坑	土師器	皿	158	(6.9)	1.8	(4.4)
20	28		10号土坑	土師器	皿	150	(6.7)	1.8	(4.4)
20	29	28	10号土坑	土師器	皿	154	7.4	2.1	5.1
20	30		10号土坑	土師器	坏	151	(10.9)	3.3	(6.6)
20	31		10号土坑	土師器	土鍋	155			
20	32	29	10号土坑	青磁	椀	41			6.0
25	1		13号土坑	瓦質土器	片口鉢	57			
25	2	29	13号土坑	土師器	杯	178	(12.4)	2.7	(9.8)
25	3		13号土坑	青磁	椀	48	(12.0)		
25	4		14号土坑	須恵器	鉢	55			
25	5		14号土坑	青磁	椀	56			
25	6		15号土坑	須恵器	鉢	71			
25	7		15号土坑	土師器	杯	77	(13.1)	3.0	(10.7)
25	8		15号土坑	瓦質土器	すり鉢	80	(26.6)		
25	9		15号土坑	青磁	椀	73			
25	10		15号土坑	白磁	椀	75			
25	11	28	15号土坑	白磁	椀	72	(12.0)		
25	12		16号土坑	土師器	杯	161			(8.2)
25	13		18号土坑	土師器	皿	94			(5.0)
25	14		18号土坑	土師器	坏	95			(8.0)
25	15		19号土坑	弥生土器	壷	97			(9.0)
25	16		19号土坑	手捏ね	坩	109	6.5～7.5	6.4～	3.8～4.0
25	17		20号土坑	弥生土器	甕	98			
25	18		20号土坑	弥生土器	底部	99			(8.4)
25	19		20号土坑	弥生土器	壷	100			6.2
25	20		21号土坑	弥生土器	壷	69			
25	21		21号土坑	弥生土器	底部	68			7.9
25	22		22号土坑	弥生土器	鉢	96	30.4	6.3	14.4
29	1		24号土坑	青磁	椀	67			
29	2		26号土坑	須恵器	蓋	21			
29	3		26号土坑	須恵器	蓋	19			
29	4		26号土坑	土師器	坏	18			
29	5		28号土坑	須恵器	瓶	114			
29	6		28号土坑	土師器	甕	64	(10.5)		
29	7		28号土坑	土師器	甕	62	(12.4)		
29	8		28号土坑	土師器	甕	63	(13.6)		
29	9		28号土坑	土師器	甕	140	(19.7)		
29	10		28号土坑	土師器	甑	70			
30	1		黒色土包含層	土師器	皿	139	(7.4)	1.5	(6.4)
30	2		黒色土包含層	土師器	杯	138	(12.9)	2.9	(8.3)
30	3		黒色土包含層	白磁	椀	106	(16.2)		
31	1		12号土坑	土師器	杯	47	(12.1)		
31	2		13号土坑	土師器	杯	49	(14.5)		
31	3		5号土坑	土師器	坏	15	(11.7)		
31	4		1号土坑	弥生土器	甕	2	(22.4)		
31	5		3号土坑	弥生土器	甕	131			
31	6		床土	弥生土器	甕	102			
31	7		1号土坑	弥生土器	甕	1			
31	8		3号土坑	弥生土器	甕	132			
31	9		10号土坑	弥生土器	甕	153			
31	10		1号土坑	弥生土器	甕	6			
31	11		12号土坑	弥生土器	甕	46			
31	12		8号土坑	土師器	甕	31	(15.4)		
31	13		10号土坑	土師器	甕	40	(17.4)		
31	14		10号土坑	弥生土器	壷	152			
31	15		1号土坑	弥生土器	壷	5			
31	16		10号土坑	弥生土器	壷	156			
31	17		床土	弥生土器	壷	103			
31	18		2号土坑	弥生土器	底部	149			6.7
31	19		12号土坑	弥生土器	底部	45			(7.0)
31	20		2号土坑	弥生土器	底部	145			6.1
31	21	30	9号土坑	弥生土器	底部	64			(8.0)
31	22		26号土坑	弥生土器	底部	20			(6.4)
31	23		表土	土師器	壷	111			
31	24	30	3号土坑	弥生土器	支脚	129			
31	25	30	6号土坑	弥生土器	器台	61			12.1
31	26		18号土坑	弥生土器	器台	93			(12.0)
31	27		12号土坑	土師器	甑	44			
32	28		8号土坑	須恵器	杯蓋	142			
32	29		2号土坑	須恵器	杯身	146			
32	30		15号土坑	須恵器	杯身	76			
32	31		2号土坑	須恵器	杯身	147	(13.0)		
32	32		12号土坑	須恵器	高坏	43			(16.1)
32	33		7号土坑	須恵器	瓶	27			
32	34		旧クリーク	須恵器	瓶	83			
32	35		7号土坑	須恵器	壷	135	(31.0)		
32	36	30	不明	須恵器	甕	171			
33	37		カクラン	土師器	皿	183	(8.4)	1.5	(6.1)
33	38		カクラン	土師器	皿	185	8.6	1.9	6.5
33	39		カクラン	土師器	皿	182			6.0
33	40		カクラン	土師器	皿	191	(8.0)	1.5	(7.2)
33	41	30	表土	土師器	皿	164	8.2	2.0	6.3
33	42		表土	土師器	皿	167	(8.6)	1.5	(7.0)
33	43		カクラン	土師器	皿	181	(9.2)	1.4	(7.4)
33	44		カクラン	土師器	皿	188	(10.2)	1.8	(8.2)
33	45		カクラン	土師器	皿	186	(8.8)	1.2	(7.2)
33	46	30	カクラン	土師器	皿	184	8.6	1.8	7.0
33	47		カクラン	土師器	皿	190	(9.3)	1.5	(7.0)
33	48		カクラン	土師器	皿	189	(9.4)	1.7	(6.6)
33	49	30	カクラン	土師器	皿	180	9.2	1.5～	7.6
33	50		表土	土師器	坏	110	(12.6)	3.5	8.3
33	51		カクラン	土師器	杯	187	(13.0)	3.1	(9.4)
33	52		表土	土師器	杯	163	(12.2)	2.7	(9.9)
33	53		表土	土師器	坏	169			(8.5)
33	54		旧クリーク	素焼き土器	火置き	89			9.8
33	55	30	表土	瓦質土器	鉢	170	(26.4)	9.3	(8.4)
33	56		旧クリーク	土師器	土鍋	87			
33	57	31	表土	青磁	椀	108			5.0
33	58	30	表土	青磁	椀	172			5.0
33	59	31	カクラン	青磁	坏	101	(12.0)		
33	60		旧クリーク	青磁	椀	81			6.2
33	61	31	表土	白磁	皿	104			5.6

報 告 書 抄 録

ふりがな	しもきさきあんどういせき・ひがしかまちはすいけいせき・にしかまちいけだいせき
書　　名	下木佐木安堂遺跡・東蒲池蓮池遺跡・西蒲池池田遺跡
副 書 名	国道385号三橋大川バイパス道路改良事業に伴う発掘調査報告書　第1集
シリーズ名	福岡県文化財調査報告書
シリーズ番号	第236集
編著者名	齋部麻矢（編集）　坂元雄紀
編集機関	九州歴史資料館
所 在 地	〒838-0106　小郡市三沢5208-3　TEL 0942-75-9575　FAX 0942-75-7834 E-mail　kyureki@pref.fukuoka.lg.jp
発行年月日	2012年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
しもきさきあんどういせき 下木佐木安堂遺跡	ふくおかけんおおおかわししもきさき 福岡県大川市下木佐木	402125		33°12′04″	130°24′13″	2008.12.8 ～ 2009.1.9	620	道路改良
ひがしかまちはすいけいせき 東蒲池蓮池遺跡	ふくおかけんやながわしひがしかまち 福岡県柳川市東蒲池	402079	080034	33°10′57″	130°24′17″	2004.8.3 ～ 2004.8.31	158	
にしかまちいけだいせき 西蒲池池田遺跡	ふくおかけんやながわしにしかまち 福岡県柳川市西蒲池	402079	080051	33°11′14″	130°24′16″	2009.6.8 ～ 2009.7.17	996	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下木佐木安堂遺跡	集落跡	中世後期	土坑 溝	土師器・須恵器・陶磁器・動物遺体・軽石	
東蒲池蓮池遺跡	集落跡	中世後期 ～近代	溝	土師器・須恵器・陶磁器・軽石	
西蒲池池田遺跡	集落跡	弥生時代後期 古墳時代後期 中世前期 ～中世後期	土坑 ピット 包含層	土師器・須恵器・陶磁器・石器・土製品・ 焼土塊	

要約	有明海沿岸地域に位置する3カ所の遺跡について報告している。大川市所在下木佐木安堂遺跡では特異な深い溝が複数検出され、繰り返しの掘削により継続して使用されており、水利および防御に関わる機能が想定される。 柳川市所在東蒲池蓮池遺跡では中世後期～近代の溝が検出され、水田や生活水利に関わるものと考えられる。 同柳川市西蒲池池田遺跡では弥生時代後期～中世の遺構を検出した。弥生時代後期では掘立柱建物と土坑が検出され、集落の縁辺部にあたると考えられる。古墳時代後期では井戸状の深い土坑を検出したが用途は不明である。中世前期～中世後期では複数の土坑が検出し、これらは形状や埋土、切り合い関係から大きく3時期に分けられる。用途については今後の検討が必要であるが、炭や焼土の出土から生産関連の遺構とも考えられる。

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2114107
登録年度 23	登録番号 0010

国道385号三橋大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告書　第1集

下木佐木安堂遺跡・東蒲池蓮池遺跡・西蒲池池田遺跡

福岡県文化財調査報告書　第236集

平成24年3月31日

発行　九州歴史資料館
小郡市三沢5208-3

印刷　株式会社 四ヶ所
福岡県朝倉市馬田336